

環境活動34の証言



3.11あの時

Stage 2012

東日本大震災 2011年3月11日(金)14時46分からの物語

～そしてこれから～

2011年3月11日(金)。

あれから2年。

東北の人々が見てきたもの。

多くの喪失の中で学んだもの。

大震災からの34の教訓をお届けします。

東北地方太平洋沖地震により被災されました多くの皆様に、心からお見舞いを申し上げます。
また、この大震災により犠牲になられました皆様の、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



環境省 東北地方環境事務所 所長

鳥 居 敏 男

東日本大震災から3度目の桜の季節が巡って来ました。同じ桜であっても見る人の意識や取り巻く環境が時間とともに変化すれば、桜に対する思いも自ずと変わるはず。みなさんはどのような思いで桜を眺められたでしょうか。

本書は平成24年5月に発行された「3.11あの時」の続編です。前回と同様、東北環境パートナーシップオフィス（EPO東北）のスタッフが、震災からの復興に関わる個人、団体、NPO、企業などへ「その時」と「その後」、そして「これから」についてヒアリングを行なったものです。収録された「声」を拝読し、実に多くの方が様々な課題に取り組まれていることを改めて実感しました。また、未来に向けて「必ずや復興するぞ」という力強い思いがひしひしと感じられました。

とはいえ、被災地の復興にはまだまだ時間がかかることも明らかなです。瓦礫で埋め尽くされていた市街地は、今ではすっかり片付けが進みましたが、暮らしの痕跡まで消えてしまい、かつての賑わいや温もりが伝わって来ない、そんな寂しさが感じられます。そんな辛い思いを乗り越え、未来に向かって復興の絵姿を描くためには、地域の方々と支援者の強い連携が必要です。本書に収録された「声」からは、被災した方の身になって何かを行おうという温かい気持ちがいしんと伝わって来ます。また、今後起こりうる自然災害への対応という観点からも多くの有益な指摘が含まれています。

震災以降、人間が持つ技術の限界を認識し、改めて人と自然の関わり方を見直そうとする機運が盛り上がりました。しかし2年以上を経て、その流れが弱まりつつあるように感じられます。本書は、単に災害への備えという意味だけでなく、改めて私たちの暮らし方ひいては文明のあり方そのものを問い直すという意味においても示唆に富む内容です。私たちの子孫が100年後にこの本を読んだとき、「あの時こうしておけば」と後悔しないよう、本書が広く読まれ、そして活用されることを切に願います。



公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）理事長

長谷川 公 一

人の数だけの希望の物語 stage 2

東日本大震災から2年あまり。宮城・岩手県では倒壊した建物のほとんどはおおむね跡形もなく片付けられ、瓦礫処理もすすみ、被災地には更地がひろがっている。ただただ「空白」だけが目立つ「真空地帯」のような印象だ。街の再建、まちづくりはまだ緒についたばかりだ。住宅の再建、農・漁業の再建、雇用の確保等々、課題は山積みだ。

今もおおむね自宅に戻れない人びとは約31万人。その約半数は、福島第一原発事故の影響で戻れない人びとだ。放射能という見えざる恐怖が相手だけに、人びとはさまざまに分断を余儀なくされ、深く傷ついている。

本書は『3.11 あの時』の続編であり、EPO 東北が、2012年度にウェブに掲載した34件の聞き書きの記録である。青森・秋田・山形県などからの支援者からの聞き取りが多いのが特色である。どんな小説も、どんなTVドラマや映画も及ばない、3.11後の重い「現実」との格闘の物語だ。今も日々生きられ、日々作られている無名の市民の歴史だ。ひとりひとりの行動力、決断力、感受性、優しさ、ひたむきさに、頭が下がる。救援・復興の具体的な活動に裏づけられた雄弁な言葉の力がある。3.11後の現実重い、希望は決して失われてはいない。東日本大震災から人びとが何を学んだのか、学びつつあるのかの貴重な証言録だ。先祖の工夫や知恵、地名に託された地域の災害の歴史等々、わたしたちが自然との関係の中から学ぶべきものは多い。

「生き残った者の務めは、未来に向かって歩き出すことだろう」。津波に流されていく自宅を目撃せざるをえなかった南三陸町の後藤一磨さんの言葉だ。風見正三さんの言葉のように「あの日失われた命を想わない日はない」。本書は、生き残った者たちが、過去を振り返り愛しみつつ、地域の失われた豊かな歴史と命の尊さを想いつつ、未来に向かってどのように歩み出しつつあるのか、という証言録である。何度も味読いただきたい。

1. ヒアリング団体所在地	5
2. 3.11 あの時 Stage 2012 —そして、これから—	7
青森県	
Report.1 五所川原市 越谷 晋樹、佐藤 匠、中谷 純香（青森県立五所川原農林高等学校） 被災した宮城農業高校との交流活動で感じたもの	7
Report.2 弘前市 渋谷 拓弥（NPO 法人 ECO リパブリック白神） その一言で、村の人たちが全てを受け入れてくれるようになった。	10
宮城県	
Report.3 石巻市 川村 久美（NPO 法人いしのまき環境ネット） 「ありがとう」の言葉が活動の原動力。かけぬけた 1 年間。	12
Report.4 仙台市 足立 千佳子（NPO 法人まちづくり政策フォーラム） 「被災者」「支援者」ではなく、地元の人間として一緒に活動したい。	13
Report.5 気仙沼市 菊地 ひろ子（個人） 海と共に、気仙沼で生きてきたことは誇り。	15
Report.6 気仙沼市 山内 宏泰（個人） シャッターを切った理由。ただの記録ではなく、記憶を後世に。	17
Report.7 仙台市 山岡 講子（NPO 法人環境会議所東北） これから未来を担う人たちに、夢のある未来を描いてほしい。	20
Report.8 大崎市 大沼 伸治（旅館大沼） 温泉に入ることと地球とつながり、自然と共生する。	22
Report.9 南三陸町 後藤 一磨（個人） 南三陸町から新たなライフスタイルや価値観を提案していきたい。	24
Report.10 大崎市 太宰 幸子（宮城県地名研究会） 地名に込められた先人からのメッセージ。	28
Report.11 仙台市 広瀬 剛史（ReRoots） 地域が存続できる農業を目指したい。	31
Report.12 刈田郡 海藤 節生（NPO 法人 水守の郷・セケ宿） 地域の人が気兼ねなく集まれる、そして楽しめる場づくりを	37
Report.13 仙台市 風見 正三（宮城大学） 志の連鎖。未来への希望を絶やさない。	39
Report.14 仙台市 小金澤 孝昭（宮城教育大学） 子どもたちと、ともに学びあうことが ESD をはじめる第一歩。	42
秋田県	
Report.15 秋田市 菊地 格夫（NGO RASICA） 思いついたらアクション。支援活動で生まれた多くのつながり。	45
Report.16 秋田市 船山 仁（NPO 法人秋田バドラーズ） お互い様。支援活動は地元の方々が動き出すきっかけに。	47
Report.17 秋田市 畠山 順子（秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」指定管理者 NPO 法人あきたパートナーシップ） 同じ東北の秋田で暮らす私たちの想い。	50
Report.18 秋田市 鏡 啓記（NPO 法人あきた地域資源ネットワーク） それぞれの土地にある多くの智恵を、次の世代に	53



山形県	Report.19 山形市 齋藤 和人 (NPO 法人山形の公益活動を応援する会・アミル) 連携し、協働することでさらに力は強くなる。……………	56
	Report.20 天童市 武内 賢二 (ソーラーワールド株式会社) 「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。……………	59
	Report.21 高島町 村上 奈美子 (高島町生活環境課) 避難者に寄り添いたい。他人事をいかに自分事にできるかが大切。……………	62
	Report.22 上山市 村松 真 (東北創生研究所) 私たちは挑戦していかなければならない……………	66
福島県	Report.23 いわき市 吉田 恵美子 (いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター) 福島のこれからの 10 年、20 年、30 年後に向けた動きを。……………	69
	Report.24 いわき市 橋本 孝一 (いわき地域環境科学会) 子どもたちに海で遊んで欲しい。……………	71
	Report.25 福島市 清水 義広、阿部 浩美 (NPO 法人市民放射能測定所) 放射能に対する緊張感が薄れていくことも危険。……………	73
	Report.26 南相馬市 長澤 利枝 (NPO 法人福島環境カウンセラー協会) 環境カウンセラーとして伝え続けた被災地の状況……………	75
	Report.27 相馬市 小幡 広宣 (相馬遊楽応援団) キーワードは「お互い様」……………	77
	Report.28 相馬市 新妻 香織 (NPO 法人フー太郎の森基金) 震災後の思い、志が未来に伝わるものに……………	80
	Report.29 南相馬市 須藤 栄治 (つながろう 南相馬！) 「ありがとうからはじめよう！」……………	83
	Report.30 いわき市 小宅 幸一 (いわき地域学曾) 今回の震災を何とかカタチに残して、後世に伝えたい。……………	85
その他	Report.31 札幌市 有坂 美紀 (個人) 石巻で出会った人たちは、わたしの宝物。……………	88
	Report.32 函館市 堀池 舞子、小柳 元樹、中村 かれん (NPO 法人アプカス) 本吉町は自然と共生している素敵な町。……………	91
	Report.33 水戸市 廣水 乃生 (コミュニティファシリテーション研究所) 自分たちの力を取り戻すための、福島での対話の場づくり……………	95
	Report.34 東京都 藺田 綾子 (結結プロジェクト事務局／株式会社クレアン) 女性リーダーを応援する結結プロジェクト……………	98
3. 編集後記 「3.11 あの時」取材を経て……………		104



ヒアリング団体所在地

「3.11 あの時」(別冊)

取材：2011年4月～2012年3月
発行：2012年5月31日
表記：2011 Report1～40

「3.11 あの時 stage 2012」(本誌)

取材：2012年6月～2013年2月
発行：2013年5月31日
表記：Report1～34

発生時刻 2011年3月11日(金) 14時46分頃
発生場所 三陸沖(北緯38度06.2分 東経142度51.6分 深さ24km)
最大震度 7
発震機構 西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型

被害状況(2013年5月10日現在)

	死 者	行方不明者	家屋全壊	道路損壊	橋梁被害	堤防決壊
岩手県	4,673	1,150	18,370	30	4	-
宮城県	9,537	1,312	82,855	390	12	45
福島県	1,606	210	21,165	187	3	-
全国合計	15,883	2,676	126,419	4,200	116	45

※出典：警察庁緊急災害警部本部発表「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」

五所川原市
Report.1
五所川原市
Report.2
三沢市
2011 Report.39

秋田市
Report.15
Report.16
Report.17
Report.18

天童市
Report.20
山形市
Report.19
上山市
Report.22
高畠市
Report.21

盛岡市
2011 Report.2 2011 Report.3
花巻市
2011 Report.6
遠野市
2011 Report.1 2011 Report.8
2011 Report.4
大槌町
2011 Report.9
釜石市
2011 Report.7
陸前高田市
2011 Report.5

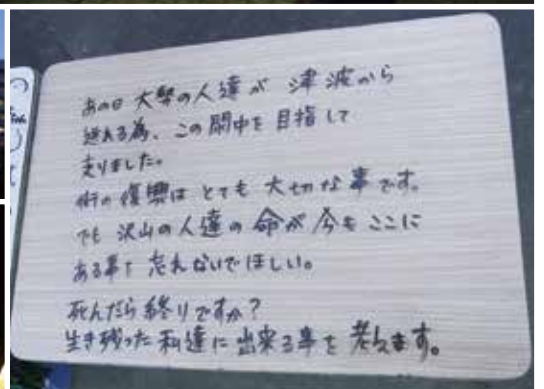
栗原市
2011 Report.18
気仙沼市
Report.5 Report.6
大崎市
Report.8 2011 Report.19
Report.10 2011 Report.20
南三陸町
Report.9
石巻市
Report.3 2011 Report.23
2011 Report.21 2011 Report.24
塩竈市
2011 Report.25

仙台市
Report.4 2011 Report.12 2011 Report.26
Report.7 2011 Report.13 2011 Report.28
Report.11 2011 Report.14 2011 Report.29
Report.13 2011 Report.16 2011 Report.30
Report.14 2011 Report.17
2011 Report.11 2011 Report.22

名取市
2011 Report.10 2011 Report.27
刈田郡七ヶ宿町
Report.12 2011 Report.15

相馬市
Report.27 2011 Report.31
Report.28 2011 Report.32
南相馬市
Report.26 Report.29
福島市
Report.25 2011 Report.33
郡山市
2011 Report.34
いわき市
Report.23 2011 Report.35
Report.24 2011 Report.36
Report.30 2011 Report.37

その他
札幌市 Report.31
函館市 Report.32
水戸市 Report.33
東京都 Report.34
宮崎市 2011 Report.38
東京都 2011 Report.40



学校

被災した宮城農業高校との交流活動で感じたもの

五所川原市

越谷 晋樹 佐藤 匠 中谷 純香 青森県立五所川原農林高等学校

取材日 2012.08.23

校訓「正剛明朗」に示された「地域を愛し、強い意志をもった人間形成を図る」ため、教育方針及び指導の重点による教育活動の推進を通して、地域に根ざした豊かな学校を構築することを目標としている。震災後、「農業クラブ」のつながりにより津波で被災した宮城県農業高等学校との相互交流を通じて、農業に対する考え方を新たにした。

3月11日 14時46分

【佐藤さん（写真左）】その日の最後の授業中で、はじめはちょっと揺れたなと思った程度だったが、結構大きな揺れになった。ちょうど越谷先生の授業中だった。

【越谷先生（写真右）】校舎のつなぎ目が軋んだ。コンクリートの部分が動いてガシガシと今まで聞いたことがないような音を立てていた。

【中谷さん（写真中央）】机も椅子も大きく動いていた。

【佐藤さん】今まで生きてきた中で一番大きな地震だった。

【越谷先生】人生で最も大きな地震に直面した生徒たちだが、比較的冷静だった。何事か？という感じだった。なんでこんなに揺れているのだろうと。

【中谷さん】親と連絡がつかない同級生たちと叔父の車に乗って家に送る途中、車のワンセグに津波の映像が映し出されるのを観た。現実とは思えない状況が次々と報道されていた。

【佐藤さん】震災の状況は携帯電話のワンセグで見た。仙台で家の2階まで津波が来ているのを見て、なんだこれかと思った。直感的に仙台かどこかで大きな地震が起きたのだと思ったが、津波は予想していなかったので何が起きたのかと思った。

【越谷先生】まさかあんな壊滅的な被害をもたらすほどの津波が押し寄せているとは思わなかった。ホームルームを終え帰宅手段が確保された生徒は帰し、そのほかの生徒の家庭と携帯電話でなんとか連絡し、迎えに来られる保護者がいたらまともに送ってもらうようにした。どうしても帰れない生徒がいて車に乗せて自宅まで送った時に



左：佐藤さん、中央：中谷さん、右：越谷先生

車載のワンセグテレビを見て、これはひどいなと思った。それまでは全然分からなかった。

【越谷先生】【中谷さん】【佐藤さん】

地震直後に停電になり、丸1日復旧しなかった。水道、ガスは大丈夫だった。食料はさほど困らなかったが、ガソリン不足は大変だった。給油のために並ぶ車の列が1週間ほど続いた。近くのコンビニは夕方には物がなくなっていたが、親や親戚に農家がいることで食料に困るほどの状況にはなかった。五所川原という地域は農業が盛んで、米や野菜など食べ物を保存する文化があるおかげでもあった。

被災した宮城農業高校との交流

【中谷さん】宮城農業高校で農業クラブの東北大会が開かれる予定だったが、津波で校舎が被害を受け開催が不可能となった。翌年の担当校であった五所川原農業高校が繰り上げで担当となったことから、宮城農業高校との交流が始まった。

【越谷先生】事務局は東北地区で、持ち回りで担当している。校舎が被災したため、宮農の先生が五農に来校し、繰り上がりでの事務局担当をお願いに来られた。私と宮農の先生の顧問同士の間で

「何かできることはありませんか？」と連絡を取り合うことから始まり、できることを考えた。農業クラブ東北大会に先駆けて、東日本大震災の被災による宮城県の状況を理解し、これからの環境やエネルギーについて協議し、また農業高校としてできる役割について、交流会を通じて体得し、今後の学習や人生における多様な変化に対応できる人材を育成することを目的に「五農グリーンツーリズム」を企画することになった。

【佐藤さん】ニュースなどで被災の様子は目にしていたが、実際に自分たちが被災された生徒と接することはないと思っていたので、宮農との交流に不安はあったが、自分の中で将来活かせるようにしたいと思った。

【中谷さん】初めての交流は、宮農と五農でグリーンツーリズムを行なうことになった。震災で自分たちの学校が津波の被害にあった人たちが来るので、どう接すればよいのか本番までずっと考えていた。あまりはしゃいでもいけないだろうし、暗すぎても駄目だろうし、何を話せばいいのだろうという心配があった。

【越谷先生】宮農との最初の交流を2011年8月3日の五農グリーンツーリズムに決定した。これに向け夏休みから準備を始めた。どこかの大会や東北のリーダー研修会では会っていたかもしれないが、面と向かって接したのはこの時が初めてだったので、生徒たちは彼らに会うまで不安だったと思う。

【佐藤さん】五農の寮の食堂で震災の情報交換会を行なった。グリーンツーリズムとして五所川原や板柳町などの観光名所を五農生と宮農生で回った。2日目の夜は、五所川原立佞武多に踊り手として参加してもらった。まじめな話以外でも交流を行なった。

【中谷さん】交流活動は、開会式の後すぐに板柳町にあるふるさとセンターでリングのお菓子作りとりんごの草木染めをした。最初は同じ学校の生徒同士で固まっていた。グループをつくり損ねた私が宮農の男子生徒と一緒にクッキーを作ったらすごく気さくで、本当にこの人達は震災を経験したのと思うくらい明るくて、その時一緒だった2人の生徒とは今でもメールや電話で連絡を取り合っている。

【佐藤さん】宮農の先生が、校舎が被災した様子を撮影していたので、最初にその映像を見せてもらった。宮農と五農が取り組んでいる活動を紹介

し合った後に、質問形式で震災の話に進んでいった。

【越谷先生】農地がなくなったとか、農業機械が流されてしまったとか、つながれていた牛がいなくなってしまったという話があった。

【中谷さん】欲しいものを聞いたら震災直後は食料だったが、いまは農場が欲しいと言っていた。映像を見て、何と言っていいか分からなかった。びっくりと言っていいのか、怖いと言っていいのか。先生たちの車がどんどん流されていた。一気に水が上がってくるのが分かった。

【佐藤さん】自分の高校がこのような被害を受けたらどのようになるのだろうと思った。宮農の生徒はつらいと思うが、よく映像を見ていられるなと思った。

【中谷さん】次の日のワークショップで農業をどのように再生していくかを話した。「環境とエネルギー」というテーマで5つの班に分かれ話し合った。

【越谷先生】弘前大学の教授で青森県環境パートナーシップセンターの鶴見先生に講演してもらった後に、エネルギー問題について鶴見先生の指導の下、ワークショップを行なった。

五農から宮農への訪問

【佐藤さん】12月中旬、今度は五農が宮農へ行く番だった。農業クラブ員と生徒合わせて22名がバスで宮農へ行った。宮農の現地調査と五農農産物を届けることが目的だった。

【中谷さん】まず、津波被害を受けた校舎を見学させていただいた。宮農の生徒も、津波の後に学校へ行くのは初めてだと言っていた。被災した校舎の中で、1年生の時に使っていた自分のファイルを見つけた生徒もいた。震災のあの時から時間が止まったままの状況を受け止めていたようだ。

【佐藤さん】窓もないし、天井もないし、2階まで津波の痕跡があったので、どれだけ大きい津波が来たのだろうと思った。

【中谷さん】バスから校地を見たときは車や瓦礫がいっぱいあって、学校だったとは思えなかった。生徒玄関の扉もなく、廊下には柵や椅子が震災後のまま置かれていた。

【佐藤さん】宮農の生徒の案内で校舎を1階から3階まで見て回った。カーテンがくるまった状態で放置してあったので理由を聞いたところ、部活に来ていた生徒や先生が取り残されてしまい、夜の寒さをしのぐために使ったのだと聞いた。

【中谷さん】教室の黒板にサイコロゲームが書かれていた。おそらく一晩過ごすうちに飽きたからだと思う。そのゴールから3つ前くらいに「死ぬ前にやりたいこと」と書いてあった。そういう心境だったのだなと思った。

【佐藤さん】津波が来たときに避難した屋上で当時の状況を再び教えてもらい、宮農の仮設校舎へ移動した。8月のツーリズム以降の情報交換会を行なった。

2回の交流会で 生徒たちから見たこと

【越谷先生】農業クラブのメンバーが、窮地に立たされた宮農の生徒を招き入れるために、めいっぱいおもてなしをしたいと背伸びをして一生懸命やっていた。活動をしていくうちに、当たり前に接することが一番だと気づいてくれていた。宮農訪問はクラスから代表2名ずつ連れて行った。その生徒達が戻って来て、行けなかった生徒たちに被災地で見たことを伝えている。自分たちも農業でできることはやらなければとか、これからの自分の生き方を考え直した生徒もいた。今でも、今年も行きたい、もう1回行って何かしたいという生徒がいる。

震災を振り返って

【佐藤さん】2012年8月に研修で2週間ほど中国へ行っていた。その際に2008年の四川大地震の時に娘さんを無くした先生や、地震に遭った生徒さんと話をする機会があった。宮農の話を思い出して、もし宮農の生徒が4年後に話す機会があったらどんなことを話すのだろうと考えた。中国の人たちはいつまでも支援に頼っていないで自分たちが変えていかないといけない、自分が強い心を持たないといけないと何度も言っていた。いつまでも頼っていたら自分も成長しないから。その話が印象に残っている。

【中谷さん】宮農の農場が津波で使えなくなっているので、何か役に立つ実験がないかと考えた。生物工学基礎実験室で、海水や海の砂をピートモ

スという土に混ぜ、水菜とオカヒジキとアイスプラントを植えて塩の被害がどう出るかの研究を始めた。普通環境では1〜2週間で発芽するが、海水の方は1か月ぐらい遅れて発芽した。その後の生育についても葉緑素の数を調べたり、食べてみたり、糖度計で測った。普通の土より海水が混ざった土の方が茎が太く、葉っぱの色も深い緑になり、味はしょっぱくなった。葉緑素の数も2倍近かったが背丈は低くなった。大津波で多くの農場が使えなくなったけれど、海水に浸ったから駄目だということではなく、こうなってしまったのだからこれを活かして何かやろうという気持ちを持つてほしい。

【越谷先生】農業高校の生徒は生き物を相手に勉強していること、農産物を作っていることから体験活動が豊富で、生きる術を持っているなと思った。先ほどの研究もそうだが、震災があったから次にこれを何かに活用できないかとか考えている。現状がこうだから、強い気持ちで乗り越えていかなければならない、前向きに取り組んでいこうという気持ちを持っている。農作物を育てていくという農業者としての芽生えがあるのかなと思う。震災により、宮農との交流が生まれ、自分たちが人々の食を支えている自負や食料生産の大切さを実感したのではないか。今回の交流活動では、今後に向けて大きな目標を持つきっかけになった。

【佐藤さん】強い心をもつことが大事といったが、東北の人は絶対強い心を持っていると思う。復興も必ずできると思う。自分は何ができるかまだ分からないが、頑張るってほしい。



撮影：2011.12.7 五農会長による訪問受け入れの御礼と別れの挨拶

NPO

弘前市

その一言で、 村の人たちが全てを受け入れてくれるようになった。

渋谷 拓弥 NPO 法人 ECO リパブリック白神

取材日 2012.08.23

世界自然遺産白神山地とそれを取り囲む地域住民に対し、環境教育やその他の環境に関する事業を行い、未来を担う子どもたちのために美しい自然を愛でる心を伝えていくことを目的として設立された。震災後は地理的な条件などから岩手県の野田村を集中的に支援し、結果的に他の行政や支援団体の重複した支援を防ぐことにもつながった。

3月11日 14時46分

事務所では大きな揺れが長い時間続き、その直後停電になった。いつものよくある停電で、夕方までには復旧するだろうと思っていたが、一向に復旧する気配がなかった。団体のキャンドルナイトイベントを実施していたこともあり、キャンドルの在庫を放送局へ届けた。信号が機能せず道路は車で渋滞していた。コンビニやホームセンターでは食料や乾電池などを電卓で計算して売っていた。ガスや水道はところどころ止まっている箇所があった。

友人たちが私たち夫婦のために、翌日に結婚披露のパーティーを計画してくれていたが、ホテル側から停電で冷蔵庫が使えず食料の確保ができないので延期して欲しいと、夜になってようやく連絡が来た。

停電は翌日の昼には主要な所から回復していった。同時にいろいろな情報が入り、大変な事態になっていることを知った。

以前からマルシェを行なっていたつながりから、震災直後に農家さんに連絡して街中に市を開いてもらい、市民からはとても喜ばれた。一番困ったのはガソリン不足で、給油のため行列に並んだ。選挙活動も各候補者は車ではなく自転車で活動していた。物理的な被害は少なかったが、経済的な部分では影響を受けた。

緊急行動を考えるフォーラム開催

Facebookなどで情報が飛び交っていた。放射能対策には納豆を食べると良いとか、子どもたちを被曝させないようにするにはどうしたらよいか、風向きなども毎日テレビを見ながら入念に情報をチェックした。青森には六ヶ所村がある。他人事ではない気がした。

原発事故を懸念して2011年4月3日にフォーラムを開いた。弘前大学の非常勤講師で、チェルノブイリ事故当時スウェーデンにいたヒューゴソン・アルヴァルさんに講演を依頼した。200名を



を超える人が集まった。弘前大学医学部の放射線科が開催したシンポジウムにも多くの人が集まり、市民の関心の高さが伺えた。なかには「不安を煽っている」との声もあったが、最悪の場合を想定した形で動くという哲学の下に開催した。不安を煽る側面もあったかもしれないが、本当に危ない時に中途半端に安心感を持たせてもいけないだろうという思いがあった。

野田村での支援活動

弘前市に「やわらかネット」という交通事業者や宿泊業者、NPOなどで構成されるゆるやかな連合体があり、週に1回程度地域振興のための話し合いを行なっている。3月23日の会合に、当時弘前大学の山下祐介准教授から私と白神山地ガイド「エコ・遊」代表の土岐司さんに参加要請があり、被災地の支援について他の参加者も交えて話し合った。山下先生から壊滅的な被害を受けた市町村の中でも岩手県野田村という地域への支援が最も遅れるだろうと話があった。野田村は人口4千人のうち約1割が被災していた。長期の支援を考えた時に、弘前市の都市規模と日帰りできる地理的な条件などから継続的に支援していくことを決めた。

翌日、やわらかネットでの支援に対する機運の高まりもあり、事務局的な役割としての私と、土岐さんと、全国の防災の情報を持っている山下先生の3人が集まりスタートした。3月25日に「津軽衆有志野田村支援隊」として初めて野田村に支援に入った。

状況を精査したところ行政も被災していた。行政への支援も必要と考え、協力要請のために弘前市長を訪ねた。なぜ野田村なのか理由を問われ、日帰りが可能である地理的なこと、津軽の殿様の先祖の出身地である歴史的な背景を伝え、恩返しをしようと了解を得た。

民間の支援が先に進み、その後から行政が後方支援に入ってくれた。弘前市も人を派遣し、3名の職員を現地に常駐させてくれた。大学のボランティアも積極的に参加し、支援を行なった。おそらく瓦礫の撤去は日本で一番早かったと思う。弘前市が野田村を集中的に支援するという情報が周囲に伝わることで、他の行政や支援団体の重複した支援を防ぐことにもつながった。

支援の中では「食ベニケーション」というコンセプトのもと、一方通行の支援ではなくお話を聞きながら一緒にご飯を食べて、被災者の方たちが求めているニーズを拾っていくようにした。

避難所や仮設住宅での不自由な生活から離れフレッシュしていただこうと、4月末の弘前市の桜祭りに合わせて野田村の被災者の方々を招待する計画をたてた。現地へ行く支援から来てもらう支援へと、新しい支援の形が生まれたタイミングだった。現地の支援リーダーの方など、何らかの理由がないと地域を離れられない方々にも来ていただいた。現在でも四大祭りにはお声がけして来てもらう支援を継続している。

受け入れてくれた瞬間

被災地を目の当たりにした時、この町が復興する時にもう一度ここに帰ってくるだろうか、ここにもう一度町を作ろうと思うのかと考えた。地元では環境活動を通じて、どのように地域を再生していくかを普段から考えている。大津波によって町ごと流されてしまった時に、どこかに移り住もうと考えるのか、日本人だったらまたここに同じ文化を作るのだろうか、複雑な思いが交錯した。手前味噌になるが、ECOリパブリック白神が事務局として情報を一元管理することで、民間団体、大学、行政のつなぎ役として機能し、円滑な支援活動ができたと思っている。私たちが支援のため野田村に入った際、受け入れられるまでには時間がかかった。状況が一転した一言が、今でも印象

に残っている。

現地の人たちに「なぜうちに来たんだ？」と問われ、野田村支援隊長の土岐さんはこう言った。「来たくて来たんだ」

その一言で、村の人たちが全てを受け入れてくれるようになった。今でも鮮烈に覚えている。

今後の課題

継続的に支援していくための費用の問題がある。支援活動を始めた頃にいただいた寄付金や義捐金は底をついてきている。経済活動をどう再生していくかという点も課題だ。支援に関しても物質面だけでなく心の交流にシフトしていきたい。また、たくさんの支援の中でできたコミュニティを残し、現地の人たちの言葉を拾いながらアーカイブ化をしたいと考えている。

震災を振り返って

被災地にはいろいろな産業や文化や信仰があり知恵があった。それが今回の震災でことごとく破壊された。再生していく時にはそれぞれの地域の特色を活かして欲しいと思う。すべてが同じような町になってしまったら絶対につまらない。どこの駅に降り立っても同じ景色や町並みがあることは、日本の文化ではない。里山のような自然環境と共生してきた背景があるからこそ、それぞれの特色があって面白いのだと思う。今後の再生にあたって絶対に残して欲しい。再生可能エネルギーを活用し、古き良き町を再生させることができれば、大震災から復興した日本の姿として、世界に向けて発信していけるだろう。



撮影：2011.4.3 青森県弘前市「緊急行動！津軽からがんばろう日本!! 震災復興支援フォーラム」パネルディスカッション

NPO

石巻市

「ありがとう」の言葉が活動の原動力。 かけぬけた1年間。

3.11 あの時
P44 Report. 21 の続きです

川村 久美 NPO 法人いしのまき環境ネット

取材日 2012.06.14

宮城県石巻圏域の環境に関わる啓蒙教育と実践活動を通し、自然環境と生活環境が共生する社会を形成することを目的に活動に取り組む。東日本大震災後は団体の活動を一時休止し、緊急支援NGOの活動支援や避難所での炊き出し、大学生ボランティアの受け入れ、地元の人たちと一緒に活動する「お茶っこサロン」などの震災支援活動に従事した。

炊き出しを開始

2011年5月29日、EPO東北のヒアリングを受けた後にすぐ炊き出しを始めた。最初は、他の団体について行って手伝っていたけれども、人と人のつながりによって個別にリクエストを受けるようになり、次第に自分たちで避難所へ赴き炊き出し活動を行なうようになっていった。当時は道がひどい状態だったので、到着までに1時間もかかる避難所もあった。夏にはかき氷の炊き出しを行なったこともある。

活動中は「ありがとう」と言われるたびにとても嬉しかった。炊き出し活動は対面で感謝される。そのことが、パワーとなって、次の活動につながっていった。現実には美しい面ばかりではなく、嫌な思いをすることもあった。また、そうした感情を抱く自分にも嫌気がさした。活動をすれば喜ばれるけれども、複雑な面も見えてしまう葛藤はつきまっていた。

「お茶っこサロン」オープン

夏には、自分たちが道具や材料を持参して提供する形から、拠点を置いて地元の人たちと一緒に活動する形に変化し、被災がひどかった大街道南と浦屋敷地域で「お茶っこサロン」をオープンした。いつまでも無料の支援をすることに対して疑問もあり、サロンを利用する方からは200円だけお金もいただいた。

自宅で時間を持て余し寂しい思いをしている人たちが多かったのも、皆で一緒にお話ししながら手芸品作りや食事を準備するような企画をした。これまで近くに住んでいるのに顔を合わせたことのなかった人たちが出会い、地域で新しく世話役になる人が誕生し、自分たちの活動が新しいまちづくりに貢献できたと思うし、人と人をつなぐことができたと思う。

また、どこに支援が必要なのかを把握するためにしらみつぶしに一軒一軒を訪問し、家族構成や困っていることなどを聞いて、一人暮らしの高齢



者や孤立している人を探し出そうとした。時間を持て余し、不平不満を抱えている人も多かったのも、そうした人たちの話し相手になることで少しでもケアをできたと感じている。

1年を駆け抜けて、今は充電期間

大震災後の混乱から駆け足でずっと活動を行ってきたし、これからもこのペースで活動が続いていくのだろうと思っていたけれども、新年度に向けて現在は活動をお休み中だ。震災から1年が過ぎ、これまで一生懸命頑張ってきた人たちの中には、急に体調を損ねている人がとても多いように感じている。今までの調子でこれからも活動を続けていくことはできないのだと気づいた。少し休んだ後はまた新しい活動を始めたいと構想を練っている。



撮影：2011.12.25 石巻市浦屋敷 お茶っこサロン

NPO

仙台市

「被災者」「支援者」ではなく、 地元の人間として一緒に活動したい。

3.11あの時
P37 Report. 17 の続きです

足立 千佳子 NPO 法人まちづくり政策フォーラム

取材日 2012.06.22

関係諸団体との協働を基にまちづくりに関わる調査研究等を行ない、豊かな地域社会の形成に貢献する事を目指し活動に取り組む。震災後はRQ市民活動救援センター登米現地本部で、ボランティアの受付窓口や諸々の事務作業を一手に引き受ける「総務」を経験。その後女性のための支援センターを立ち上げ、被災女性の支援に力を入れている。

てしごとプロジェクトと地域の事情

被災地に暮らす女性たちのサポートを目的として、2011年6月1日にRQW（RQ 被災地女性支援センター）を立ち上げた。女性の仕事づくりに繋がるものとして、編み物や裁縫などの手づくり講座を県北沿岸地域の仮設住宅で開始した。現地に入ってみると、私たちが思い描いていたイメージとは違うことが多々あった。9世帯からなる小さな仮設住宅では各家の女性たちが参加してくれ、集会場を仕事場として利用しつつ、手仕事をしないおじいちゃん・おばあちゃんも集会所に集まってきている。これが目指したカタチだった。ところが大所帯の仮設住宅では意外に手仕事は広がらない。あるいは、毛糸を持って家にこもってしまい内職化してしまう。引きこもりを防ぎ仮設住宅内でのコミュニケーションを図ることをも目的のひとつとして取り組んだので、これでは趣旨が違ってしまうと、スタッフ内で話し合い、月に2回のお茶っこ講座を開くことにした。1回は手仕事をする人たち向け、もう1回は地域の誰でも参加できる内容とし、皆が気軽に集まっておしゃべりできる場づくりをしている。

大島の仮設ではすでに別の手仕事支援が入っていたため、需要がなかった。一方で地元の方が「やりたいけれど、自分達は仮設に入っている被災者ではないしダメよね」と仰る。いやいやいや、大島全体被災しています、皆被災者ですよ！大島では仮設住宅ではなく、1つの自治会の婦人部を中心としながら手仕事を始めた。

4カ所でてしごとプロジェクトを展開しているが、地域ごとに事情が違う。声をかけるタイミングや、誰が声をかけたかで反応は違う。チャンネルが合うか・合わないかなら、こちらはたくさんのチャンネルを持つことが大事だ。

「さんざかほんざかすっぺし」

RQW東京スタッフをはじめ、多くのネットワークでエコタワシ「編んだもんだら」のタグができ、



あちこちで販売してもらうことができた。ところが、ボランティアの中にはお金を稼ぐことに違和感を覚える人もいる。話し合った結果、ちょうど1年となる2012年6月1日にてしごとプロジェクト「さざほざ」を独立させることにした。手仕事づくり・食・被災地の今を発信し、東北の暮らしの知恵をコミュニティビジネスとして展開していきたい。また、お母さんたちとネットワーク作りをしながら、「被災者」「支援者」という立場で関わるのではなく、地元の人間として一緒に活動をしたいと思っている。

「さざほざ」とは花巻・一関方面の方言で、宮城でも若柳の金成に近い地域で使われている。ある方がよく「さざほざとすっぺし」と仰る。それが好きで名前にいただいた。意味は「わきあいあい、気負わずに」。

タコは「新鮮に」編んで！

アクリル毛糸で編むエコタワシ「編んだもんだら」はタコやイカ、ツバキなど地域の特産品をモチーフにオリジナルデザインで製作している。編み図は使わず口頭で教え、仕様や指示書もない。すると、青い口のタコが登場することがある。お母さんたちの楽しい気持ちを壊したくないが、「青い口は寒そうです。口はチュッとしたくなるような色にしてくださいね」とお願いすることもある。

最初は上手に編めないものだが、「上手に編んで」は禁句だ。ある時、上手に編めなかったタコを「水ダコになったべさ」と笑い合っていた。会話に入っていくと「水ダコは大きいから大味でうまくね。志津川は真ダコがうまいんだ」と自慢された。なるほど、それなら「おいしそうに」と表現した方が良いのかしら。それから「イキよく編んで」「新鮮に編んで」と声をかけるようにしている。編み目がとんで穴が開いてしまったら「きつとヒトデに食べられたんだべ」と大笑い。え？ヒトデってタコを食べるの？と聞けば「そんなの知らねえけど、穴があいてるんだものたぶんそうだべさ」とまた笑う。この空気感がすごく好きだ。きつと、「支援者」として現場に入っていたらこうはならない。いい加減で、ユーモアがあって、めんどくさがりだったり。お母さんたちの気負わない、ありのままの素の姿を見せてもらえる。だから楽しくて、日々遠いと思いながらも登米や南三陸、大島まで通っている。

コミュニティカフェ「うれしや」

宮城の放射能の問題は“風評被害”ではなく、“事故”で、“風評”ではなく被害はある。その中で私たちがどうやって暮らしていくのか考えたい。食べるという大事なことを考え、宮城の海と里と山をつないだ、美味しい食の在り方を発信したい。そのための場所として、2012年5月17日に「うれしや」をオープンした。

この場所はずもととマクロビオティックの喫茶店だった。前店主とのつながり、登米の農家さんとのつながり、多くの人のつながりでお店を開くことができた。店名は農家さんと一緒に「店が出せるなんてうれしいねえ」と話していて生まれた。うれしいという字は漢字で書くと「女の人が喜ぶ」で「嬉しい」になる。隠しテーマで、やっぱり女



撮影：2012.4.24
気仙沼市大島 編んだもんだら「水揚げ」作業

の人が喜ぶことをしたいと思っている。
火・水・金はカフェを開き、月・木は現場へ出かける日が続く。現場の人たちとはお友達のような関係でありたいと思っているので、肩肘張らず、肩に力を入れすぎず、これからも楽しく活動に携わっていききたい。

大震災を振り返って

いろいろな人のつながりがあったからこそ、できたことがたくさんある。震災後に出会った人たちも、出会うべくして出会った人たちなのだろうと思う。

東日本大震災で大事に思っていた人たちを亡くした。その人たちの分も誠実に生きていきたいと思うし、あの震災から生き残ったのだから、多くのご縁に感謝して、日々丁寧に暮らしたいと思っている。



撮影：2012.5.14 南三陸町志津川「ひらめ」の編み方練習会



アクリル毛糸で編むエコタワシ「編んだもんだら」

個人

海と共に、気仙沼で生きてきたことは誇り。

気仙沼市

菊地 ひろ子 個人

取材日 2012.08.08

宮城県地球温暖化防止活動推進員。宮城県環境教育リーダー・環境省登録環境カウンセラー(市民部門)。青空エコカフェ代表。公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク評議員。気仙沼市在住。震災後は仮設住宅の冬期間の防寒対策の学習会や、「家庭でできる節電」をテーマに環境学習の実施などの活動を行なっている。

3月11日 14時46分

自宅にいた。気仙沼市役所の環境課へ行く準備をしていた時に、大きな揺れを感じた。自宅は築40年近いので倒壊してしまうと思った。外に出たら電柱が倒れてくるかもしれない。近くにあった座布団で頭を覆い、台所のテーブルの下に潜った。棚が開き、食器類が次から次へと落下してきた。6人掛けの大きなテーブルだったため、直接身体に当たることはなく、自分の身を守ることができたが、とにかく恐怖心が募るばかりだった。テーブルに必死につかまりながら、揺れが収まるのを待った。

今回の震災では、経験したことのない音を聞いた。家が壊れるような音だった。普通の地震とは明らかに違う音だったので、家がつぶれてしまうと思った。

大きな揺れがある程度収まった後は、外に出て家の回りの状況確認、近所の知り合いの1人暮らしのお年寄りの安否確認に向かった。日頃から、何かあった時はその方の様子を見に行く事が習慣だった。

夫にメールをしたが案の定携帯電話は繋がらない。夫は、内湾のタンクが多く建っている所で働いていたし、多くの親類も海岸周辺に住んでいた。常日頃から大きな地震が起きた場合は、山へ逃げることを心がけていた。連絡はつかなかったが、みんな山へと逃げているだろうと思った。津波が来る、と揺れの後すぐに意識した。1960年のチリ津波地震を経験している。当時中学1年生だったが、実家が海の目の前で、自宅が床上浸水したことを鮮明に覚えていた。2年前に起きたチリ津波でも気仙沼では内湾が浸水した。これらの経験が、今回はあれだけの大きな規模の地震だったので、即座に津波が来ると直感させた。防災無線で30分後に大津波が来るとの一報が辺りに鳴り響いた。



津波の被害を目の当たりにして

震災翌日、近所の人々が歩いて市内の状況を見に行った話を聞き、今回の災害の凄まじさを改めて感じた。「商店が無くなった」「病院が流れて無くなっている」自分で確かめるべく、市内を歩いて回った。市役所付近の道路は、歩くのも困難なほど、住宅、船、車などありとあらゆる物が流れていた。自分の実家に向かう道も言葉にならない程、瓦礫などが山積していて、近づくごとに恐怖心と絶望感とどうしようもない気持ちがあふれた。津波で流失してしまった実家の残骸を初めて見た時は茫然として、ただ号泣するだけだった。

震災翌日、夫がやっとの思いで自宅に無事たどり着き、津波で自宅が流失した妹夫婦が避難してきた。避難所である小学校で物資の配給を行っていたので、毎日小学校に通い、おにぎりや新聞をもらうことができた。災害情報はコミュニティFMと新聞から得た。自宅では1か月間電気がストップしたが、プロパンガスだったため簡易コンロを使用することができた。当時はとても寒かったので水を節約しながらお湯を沸かし、ペットボトルにお湯を入れて暖をとった。電気がストップしたので、冷蔵庫の食材の始末をしなければなら

ないと思い、保存していた肉は全部調理することにした。濃い目の味付けにして常温で長持ちできるように、佃煮などに調理し保存した。寒さが厳しかったのでお風呂の給湯器が破裂してしまい、お風呂に入ることができなくなってしまった。食料と水を確保しなければいけない状況だったので、宮城県地球温暖化防止活動推進員（以下、推進員）の仲間から水と米をわけてもらった。震災から2週間くらい過ぎて、関東に住む長男が食料、衣料品、日用品などを車に積んで来てくれた。職場の同僚が好意で集めてくれたものだという。自宅を流された妹たちは着の身着のまま、ほとんど何も持たないで逃げてきているので、下着、靴下、防寒着等はみんなで分け合った。とても助かった思いとありがたい思いでいっぱいだった。当時、市内の販売店は営業している所がなかったので、噂で営業していると聞いた岩手県室根町のスーパーまで行った。2時間ほど並んで、数量限定ではあったが食料や電池など必要としていた物資を手に入れることができた。このような生活は1カ月近く続いた。

震災からの再建

震災が起きてから3カ月間は、自分の家族、親類、水産業を営む実家の事業の再建を考えるだけで頭が一杯だった。江戸時代から継承してきた実家の事業は全く先が見えず、モチベーションは上がらなかった。やむを得ず解雇した昔からの従業員のところへ赴き、話を聞いたり、説得したりし、事業が再開できる環境を整える事に奔走した。毎日不安でよく眠れず、非常に辛い時期だった。推進員や環境活動を共にしてきた仲間たちからは、再建に役立つ情報や「何としても事業を再建して欲しい」といった温かいメッセージをいただいた。事務機器や文具類などの支援物資もいただいた。常日頃、共に活動してきた「繋がり」が困難な状況に陥った時にとっても心強く感じた。事業が再建でき、回復しつつある時に初めて鯉が水揚げされた時、まずお世話になった人たちに届けた。お互いに助け合う「繋がり」を持てた事は、今までの長く環境活動に携わってきたおかげだと改めて思った。

推進員としてのエコ知恵普及

2011年5月にみやぎ生協県北ボランティアセンターが立ち上がり事務局を担当することになった。6月頃には仮設住宅への入居が始まり、同時に仮設住宅の生活環境の悪さを感じた。9月頃、仮設住宅の住民は冬にどう暮らしていくかという課題に直面した。妹が仮設住宅に入居し

ていた事もあり、「第一に防寒対策が非常に不十分」だという現実を目の当たりにした。国の支援が遅れていて10月になっても国会で仮設住宅の防寒対策が審議されていなかった。そこで宮城県地球温暖化防止活動推進センターの「みやぎ節電プロジェクト2011」へ参加した。このプロジェクトは快適なライフスタイルを損なわないように工夫しながら、省エネをしようという取り組みで、窓に貼る断熱シートや床に敷く断熱マットを使用して仮設住宅で少しでも呼びかけを行なった。また気仙沼市地球温暖化防止普及啓発事業に参加し、仮設住宅での防寒対策の学習会を行なった。仮設住宅は寒さが部屋の中に伝わりやすいので、身近な物や今ある物を上手に使って冬を暖かく過ごすヒントを伝えたいと考え、扇風機を使って部屋の空気を循環させ、天井と床の温度差をなくして部屋全体を暖める方法を伝えることにした。みやぎ生協県北ボランティアセンターの協力でお茶会形式での学習会も開催し、入居者の方々にリラックスしながら、参加してもらえた事はとてもよかったと思っている。

現在、県環境教育リーダーを務めているが、震災後に気仙沼市立面瀬小学校の6年生を対象に「家庭でできる節電」をテーマにした環境学習を行なう機会があった。児童の中には、親を亡くし、自宅を流された児童も多かったので、大変、気を配りながらの学習だった。震災でライフラインが寸断されたので、当たり前の事が当たり前でなくなった事を子どもたちも実感したと思う。毎日、無意識で行動していた事をもう一度、意識して行動することを呼びかけた。何気なく行なってきた、テレビを見る、電気をつける、冷蔵庫の開け閉めを意識して、朝起きてから寝るまでの行動を毎日チェックすることで、子どもたちのこれまで当たり前だった行動を見直してもらう。調理室での学習では、目玉焼きを余熱調理で作り、冷蔵庫には



撮影：2011.11.8 気仙沼市切通仮設住宅 冬を暖かく過ごそう&お茶会

保冷カーテンを付けて使ってもらった。子どもたちに教えていると、反応が速いため楽しく教える事ができた。

震災後のこうした環境学習を通じて、推進員としての役割をある程度は果たせたとの思いはある。気仙沼と一緒に活動してきた人たちの中には仮設住宅で暮らしている人もいたので、その方々の役に立ちたいという思いも強かった。逆に仮設住宅での暮らしの工夫を教えていただいた事もあった。どんな状況の中でも、日々「ネットワーク」をつくってきたことが活かされるのだと感じている。常日頃から心と心が繋がっている関係を持続するためには、努力もしなくてはならないと思う。

震災を振り返って

気仙沼に住み、海と共に育ってきた。それを考えると、海と共に生きてきたし、生かされてきたことを震災で思い知らされた。気仙沼の基幹産業は

漁業なので、自然の恵みに感謝しながら享受しようという考えがある。

一概に津波が悪いとは言い切れないとも思う。海の恩恵を受ける漁業を営む人の家の天井は高く、そこには必ず神棚がある。自然と共生していく運命（さだめ）を受け入れたことの現れだ。先祖は「自然」というものは対立するものではなく、共生していくものだということを忘れないで生きてきた。正月には、神棚の近くにすめ、魚、酒を吊し、海への畏敬の念を持ち続けてきた。自分たちの中で生活の一部のひとつが海だった。自分に取り組んできた環境活動と、先祖代々が行ってきたことは矛盾したことではないと実感している。何も無くなり変わり果てた町を見ると絶望感はあるが、今まで住んできた町への思いや地域で育まれた知恵があることで、あるがままを受けとめる事ができるのだと思う。気仙沼で生きてきたことを誇りに思い、そのDNAを感じながら復興再建を目指していきたい。

個人

気仙沼市

シャッターを切った理由。 ただの記録ではなく、記憶を後世に。

山内 宏泰 個人

取材日 2012.08.08

リアス・アーク美術館学芸員美術家として個展、グループ展など多数開催している。また舞台美術家、舞台衣装家として多数の舞台に参加している。専門は美術教育、造形理論、現代美術、地域文化教育、津波文化史研究と普及だ。東日本大震災大津波で自宅を流失した。震災後は各地で「津波の災害史、文化史」等に関する講演を行なう。著書「砂の城」近代文芸社

津波の伝承を考える

生まれも育ちも石巻。1978年の宮城県沖地震を経験していて、当時小学1年生だったが、津波注意報か津波警報が発令されたのを覚えている。高台の鉄筋アパートの4階で暮らしていた。幼かったので津波というのが何なのか理解することができなかったが、それでも子ども心に「避難する準備だけはしないといけない」と感じ、自分の宝物をリュックサックに詰めて、服を着たまま、懐中電灯の灯りをじっと見つめて一晩を過ごした事を覚えている。この地震で初めて津波を意識させられた。

海の近くに住んでいれば「海洋文化」があるわけで、当然、津波被害の歴史がある地域では、それは海洋文化の中に組み込まれなくてはいけない。昭和8年の昭和三陸大津波、昭和35年のチリ地震津波から、東日本大震災が起きるまでにいった

い何をしていたのか。日本人は大事な何かを忘れてしまったように思う。戦後、日本が大きく変わって津波という意識が人々の心の中から消えてしまったためではないだろうか。

3年で「津波文化」を継承していく仕組みをつくらなければ、また忘れられることになる。例えば、三陸沿岸部の小学校や中学校では、総合学習の中で必ず津波の学習をする時間を設け、地域で年に1度は集まって津波の勉強会を開催する。避難訓練を年中のお祭り行事として津波の脅威を継承していくのもいいだろう。けれども地域の生活文化が崩壊している現代社会では、どう残していこうかと考えた時、難しい部分が多い。

3月11日 14時46分

美術館1階の収蔵庫で作業中に大きな揺れが起きた。自分にとっては、未曾有、想定外という思

いはなかった。想定もしていたし、過去にも何度も起きていたので、大きな揺れが起きた時、「ああ来たな」と率直に思った。2日前に起きた地震を「やばい揺れ」だと感じていた。だから、知人や美術館を訪れたお客さんにも、備蓄などの準備をしたほうがいいと告げていた矢先のことだった。大きな揺れが起きて、しばらくしてまた大きな揺れが起こり、停電した。「今回はひどい」と思っていると、再び揺れ、計3回の大きな揺れが起きた。3回目の揺れの時は、この世の終わりが来たのかとも感じた。建物はまるでゼリーのように、波を打つように揺れていた。慌ててパニックに陥ることもなく、「遂に来た」という思いだけがあった。

揺れが少し落ち着いたように感じたので、作業中だった作品の安全を確保し、14時55分くらいに収蔵庫から出たのを覚えている。

他の部屋の状況も確認したかったが、停電のために暗く、とても確認できる状況ではなかった。15時過ぎに屋外に出た。その時には、市内のいたるところから多くの人々が車で避難していた。あちこちから防災避難放送が流れているのだが、なかなか聞きとれない。避難した住民から「6mの津波が来る」と聞いた。15時20分が過ぎた頃、「津波が見えるらしい」とざわめく声が耳に入ったので、美術館の屋上から周囲を眺めた。町を見ると、家屋が流れ、破壊され、白煙が舞い上がっていた。本来見えるはずのない内湾が見えていた。マグロ延縄船が船尾を前に流されていくのも見えた。上から見て明らかに、自宅も流されるだろうと分かった。自宅で飼っていたペットの事が気がかりでならなかった。

家屋が破壊され、流されていく様子を見て、鉄骨のビルがこんなにもろいものだと思い知らされた。破壊された町の中に佇み、冷静さや客観性はもちろなかった。自宅があった場所をめちやくちやに壊滅していく津波を眺める以外、何もできなかった。余震による揺れは続き、ふと気がつけば水が上がってくる。鍵を付け放しの車から警告音とクラクションの音が鳴り響き、気仙沼市内の上空を飛び回る救助ヘリの音も聞こえる。そんな光景を見ながら、自宅とペットはどうなっているのかを考えるだけだった。

13日、ペットの安否確認をしに命懸けで自宅に向かった。たどり着くと家があったはずの場所は、根こそぎ、何も無かった。人生で初めて膝から崩れ落ちて号泣した。人間って本当に崩れ落ちるように泣くのだと思った。「何もない」。自分が20年間作りあげた作品もない。可愛がっていたペットのウサギも助からなかったことがはつきりと分かった。愕然とした。大震災発生から2日後、大きな余震や津波も収まらない状況だ。このままこ



こに居ては自分も妻も命が危ないと思い、妻を守りたい一心で、何もできないまま避難所に戻ることにした。

倒壊家屋の中から、助けを求める声が聞こえた。辺りを見渡すと3階建てのビルの3階で男性が手ぬぐいを振りまわして、助けを求めている。倒壊した建物の中は、階段がまるで滑り台のように泥に覆われ、3階へ上ると中には身動きの取れない老人と、建物が流される途中にこの3階建てのビルに飛び移った人など、面識のない計4名が助けを待っていた。

その後、救助を求める人たちがいる所まで自衛隊員を案内し、救助することができた。

写真による被災記録活動

震災から3日後に自宅へ行った時、妻が携帯電話で写真を撮っていた。最初はどうして撮るのか理



撮影：2011.5.11 気仙沼市川口町（山内宏泰さん撮影）

解できなかった。こんな写真を撮ろうという気分にはならなかった。妻は、両親や親類に状況を伝えるために撮っていたのだ。それを聞いて職場の同僚にもこの状況を教えるために、写真を撮って記録を残そうと自分も思った。美術館の学芸員も、外へ出かける者は必ず各々が行った先々で被害状況を記録に残すことにした。

3月16日、被害の大きかった鹿折地区まで歩いて行ってみた。1日歩いて状況を把握しながら、写真記録を残しておかなければならないと本気で考えた。

学芸員の中で話し合いを行なった。我々にしかできないことで、我々がやらなければならない事は何だろうか。震災発生に伴い、美術館職員は避難所となっていた防災センターでの被災者対応、救援物資保管庫となった館の施設管理、空調機械等が機能しなくなった状況での美術館資料管理などを行なっていた。開館以来、美術芸術文化の普及と並行して地域の生活文化を調査、研究、蓄積してきた博物館として、さらに2006年来、地域の津波災害について調査研究、普及活動等を行なってきた学術専門機関、教育施設として、美術館が優先すべき使命は「被災した地域文化の再生に寄与することと、今回の震災被害を後世に伝えていくこと」ではないかとの見解を広域組合管理者、広域組合教育委員会から示され、当館学芸員は3月23日より写真記録を継続して行なうこととした。

当時、誰もそのような任務を行なう人間はいなかった。思い出と記憶を写真に残そう。震災前のそこで暮らした生活の痕跡を1枚でも多く残そうと思った。それは被災者のためだ。気仙沼の最後の姿を残すことが最大の使命だった。破壊された町、被害を伝えるという意味も大きいが、もっと大事だったのは壊れる前の町を残すことだった。その写真を見直した時に、我々が「語る」ことが必要であると思う。みんなが楽しい暮らしをしていたという事が伝わらないと、私たちが何を失い、何を破壊されたのかを伝えることはできない。我々は「瓦礫」という言葉は使わない。「被災物」「被災資料」と呼んでいる。

震災を振り返って

我々がこの場所で安全に暮らしていく権利を持っているとすれば、自然の脅威から安全を守っていく責任を持っていなければならないが、それが分離してしまっている。これは我々、被災者の責任でもある。この町を安全な町にする。そうしなければ、自分の子孫たちが安全に生きていけない。あの日を境に世界は変わっていくと思っていた。でも、それは違った。元に戻そうとしている。

東日本大震災の記録、記憶を正しく伝承、活用するために、私たちは何をすべきだろう。これは、この大震災に遭遇した全ての人々が、未来のために今、考えなければならないことだと思っている。「津波常襲地帯」であるこの地域で、今後、美術館が果たすべき役割や被災社会の一員としての役割、そして未来を築いていかなければならない同時代に生きる人々の役割を、恒久的に考える機会を提供していきたいと考えている。子どもたちが成人した時に、「興味ない」と言われられないためにも、「未来の町を守る大人」を育てるための教育にすぐにでも取り組まなければいけないと思っている。

撮影した写真は30,000点に近づこうとしている。その1枚1枚に、シャッターを切った理由がある。その理由を語ることで写真はただの記録ではなく、記憶を伝えるスイッチとなる。写真として残された画像は確かに重要だが、もっと大切なことは「その時、人は何を感じ、何を思い、何を考えたのか」だと思っている。現場で被災資料を収集していると、そこに暮らしていた人の生活が見えてくる。大事なものがこんなにも破壊されたことを後世に伝えていかなければならない。



撮影：2011.10.27 気仙沼市仲町（山内宏泰さん撮影）



撮影：2011.6.1 気仙沼市唐桑町只越（山内宏泰さん撮影）

NPO

仙台市

これから未来を担う人たちに、 夢のある未来を描いてほしい。

3.11あの時
P25 Report. 11 の続きです

山岡 講子 NPO 法人環境会議所東北

取材日 2012.08.24

地域を中心に環境と経済の独立に向け環境ビジネスの促進を目的に活動に取り組む。毎年「エコプロダクツ東北」を開催してきたが、2011年度は東日本大震災の影響で中止に。2012年度は企業のビジネスチャンスのもと、また個人が暮らしを見つめなおす場となることを期待して「再生と復興（幸）」をテーマにエコプロダクツ東北を開催した。

みやぎの明日が見える 「アスネットみやぎ」立ち上げへ

大震災の混乱の中でいち早く被災地へ向かい、支援活動に取り組んだ。身体は疲れきっていたが「いつまでも止まっていられない。前へ進むために、私たちにできることは何か？」という問いが常に頭の中を巡っていた。被災地を実際に目の当たりにした時は、人間の無力さを感じたが、ある企業が諦めずに希望を持ち、前に進もうとしている姿を見て勇気づけられた。このような企業のために、私たちはできる範囲でできることをやるしかない。2011年10月まで、気仙沼など宮城県沿岸部の商店街を取材しながら回り、「被災地を忘れないでほしい」「いくら建物が復旧しても、作ったものが売れないんだ」という現地の声を聞いた。そこで、全国に向けて被災地の情報をWeb-siteで発信しようと考えた。再開情報、販売情報をスピーディーに広く発信することで、少しでも経済循環に貢献できればいいと思った。紙媒体による情報発信も重要だが、インターネットによる情報発信の必要性を強く感じた。情報発信の方法は多様化していて、どれも長短がある。とにかく少しでも多くの方に被災地の現状を知ってもらいたくて、2011年11月にWeb-site「アスネットみやぎ」を立ち上げた。

間接的な支援の重要性

「アスネットみやぎ」には、97社が登録されている（2012年8月現在）。復興に向けて頑張っている県内の企業や団体、商店や生産者、震災後新たに立ち上がった企業を紹介している。多様な情報を一元化し、「ここを見れば、宮城県内で頑張る方々の情報が分かる」Web-siteを目指している。他にもインターネットによる情報公開サービスはあるが、アスネットみやぎは登録料や情報掲載にかかわる経費が無料である点でも大変好評をいただいている。登録している企業は取材の際に直接お声がけしたところがあれば、評判が広まり企業



側から掲載依頼がくることもある。

直接的な支援も大事だが、ある一定期間が過ぎれば自立に向けて、こうした間接的な支援が必要であると考えている。多くの方が宮城の現状を知ることによって、「購入支援」をはじめとした支援の輪が広がり、経済活動の助けになり、復興につながってほしい。

「エコプロダクツ東北、 来年度は絶対にやるぞ！」

私たちNPO法人環境会議所東北は、「地域を中心とした環境と経済の独立」に向け環境ビジネスの促進を目的に様々な活動を行ない、その大きな活動として「エコプロダクツ東北」を毎年開催してきた。2011年も「エコプロダクツ東北2011」を企画、実施に向けた準備をしており、その矢先の東日本大震災だった。会場である夢メッセみやぎが津波の被害で年内使用不可となったため「エコプロダクツ東北2011」の開催は中止せざるを得なくなった。

1年間の充電期間を経て、今年10月19、20、21日の「エコプロダクツ東北2012」は、「届けよう！未来への贈り物」「再生と復興（幸）」をテーマに開催する。大震災を契機として、私たちはライフ

スタイルやエネルギー問題を真剣に考えるようになった。防災から環境・エコ、さらには低炭素社会、カーボンニュートラルなど、これまで環境分野の人たちが使っていた言葉が、一般社会に浸透するようになってきた。今一人ひとりがすべてのライフスタイルを見つめ直さなければならない時期にきていると感じている。エコプロダクツ東北で少しでもその発信を行なうことで、暮らしを見直すきっかけとなることを願っている。

大切なのは「連携」

「エコプロダクツ東北2012」参加企業の半分は、今年初めて参加してくださる企業だ。宮城県内の企業が多いが、復興支援をしたいという県外の企業からも申し込みがあり、北海道や長崎からの参加予定もある。これまでのエコプロダクツとは大きく違う点だ。宮城県内のいつも出展してくださる企業は、復興のための忙しきでなかなか参加できない状況であるのは確かだ。しかし、日本全国で環境ビジネスに取り組む企業がビジネスチャンスと捉えて出展することで、エコプロダクツが出展者同士のビジネスマッチングや交流の場にもなっていくだろう。

また、今年は「アスネットみやぎ」に掲載した企業を中心に声がけをして、新設する復興市ブースに出展してもらう予定だ。復興に向けて頑張っている企業のこれまでの歩みを紹介する側面もあるが、知る人ぞ知る被災地のお店を知ってもらう機会を提供したい。多くの人に、実際に商品を手にとって見てもらえる場所を作ることで、少しでも経済が循環し、皆さんの収入につながればいいなと思っている。

私たちは出展してくださる皆さんがいるから「エコプロダクツ東北」を開催することができる。環境会議所東北は、さまざまな方々とのコラボレーションで組織を作ってきた。私たちだけでできるのではなく、いろいろな企業や団体が連携して協力し合っている。昨年度、取材活動で現地を歩いて得た情報をどのように展開していくか、私たちにできるお手伝いは何かを考えた時、企業が自立してより良い方向へ歩んでいくために多くの人々を巻き込んで、「エコプロダクツ東北」のような多くの人が連携しあう展示会を毎年つなげていくことが必要だと思っている。



撮影：2012.10.21 仙台市「エコプロダクツ東北2012」

「届けよう！未来への贈り物」

「エコプロダクツ東北2012」は、ビジネスパーソンだけでなく一般来場者も対象だ。経済的自立がなければ生活することができないので、すべての人にビジネスチャンスが必要だ。さらに大震災をきっかけに露呈したエネルギー問題に直面し、すべての人がライフスタイルを見つめ直さなければならない時期にきている。ただ「原発反対！」と言うだけでは何も始まらない。代替できるエネルギーを考えなければならないと思っている。そこで、エコプロダクツ東北の中でエネルギーがテーマのシンポジウムを企画している。藻を使って下水処理をする、波力でエネルギーを作る研究が進められている話を聞くことで、原子力に頼らずにエネルギーを作ることができる未来が開けていることを知ってほしい。こうした話を聞くことで、私たちが日々の暮らしで使用するエネルギーを減らしていこうと意識が変化していくきっかけになるかもしれない。このシンポジウムの「未来は明るいよ」というメッセージを受け取った学生が「将来はこんな仕事に就きたい」と夢を持つきっかけになるかもしれない。国にばかり頼らず、これから未来を担う人たちが知識を得て、夢のある未来を描いてほしい。

大震災後1年間のブランクを充電期間と置き換え、「エコプロダクツ東北2012」がビジネスチャンスの場、また一人ひとりが生活や仕事を見つめ直す場となることを期待している。

企業

温泉に入ること地球とつながり、自然と共生する。

大崎市

大沼 伸治 旅館大沼

取材日 2012.09.11

旅館大沼の五代目湯守。伝統的な湯治をベースとしながら現代にあった新しい癒しのかたちを提案し、宮城県鳴子地域の活性化や地域づくり、里山保全にも熱心に取り組む。東日本大震災後、行政の要請で南三陸や女川、東松島の人々を鳴子温泉地帯で受入れることになり、旅館大沼では2011年4月～9月までに3家族の受け入れを行なった。

東鳴子における湯治の歴史

鳴子温泉郷の歴史は平安時代の約1,200年前、東鳴子は約650年の歴史があると言われている。東鳴子には伊達藩時代、「御殿湯」という伊達のお殿様が入る温泉があった。現在の東鳴子温泉神社のあたりに位置し、当時「子宝の湯」としても有名だった。なかなか子宝に恵まれなかったあるお姫様が御殿湯に入り、2人の子を授かったという伝説が語り継がれている。御殿湯は明治43年の大洪水で壊れてしまい、残念ながらそのまま復活することはなかった。現在は、JR陸羽東線鳴子御殿湯駅の名称にその名残がある。

湯治は日本において古くから行なわれてきたが、文化の起源は江戸時代であると言われている。1600年関ヶ原の戦いの後、徳川家康が1週間ほど熱海に滞在し、温泉で保養した。それを大名たちが真似して広まったと言われている。しかし「温泉の力」は、原始の時代から「不思議なお湯」として親しまれてきたのではないだろうか。

東鳴子は観光地ではなく、保養基地として栄えてきた。一次産業に従事する多くの人々が湯治に訪れていた。さなぶり、稲あげ後の湯治、8月の土用の丑の丑湯治、農閑期に一番長く滞在する寒湯治のための農民、陸に上がった漁船員や漁獲が一息ついた漁師たちで賑わっていた。東日本大震災のあるなしに関わらず、昔から沿岸部の方々とつながりがあった。毎年宿泊にくるお客様の部屋は決まっていた。だから、お客様も鳴子の親戚の家に行く感覚で湯治へ来ていたのではないかと感じていた。お客様はお孫さんが産まれると湯治場に連れてきて、旅館内はとても賑やかになった。昔は私もお客様ののお孫さんと一緒に遊んだ思い出がある。宿とおお客様の家族ぐるみの交流やお客様同士の交流があり、湯治場は独特のコミュニティの場であった。湯治には「お湯の力」と「コミュニティ」という2つの大きな魅力がある。



3月11日 14時46分

当時、妻が妊娠していたので、古川でパパママ講座（安心して出産育児ができるよう妊婦やその家族が参加する講座）に参加し、新しい合同会社の登記を済ませて、大沼旅館へ戻った。その後、旅館の事務所で山形の方と打ち合わせをしていると、突然大きく揺れた。揺れはなかなか止まらない。妊娠している妻が心配で、建物が崩れると危険なので外へ避難した。通りに出た途端、屋根に積もっていたすべての雪が、どどーっと雪崩のように落ちてきた。事務所は書類などが散乱し、ぐちゃぐちゃになってしまった。5～6組のお客様が宿泊していたので、揺れが収まってからすぐに安全確認をした。その後、従業員や家族の安全確認を行なった。余震が続きとても寒いのに停電してしまったので、広間に旅館内避難所を作って、お客様を含め皆で集まり、ろうそくを灯して石油ストーブで暖をとった。その日はラジオで情報を得た。「遺体が200体」と放送されていて、なぜ亡くなったのか、何が起きているのか、想像がつかなかった。津波が沿岸部を襲い、気仙沼でも火災が起きていると報道されていた。大震災の全容は発生から4日ほど後に新聞で知った。お客様の中には帰るに帰れない状況で、長くて2週間滞

在した方もいた。

電気はすべて止まり、3～4日は暖房などが使用できなかったが、水道は止まらなかったし、プロパンガスなので調理はできた。土日の宿泊客に備え、食料も備蓄してあったことも幸いだった。鳴子で買いだめをする人はいなかったし、スーパーマーケットに行列ができる様子もなく、食べ物に困ることはなかった。鳴子は個人商店が多いので、パン屋もラーメン屋も普通に営業していた。バスが運行していたので、仙台から鳴子へ買い出しに来る人がいたほどだ。電車は1ヶ月ほど止まったが、バスは地震のあった当日も運行していた。困ったのはガソリンで、手に入らないのは非常に不便だった。

先祖が残してくれた仕組み

温泉は共同源泉と自家源泉の2系統ある。2系統とも電気を使ってポンプで送っているの、停電で止まってしまった。震災当日はタンクに貯まっている残りの分で、男女で時間を区切り皆でお風呂に入った。沿岸部で苦しんでいる人を思うと温泉に入っていることを、申し訳なく感じた。一方では、自然の恵みで温泉に入れていて、もう一方では自然災害によって生死の境にいる人たちが大勢いる。同じ自然だが、慈悲と無慈悲、自然の真逆の2つの側面を知った。電気もつかない真っ暗な中で空を見上げると、星がとてもきれいで悲しくなった。

翌日、停電でポンプは止まっているので、当然お湯も止まっているだろうと思ってお風呂へ行くと、湯気がのぼっていて不思議に思った。「あれっ？ポンプは停電で動いていないし、タンクは昨日お風呂に入ったので空になっているはずだぞ？」湯口に手を当ててみると、確かに熱いお湯が流れている。驚いた。その後すぐに「ああっ！これは先祖が100年前、源泉からお湯が傾斜をつたって入ってくるように作ったんだ！」と気づいた。先祖が残してくれたお湯をくみ上げる仕組みが、停電したことで初めて分かった。驚きと同時に先祖に対する感謝と畏怖の気持ちがにじみ出てきた。すべてが途切れた時でも、お湯がこんこんと湧いている。人を癒すお湯の力にも感動した。水もガソリンも灯油もない、何も必要とせずお湯が湧いてくる。完璧な仕組みだと思った。仕組みはシンプルほど長持ちする。風呂を無料開放して、町の人たちに入りに来てもらった。

二次避難の受け入れ

行政から要請があり、南三陸や女川、東松島の人々を鳴子の温泉地帯で受入れることになった。全体



朝日が差し込む千人風呂（旅館大沼）

で1,000人以上の受け入れを行なっている。私の旅館では2011年4月～9月までに、女川の3家族を受け入れた。一緒に枝豆作りをし、家族のように過ごそうと心掛けた。避難してきた方々は当然ショックが大きいようで、最初は散歩をする人もおらず、神経質になっていた。いろいろな慰問団が鳴子に来てくれたし、様々なイベントを企画してたくさんお誘いしたので、避難してきた方々は少しずつ外へ出るようになっていった。震災後、震災以前から付き合いのあった沿岸部の人たちも徐々に旅館へ来ている。震災があっても交流は続いているが、なかなか前のように戻れない。仮設住宅は狭いし壁も薄く、これまでにないストレスで、まだまだ気軽に旅行できる状況ではないようだ。

心と身体を再生する場所

人間も含めて様々な種が、地球に暮らしている。日本は火山国で温泉といった恩恵を受けることもあるが、地震や台風などの自然災害も非常に多い。昔から自然に翻弄され続けてきた中で、日本人は自然をコントロールするという概念は持たなかったはずだ。漁師は海から魚を獲り、農家は土に種をまいて作物を獲り生計を立ててきた。自然から命の源をもらい、疲れたら温泉などの自然に癒されてきた。我々はまさに自然と寄り添って暮らしてきた民族なのだ。これまで我々は自然と折り合いをつけて生きてきたし、これからも折り合いをつけて生きていくしかない。

地震は必ず起こる。東日本大震災の記憶でさえ時間とともに風化し、いずれは忘れられてしまうだろう。しかし、日本に住んでいたら避けては通れない。これまで人間中心に、経済を中心に考えすぎたのではないだろうか。儲けのためなら何でもしてきた。環境を破壊しようが、誰も止められな

かった。現在の経済の仕組みは、限らない消費の方向に進んでいる。我々はそうした方向が自分たちの居場所である地球を、自ら壊していることに気づいていない。そうした中で起きた地震だということを忘れてはならないと感じている。

福島原発事故で子どもたちは外で元気に遊ぶこともできずにいる。なぜこうなってしまったのか。原子の世界までコントロールしようとする人間の欲が原因ではないのか。単に震災で壊れてしまったものを元通りに直すのではなく意識の変革をしなければ、食べ物すら手に入らない世界になる。この震災は1,000年前に起きていれば、自然災害だったが、現代に起きたことは人類への警鐘、文明の転換点と捉えるべきだと思う。震災が起こり、紙幣がただの紙切れになった時、我々はお金があっても幸せではないことに気が付いた。お金を

使うことだけが幸せなのか。まさに本当の豊かさとは何かと考える時だ。私にとって豊かさは全てが断絶された中でも湧いてくる自然の恵みの「お湯」、またそのお湯をくみ上げる仕組みを残してくれた先祖とのつながりが象徴している。温泉に入ること地球とつながり、自然と共生する。我々は自然がないと生きられない。

シンプルが一番である。電気が止まっても、最低限生きていけるというよりどこは重要だし、何より地球と共存していくことが大切だ。鳴子は地球の熱エネルギーを与えられた恵まれた場所で、ポテンシャルが大きい。湯治場は身体を癒し、自分が自然の一部だということ、自然の恩恵を受けて生きていることを気づかせてくれる心身の再生の場だ。湯治場である鳴子が、人の命と地球の命が循環する場になることを願っている。

個人

南三陸町

南三陸町から新たなライフスタイルや価値観を提案していきたい。

後藤 一磨 個人

取材日 2012.09.18

地域の歴史や文化、自然が大切であるとの考えから、宮城県南三陸町の文化財保護委員や南三陸ふるさと研究会、観光協会地域ガイドとして活動してきた。東日本大震災後、津波の教えを復興と新しいまちづくりに生かし、自然や文化を次世代へ受け継ぐために「福興市」語り部プロジェクトで自らの被災体験を語る語り部ガイドとして活動している。

震災以前の活動

私は南三陸町の文化財保護委員だ。地域の歴史と伝承が大切であると考え、「南三陸ふるさと研究会」で活動している。この研究会は、南三陸町の文化や自然などさまざまな分野を題材とし、ふるさとのより良い未来を志向して、過去と現在を研究する会だ。東日本大震災以前から、津波に関する伝承はたくさんあった。例えば、南三陸町の入谷（いりや）地区には、津波によってそこまで船が入ってきたから「ふなくぼ」、津波が来たがそこで家が残ったから「残谷（のこりや）」といった地名が残されている。東日本大震災以前、話が伝わるうちに大げさになったのではないかと、縄文海進の水位が高かった頃の話ではないかと思い、ふるさと研究会で津波をテーマとして大きく取り上げることはなく、そうした地名の由来の検証を行なうことはなかった。しかし、それらの伝承が確かなものであったことが、震災後に検証されている。



3月11日 14時46分

私は戸倉中学校同窓会の役員だ。あの時は卒業生の同窓会入会式を終えて、校長室でお茶を飲んでいた。翌日は卒業式だ。そろそろ帰ろうかと、玄関で校長先生や他の同窓会の役員たちと「明日は晴れるといいね」と話しながら靴を履いている時

だった。ものすごい大きな揺れが起こった。何かにつかまっていなくて立っていられないほどだった。下駄箱が倒れてくるのではないかと、玄関の戸のサッシが外れるのではないかと危険を感じた。揺れている時間が非常に長く、5～6分は揺れていたように感じた。「ついに宮城県沖地震が来たな。必ず津波が来るぞ」と直感した。中学校が建っている場所は海辺ではあるが、約20mの高台だ。まさかここまで津波が来るとは考えもしなかったが「生徒たちをよろしく願いますね」と校長先生たちに言って中学校を後にした。しかし、実際は津波が到達した。

家族と高台へ避難するため、急いで自宅へ向かった。自宅は市街地ではなく漁村地域にある。自宅まで車で走っている時、地震による被害は少ないように感じた。古い家の瓦が落ちていくくらいだ。車が混雑している様子もなかった。漁民の財産である船は、引き潮で海水がなくなるところに置いておくためになってしまう。引き潮になる前に船を沖だし（沖合に出すこと）する必要がある。海の様子を確認しながらそれぞれが判断し、船を守りに浜へ向かう人、高台へ避難する人に行動が分かれた。

自宅に戻ると、妻と息子が棚から落ちたものなど地震でぐちゃぐちゃになった家の片づけをしていた。「お前たちそんなことしている暇はないんだぞ！」と避難を指示した。チリ地震津波とは違い、すぐ近くで起こった地震で起きる津波だ。早ければ15分で津波が来ると思った。私は背広を着ていたが、避難してからのことを考えて普段着に着替えた。着ていた背広を2階の部屋に放り出した。普段は几帳面な妻がその時はパニックになっている様子で、仏壇の位牌を抱えて逃げようとした。「津波が来るぞ！そんなものはいいから、逃げるぞ！」と言って連れ出し、急いで車で高台へ向かった。妻と息子は乗用車で、私は軽トラックに飼い犬を乗せて避難した。高台から海へ目を向けると、海水がない。昆布が残って黒くなった海底が現れていた。海水が無くなり、岩礁地帯が山のようにそびえて、砂や泥の地帯が低く平野のようになり、一番深い部分が川ようになって、今までそこにあった海水が流れ込んでいくといった光景だった。志津川湾から見える樺島が干上がったように見え、時間さえあればそこまで歩いて渡れそうな光景だ。「ああ、また海の底が見えた！」と思った。実は、当時中学1年生だった私は、同じ高台から同じ海の光景を見ていた。昭和35年（1960年）5月24日のチリ地震による津波の経験だ。海水が無くなり、赤茶けた色の海藻が残った海底の光景は今でも忘れない。チリ地震による津波の被害は、当時の自宅の床上30cmほどだった。水平線に白い帯がスーッと引かれて見えた。そ

れがだんだん近づいてくる。「ああ、来たな、自宅の2階まで海水が行くかもしれないな」と思った。チリ地震津波はゆったりした感じだったが、それとは違うように感じた。樺島が半分以上波に飲み込まれた。南三陸町は昭和35年に被災してから堤防を作った。昭和35年の津波の時は堤防が無かったので、今回はそのコンクリートの堤防が守ってくれるかと期待していた。しかし、5mほどの堤防に波が当たっても一切水しぶきを上げることもなく、波はスーッと侵入してきた。堤防よりはるかに高い波だった。波が堤防を越えると浜沿いの木造家屋をなぎ倒した。柱がへし折られバキバキと音が響いた。だいたい速度は40～50kmはあっただろう。水の壁が襲ってくる印象だった。次々に家がのみこまれ、自宅まであっという間に波が到達し、約15年前に建てた別棟は粉微塵にされてしまった。母屋は最初、水にじっと耐えているように見えた。しかし、波が軒を越えた途端ぐらっと傾き、スッと浮いて、そのままの形で西の方に押されていった。3回ほど回転して引き波にさらわれていってしまった。かやぶき屋根の自宅が、私たちの目の前を通って樺島の向こうに消えていった。チリ地震の津波の経験から、今回の津波は2階まで浸水するかもしれないと思ったが、まさか家を持っていかれるとは思わなかった。自宅が流されていくのを見るのが一番悲しかった。

波が盛り上がるようにうねり、大丈夫だろうと思っていた家までを次々とのみこみ、私たちが最初に避難した場所にまで津波が迫ってきた。避難してきた人たちが乗ってきた車が何台か駐車してあったが、人だけでも逃げなければと、より高いところへ皆で逃げた。ほんの10m動かせば助かったのに、目の前で10台ほどの車が津波にさらわれた。その後、波が引き始め、それを見て避難していない人を助けに行かなければと、高台から降りていこうとする人がいたので「だめだ！また波が来るから！」と力尽くで制止した。一番高いと



撮影：2011.3.11 南三陸町 第2波の津波が到達する直前、干上がったように見えた樺島の様子（つり船 明丸 三浦明さん撮影）

ころへ避難すると、皆集まってきた。高台へ避難したのは総勢70名ほど。同じ地域に住む顔なじみばかりだったので、避難してきていない人もすぐに分かった。しかし、その人たちの無事を皆で祈るしかなかった。

夕方になると横殴りに雪が降り出した。皆で相談して火を焚いて過ごすことになった。私が山歩きを得意なことを集落の人たちは皆知っているの、私がリーダーシップを取り若い人たちと木を集めてきて、たき火を2ヶ所に焚いた。火を囲って丸太を置き、皆で肩を寄せ合って寒さをしのいだ。子どもや高齢者は被害のなかった車の中で暖をとった。余震は収まらず、津波によって家をなぎ倒されるバキバキという音が聞こえ、「もう何波目になる？」と皆で話していた。空は真っ赤に染まっていて、気仙沼で火事が起きていることが分かった。

海を見ると航路標識の赤い点滅灯が、波が来ると岸に押し寄せ、波が引くと沖に流されていく。不安に襲われながら身を寄せ合って一晩を過ごした。毎年、津波避難訓練があるが、高台で点呼を取るだけで、非常避難袋を持つ習慣などなかった。皆、避難訓練に参加しているだけだったので、実際の避難の時は着の身着のまま逃げてきて、食料や毛布など必要な物は持ってきていなかった。誰も眠ることもできず、夜が明けた。

一変した集落と避難生活

明朝、最初に逃げた高台へ降りて、状況を確認した。集落はまるっきり一変していて、ひどい状態だった。堤防は3分の2がなくなり、大きくえぐれた2ヶ所から波がひたひたと田んぼだったところへ流れ込んでいた。国道には漁船が3隻乗り上がり、瓦礫となった家の残骸があちこちに散乱していた。「何もない」と、皆で集落を呆然と見渡した。波伝谷地区は70戸ほどあったが、津波から逃れた家は2軒だけだ。昭和35年の津波が来なかった地域の被害がとても大きかった。

私たちが避難した高台は小さな祠があるだけでそこにずっといることはできないので、「宮城県志津川自然の家」という宿泊施設に避難することにした。道は段差や2～3mの溝ができていたので、私を含めた4～5人が先導となり、子どもや高齢者が歩きやすいように瓦礫を片付けながら道を確保した。その間も余震があり、津波が来る恐れがあったので、高いところへの避難を繰り返しながら進んだ。約1.5kmの道のりを約3時間かけてたどり着いた。お昼前くらいに到着し、そこに研修で来ていた高校生や先に避難していた近所の人たちが迎えてくれた。「お前、大丈夫だったか！生きてたか！」と抱き合う光景がそちらこちらに見



軽トラックに積んであるナタなどの道具

られた。別の高台へ避難していた住民も集まり始め、自然の家には320名ほどの避難者がいた。そのうち、毛布、水とおにぎりを渡された。おにぎりを見た途端おなかやすいて、地震が起きてから何も食べていないことに気づき、かぶりついた。あの時のおにぎりほどおいしいものはない。

大きい川の橋が流され、土砂崩れや道路の端が削られて寸断した場所もある。どこからも車で入れる状態ではなく、自然の家は孤立状態だった。2日目、地域の顔見知りの住民がどこに避難しているかなど所在確認をしながら、避難者名簿を作成した。水洗トイレは使用できないので、グラウンドに穴を掘って臨時のトイレを作った。軽トラックに積んでいたナタなどの道具を使って、洗い場や物干し場を作った。高齢者や身体の弱い人を宿泊棟へ、若い人や身体の丈夫な人を体育館へ割り振り、皆で体育館に寝具を運んだ。さらに1～5までの分けをし、家族が並んで布団をとれるように寝場所を確保した。携帯電話は使用できないし、電気もないのでテレビも見られなかった。夕方、自然の家まで車で逃げた人のカーラジオから被災状況の情報を得た。南三陸町、志津川の市街地は壊滅、JR気仙沼線も役場も何もない。1万1千人が行方不明ということが分かった。

3日目の朝、全体の状況を確認しなければ対策の施しようがないため、何人かと相談してベイサイド・アリーナまで歩こうと決めた。役場が対策本部を作るのはアリーナだろうと思ったからだ。自然の家の職員に急いで避難者名簿を書き写してもらい、皆から今必要なものを書いてもらった。さらに病状が悪化し救急搬送が必要な人数を確認した。5～6名はすぐに病院に行かなければならない状態だった。中には「勝手なことはしないで」と反対する人もいたが、出張中に被災し会社に連絡を取りたいという人など5～6人を引き連れて歩いていくことになった。アリーナまで行く途中は、瓦礫がすごくてどこを通ればいいのか分からな

い状態だった。やっと荒町までたどり着く手前で、初めて自衛隊に出会った。オーストラリアやニュージーランドなど外国のレスキュー隊が救命活動を始めていた。アリーナ到着までに5時間かかった。役場の対策本部へ行くと、よく知る役場職員がいたので、「なんとか生きてたよ」と話しながら避難者名簿を渡した。しかしアリーナも避難者でゴった返していて役場職員も大変な状況だ。行政として機能しておらず、どうしようもない状態だった。ちょうど自衛隊のヘリコプターがグラウンドへ降りたところで、緊急で病院に搬送してほしい人が自然の家にいると直接自衛隊に交渉した。アリーナから自然の家に戻る時、偶然知人と再会し「生きてたのか！ご飯食べてたの？」と聞かれ、お米を分けてもらった。私たちが自然の家に戻ると、ヘリコプターが病院へ搬送が必要な人たちを乗せて飛び立つところだった。それを見て、役目を果たせたなと感じた。

4日目の午後、海上自衛隊の帆船から大型ヘリコプターが飛んできて、おにぎり、水、毛布などの物資が運ばれた。自衛隊のヘリコプターが自然の家の広場に着陸した時には、「もう大丈夫だ」と安堵した。5日目からはアメリカ軍の援助もあり、片言の英語でガソリンや灯油をお願いした。物資は、仮設の橋ができて陸上輸送ができるようになるまで、1ヶ月近く空輸で運ばれた。4日目か5日目に報道機関が来た。最初は地元の人たちが警戒していて報道機関を入れないようにしていたが、外の人たちに自分たちの被災状況を発信するために報道機関に入ってもらった。10日目くらいからは県外からボランティアが来た。

自然の家で約20日間を過ごした。3月末に町から、近隣市町村への二次避難の話があった。避難者同士で「同じところに避難したいね」と話し合ったが、皆の希望は叶わずバラバラになってしまった。4月3日私は加美町に二次避難した。そこには宮城の人だけでなく福島の人もあり、総勢約80名が避難していた。お風呂に毎日入れる嬉しさや地域の人々の優しさが天国に感じた。家や車などすべての物が流されて何もなくなってしまったと感じていたが、津波は人と人の関係を流すことはなかったと思う。

語り部ガイドのはじまり

4月末の日曜日から朝市ネットワークの支援と人脈で、月1回の「福興市」を出した。地元の商人たちが元気にならないと町は元気にならない。5月の連休明け、ボランティア団体から町の観光ガイドサークルのボランティアメンバーに声がかかった。いろいろな人たちが町にきているけれども、ただ歩いてもどこがどこか分からない。以



撮影：2012.9.11 南三陸町 防災対策庁舎

前の町がどうで、どんな暮らしをしていたのか知りたいというのだ。この呼びかけに応じたのは、12名。必要なことだと思っし、支援を受けるだけではなく、自分たちでできることをしようと決めた。

5月末の福興市の日、志津川中学校で語り部ガイドがスタートした。中学校の1教室を借りて、時間を区切って自分たちの体験を語った。福興市での語り部は現在でも続いているし、ここに来る人たちの要望に合わせて旅館の1室やバスで語り部ガイドを行なっている。今では最初の12名のメンバーではまかなえないほどだ。南海トラフ地震や首都直下型地震が懸念されるようになり、西日本の消防団や行政の方が来ている。また、物見遊山で行っていいものだろうかと危惧する人が多かったが、1年経ってそろそろ行ってみてもいいのではないか、行って買物することで復興に役立てるのではないかと、だんだんと一般の方も来るようになった。

語りを聞いて涙を流す人もいる。「被災されたのにどうしてそんなに前向きに行動できるんですか」とある参加者から言われた。無くなったもののことをいつまで考えていても、戻ってくるわけではない。私たちは幸いにして生き残ったのだから、生き残った者の務めは、未来に向かって歩き出すことだろうと思っている。今、私に何ができるかを考え、できることをやっているだけだ。

後世に伝えたいこと

課題はたくさんあると思う。津波の被害を受けた建物がどんどん解体されている状況を「何かが違う」と感じた。基礎コンクリートまで除去され、更地になり、草が茂った様子を想像した時、ここがどのような場所で、何が起きたのか全く見えない場所になってしまう。津波の記憶は私たちにとって忌まわしいものであるから、それを思い出させる建物はなくなった方が良くかもしれない。

ところが、あの津波が来て堤防が全く役に立たず家が流されていく状況を見て、自然の許容する範囲でしか人間の暮らしはないのだと私たちは学んだ。明治より文化文明技術を進歩させれば、自然を人間の支配下におけると思いあがった感覚で自然と対峙していたように感じる。南海トラフ地震や首都直下型地震が懸念される今日、それらの学びをきちんと後世に伝えていくことこそ一番大切なのではないだろうか。

震災直後、あちらこちらを歩いて回り、高台踏査なども行なった。その中で、縄文遺跡が今回の津波の被害を免れて残っていることが分かった。かつてここで暮らしていたご先祖様は、津波の被害を受けることなく安全に暮らせる場所をきちんと知っていたのだ。我々は技術を持ったことで振り回されて、いつの間にか忘れてしまったことがあるのではないかと思う。日本の思想、宗教などは自然と共存するという考え方だが、西洋や中近東の考え方は神が優先して、人間が自然を支配するという考え方だ。私たちもそれを進歩だと思い込んできた。

震災を経験して、西遊記の冒頭が思い浮かんだ。自分たちはお釈迦様の手のひらで踊らされていた孫悟空だったのではないか。自然をコントロールできるなどという考えは人間のおごりだった。私たちの生命は、母なる地球環境とは別の惑星では生きられないと思う。自然と私たちの生活をどう折り合わせて、どう生きていけばいいのかが問われているのだ。

福島原発事故で故郷を失った人々がたくさんいる。この問題が何年後まで続くのかも分からない。気づけば日本には50もの原発があるが、これからのリスクを考えると本当にこれでいいのかを問わなければならない。私たちは今日より明日、

少しでも良い暮らしをすることを望んできた。それには多くのエネルギーが必要であった。原発を後押ししてきたのは、結局私たちの果てしない欲望なのだ。少しでも少ないエネルギーで楽しく幸せに暮らしていける社会にしていくことが大きな課題だと思っている。

震災を振り返って

幸せはGDPだけで図れるものではないと思う。生きていることの意味は、心の在り方にある。震災後、「絆」という言葉が多く使われていた。これまでの社会は人間関係が断ち切られたようだったのに、極限の状況は人々に生きているということ、人間関係など様々なことを考えさせた。皮肉にも震災が我々に気づかせたのだ。

環境保護とは自然を守ろうということではなく、私たちの暮らしを守るためなのだ。ご先祖様があって私たちがいる。そこには命のつながりがある。動物や植物も同じだ。私たちは、ご先祖様、動物、植物がこれまで地球環境を支えてくれたことに感謝しなければならないと思う。私たちの暮らしや幸せは自然の中でしか成立しない。持続する社会のために自然や文化を未来へ受け継ぐことが必要なのだ。人口の増加や経済の成長だけが良いことではない。人口が減少しても、経済が成長しなくても、その地域のいい面を見て、むしろ新たな生き方を発信していけるようになるべきだ。新たなライフスタイルや価値観の提案を、南三陸町からしていきたいし、南三陸町が全国の先進的なモデルともなり得ると考えている。ぜひ現場に来ることで、震災を自分の体験に近いものにしてほしい。きっと学ぶことが多くあるだろう。

個人

地名に込められた先人からのメッセージ。

大崎市

太宰 幸子 宮城県地名研究会

取材日 2012.09.20

日本地名研究所会員、宮城県地名研究会会長、東北アイヌ語地名研究会会長。2005年～2008年 河北新報社「地名の泉」土曜日執筆担当し、2012年TBS系列（JNN）サンデーモーニング「風を読む」地名と歴史などに出演。主な著作『みやぎ地名の旅』、『災害・崩壊地名～地名にこめた祖からの伝言』、『地名は知っていた 津波被災地を歩く＜上＞・＜下＞巻』他多数。

3月11日 14時46分

息子が住んでいる美里町桜木にいた。揺れが大き

く家屋からいつでも逃げることができるようにま
ず玄関や窓を開けた。揺れ始めてからずっと時計
を見ていたが強弱はあったものの20分以上揺れ

が続いていた。揺れが落ち着いた頃、鹿島台の自宅に車で戻ることにした。信号が止まり道路はいたる所に段差がありマンホールからは水が噴き出していた。ゆっくり1台ずつ譲り合いながら片道通行になっていたため大渋滞が発生していた。途中、松山町を通ると道路は盛り上がりとてもひどい状況だった。通常10～15分で着く道のりだが、あの日は2時間近くかかり、午後5時頃にやっとの思いで鹿島台にある自宅に戻ることができた。自宅に足を踏み入ると仕事場である書庫の中は足の踏み場がないほどたくさんの書籍が崩れ落ちていた。

停電、断水、もちろん携帯電話も繋がらない。幸い自宅の近くに井戸がある民家があり水を分けてもらうことができた。情報源はラジオだけだった。自宅に戻りすぐにラジオをつけた時、津波の被害がでていることを知った。大きな余震が続き、雪も降る寒い夜で不安が続く中、夜は明けていった。翌朝いつも見る風景を眺めていると、塩釜港の方に火災による煙が見えた。届くと思っていなかった新聞が届いていた。いつもと比べてとても薄い新聞を見て改めて被害の大きさを知った時は、知り合いのことや何度も地名調査で訪れた所を思い浮かべ、気分がとても落ち込んだ。

2人家族で米などの食料は何日間か凌げる程度の備蓄はあった。不足していた生活必需品は、農協で運営している商店で在庫販売してくれたおかげで非常に助かった。食料の値段も通常と変わらない値段で販売し、買占めをするような人もいなかった。田舎暮らしの良さを感じた瞬間だ。近所の人々が作ってくれた餅や煮物を分けてもらいに、空っぽのリュックサックを背負って1時間程かけて歩いて出かけた。帰りはリュックがいっぱいになるくらいに物資を分けてもらった。まるで戦後の買い出しをしているようだった。

自宅付近の集落では昔あったコミュニティが残っていて助け合いの心がこの非常事態にとっても心地よく感じた。

代表を務めている宮城県地名研究会の会員の方々の安否がとても気がかりだった。家に居るだけで気持ちが落ち着かなかったのが、3月13日頃に会員の方に手書きの手紙を13通ほど書いて、郵便配達がいづ復活するか分からない状況だったがポストに投函することにした。

震災から1週間後くらいに自宅の電話が通じるようになったときは、全国各地からの安否を心配する留守電が多数録音されていた。その後、手紙を見てくれた会員の方々から返信が届いた時はとても嬉しくほっとした思いだった。



震災後初の調査活動と支援活動

4月に自宅から一番近く甚大な被害を受けた東松島市の野蒜へ行った。ニュースで自衛隊が遺体捜索活動等をしていた事を知ったので、その活動の邪魔にならないよう心がけた。

野蒜に着き車を降りた瞬間、亡くなった人の思いや声も聞こえるように感じた。一度車に戻り気持ちを落ち着かせることにした。その当時の衝撃は今でも鮮明に記憶に残っている。自分の心の中で被災地に行つて写真を撮影し、地元の方に話を聞く事は間違いではないかと思うこともあった。非常事態の状況が続く中「何か人の役に立ちたい」と考えていたので、自分のブログで支援物資を全国から募ることにした。ブログを見た全国各地の方々から米やパンなど食料を大量に送っていただいた。当時、不足していた衣料品や生理用品なども広島や奈良など遠方の方々から送っていただき、被災地の知人に届けることができた。知人が支援物資へのお礼の手紙を書きたいが辞書がないので手紙を書くことができないと言っていたので、自宅にあった国語辞典を持って行ったところとても喜んでくれた。



撮影：2012.4.12 気仙沼市大島 お孫さんを亡くした女性が、扶られたり表土を剥がされ、砂地となった畑で馬鈴薯を植え付けるため草引きをしていた

鹿島台には吉田川と鳴瀬川が並行して流れているが、津波の跡が2つの川に残っていると聞いた。震災後の調査で野蒜海岸から13.5km遡上していたことが分かった。水の勢いの凄さを強く感じた瞬間だった。

宮城県地名研究会が設立されて早や20年になるが調査研究していて気づかされたことがたくさんある。それは地名に込められた「知られざる故里の歴史」の深さだった。文字に記されていない、歴史そのものだ。「故郷を知る手掛かりは、地名にあり」である。近年、古今東西を問わず、地震や大雨などによる自然災害が目立ってきている。目も耳も疑うほど、悲惨な災害が多いことも事実だ。その悲しさや惨さを、地名はしっかり伝えてきた。私たちは、その地名にもっと敬意を表し、先人が報せてくれている事実から目をそらさず、耳を傾けるべきだ。地名は、今そこであった事実だけではなく、古い時代にあった災害をも伝えている。地名調査を行なう事で地名に込められた先人の思いをもっと大切に、後世へ伝えるべきだという気持ちが震災によってより強い思いにもなった。

災害地名を調査するきっかけ

火山列島である日本は、自然災害の歴史が古くから続いている。どこに住めば安全なのか、そんな不安に駆られている方々もたくさんいると思う。地名には、自然災害で土地が壊れたこと、洪水で泣いたこと、泣かされたことが声なき声として伝えられている。特に美しくすてきだなと思われる地名は要注意であることがある。災害は忘れた頃にやってくる。地名は、まさに先人から受け継いだ大いなる宝物だと思っている。

宮城県の多賀城に「螻蛄喰（けらくい）」という地名があり、その地名について残した著書があった。螻蛄（ケラ）があんまり沢山いて、その地区の土地を喰い荒らしたという言い伝えがあるという。自分ではその話がどうしても納得がいかなかった。今から20年程前、人々の自然災害に対する気持ちが変化してくるのではないかと考えたことが、災害地名を調べるきっかけになった。災害地名の具体例として登場する60ヵ所余りの住所はいずれも、自らの足で歩き、地元の人から話を聞き、地形を確かめ、地名と史災との関係を検証した。

自然災害の痕跡を残した先人からのメッセージ

災害に遭いやすい場所は、地名が伝えている場合があると言われている。仙台市青葉区の栗生地区

では、今回の震災で隣接する地区で地滑りが発生し、アパートの敷地に土砂が流れ込んだ。地元の話によれば、昭和20年代にも今回に似たような土砂災害が起こった。栗生の「栗」の発音が、災害の履歴を表している。「栗」のものの発音は「くれ」で、土地が「崩れる」ことを表すという。この近くにある地名に「柿」のつく地名があるが、この「柿」は「欠ける」を意味し、土地が削り取られた場所などに見られる。

また、やはり近くに「梅」のつく地名もあったが、過去に土砂で土地が埋まったことを表している場合がある。つまり「埋め」が「梅」になった。地名は時代とともに、イメージのよい文字に変えられたが、由来をたどると土地の下の方姿を知ることができる。もちろんすべての「栗」「柿」「梅」に当てはまることなく、その土地ごとに調べてはじめて分かることなので、誤解のないようにしていただきたい。

地名もまた、先人のメッセージとして受けとめるべきだ。崖崩れになりやすいから気をつけたほうがいいよと子々孫々に伝える、あるいは自分たちの仲間にも伝える、そういう意味を込めて地名がつけられたと思う。市町村合併や宅地開発で古い地名が消えていく時代、地名に込められた先祖の知恵、地名に隠された事実と歴史、その重要性を知ってほしい。

震災を振り返って

津波に襲われた三陸海岸を歩いていると、海は穏やかで青く美しい。まるであの日のことはなかったように思うこともある。いったいあれは、何だったのかと目を疑いたくもなる。

被災地を調査していると、いつも心が重くなった。今、私が足を置いている場所に、行方不明の方が早く見つけて欲しいと待っているのではないかという思いが強くなる。しかし、それでも、後世の人々にこの大きな震災からどのように復興し、どのように切り抜けたか、そしてどんなにこの東北、宮城県が美しかったかを伝えなければならない。そしていつかみんなが笑顔の日がやってくると信じている。そのためには私たち一人ひとりが助け合い、できることから小さな一歩を歩んでいきたいと思う。

津波災害と地名のつながりを調査していて、浜の人々の信仰心の篤さに触れる機会がたびたびあった。海と共に生きて来た人々の心の奥深さをも知ることができた。

どうか少しでも早く、以前の元気な東北、宮城県になって欲しい。みんなが笑顔で暮らすことができ、故郷を離れたりしないような穏やかな生活の日々が戻ってくるように切に思う。

任意団体 地域が存続できる農業を目指したい。

仙台市

広瀬 剛史 ReRoots

取材日 2012.09.21

東日本大震災で川内コミュニティーセンターに避難したメンバーとともに2011年4月ReRootsを結成し、7月には仙台市若林区にReRoots若林ボランティアハウスをオープン。若林区の農業再生を目指して「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」という中長期的コンセプトのもと、地域とのつながりや農家の目線を大事に活動している。

3月11日 14時46分

当時は寿司屋で働いていて、お昼ピークを終え一息ついている休憩中だった。携帯電話の緊急地震速報が鳴り出し、最初は何の音か分からず「なんだろう?」と思っていると、突然ものすごい揺れに襲われた。とっさに冷蔵庫や冷凍庫を押さえたが、手を払いのけるように激しく動き、扉が開いて寿司ネタが飛び出してくる。棚からはすし皿がどんどん落ちてきて、ロッカーが飛び上がった。このまま店の中には危ない。店長とアルバイトと3人で外へ逃げようとしたが、出口には棚がのしかかっていた。それを押しのけて外へ出ると、近所の人たちも慌てて出てきた。裸足で駆け出してきた人、悲鳴を上げている人、腰から崩れ落ちている人、みんな必死の顔をしている。目の前の高層マンションがちょうどL字型に建っているが、そのLの角にあたる連結部分が外れ、マンション同士がぶつかり合っていた。電信柱が揺れ、道路は波打ち、ブロック塀が崩れ落ちた。水道管が破裂したのか水が道路から噴水のように溢れ出してくる。揺れが落ち着くと、寿司屋の2階にある居酒屋に、逃げ遅れたお年寄りがいたので無我夢中で助けに向かった。割れた酒瓶などが散乱し、中はぐちゃぐちゃだった。お年寄りは歩くことができなかったの、背中におぶって急いで外に出た。近くのマンションの一室から火の手が上がり、煙が立ち昇るとともにサイレンの音が鳴り響いた。すぐに避難しなければならないと思い、店長とアルバイトは近くの小学校へ、私は仙台市青葉区川内にある自宅に戻り、ポリタンクやバケツ、お風呂に水を溜めてから、川内コミュニティーセンターへ避難した。そのとき家の玄関のドアは歪んで閉じることはできなくなっていた。川内コミュニティーセンターの近くには東北大学や保育園があり、学生や子どもたち、心配する親御さんやおばあちゃんたちなど、地域の住民が続々と避難してきた。体育館や和室などは人でいっぱいになり、夕方になるにつれて気温が下がる中、ラジオで沿岸部を



津波が襲ったことを知った。体育館では悲鳴が上がり、頭を抱え込む人、信じられないといった顔をする人、黙り込む人…呆然とする中でとっさに沿岸部にいる友人の顔が浮かぶ。だが、その時はまだ被害の全容が分からずにいた。翌日、新聞を読んで大変な状況になっていることを知った。

海岸の様子を見に

私は趣味で波乗りをするので海の様子が気になり、震災後4、5日目に自転車で15km離れた海岸を見に行った。その道のりで見た光景は、ショックで感情を表現することはできない。民家が流され、車が押しつぶされ、辺り一面瓦礫の山で覆われている。目に見える360度すべてが廃墟と化し、圧迫感が自分にのしかかってくる。足元は泥でネチャネチャしてまわりつき、にもかかわらず、乾いた埃が舞っていて空気がざらつく。火事の煤けた臭いやヘドロの変な臭いが混じり合って気持ちが悪い。上空を飛ぶヘリコプターのバリバリという音が耳をつんざく。五感すべてが生きているものを感じない。あまりにも悲惨な状況で自然に涙が出てきた。結局、海までたどり着く気持ちになれず、引き返した。

学生ボランティアとの出会い

地震発生から2～3日は、寿司屋で働いているアルバイトの安否確認や店の片付けなどを行っていた。私が川内コミュニティーセンターに避難したのは2日間ほどで、電気が復旧した後は自宅に戻った。初めのころ避難所は混乱していたが、町内会が指揮をとり始め、さらに10～20名の学生を中心に自然と運営ボランティアグループができあがりテキパキ動いていた。次第に、避難所で知り合った学生たちが、ボランティアの合間をみて私の家へ息抜きに来るようになった。

1週間後、川内コミュニティーセンターは別の避難所と統合されることになった。水道は止まっていたが、電気は復旧していて、プロパンガスを使用している世帯はガスが使えたので、統合された避難所へは移動せず自宅に戻る人が多かった。川内にはスーパーマーケットなど買い物をする場所がないため、自宅に戻っても食料がなく困っている人たちが大勢いた。まだ、ガソリンが手に入らず車で買い物に行くことができなかったのだ。そこで学生たちは川内コミュニティーセンターを物資の流通拠点にし、約300世帯に水や食料の配給を行なった。川内は青葉山の麓にあり坂が多いので食料や水を背負い、リヤカーに乗せて運んだ。ローテーションで体制を組み、配給は3月末まで続いた。3月下旬頃から、学生たちは空いている時間に何かしようと、津波被災地のボランティアに私と一緒に出かけるようになった。

支援活動の実情を見て

震災後、仙台市のボランティアセンターができてから、すぐに個人でボランティア登録をして活動に参加した。当初の仕事は避難所での名簿作りや物資運びだったが、徐々に泥出しや瓦礫撤去が多くなった。私は震災以前から三陸の海の問題や中国残留孤児の問題についてNPOやNGOでの活動経験があったため、ボランティア活動を行なうのは自然だった。しかし、参加してみるとボランティアセンターのさまざまな問題点が見えてきた。マッチングに時間がかかり、段取りが悪い。被災者は安否確認やこれからの生活をどうするかと大変な状況だったので、家の片付けまで手が回らない人たちがたくさんいた。でも、ボランティアセンターは片付けの依頼を受け付けてからでないと動かない。困っている人のところへ自分からはなかなか出かけなかった。現場で瓦礫撤去などの活動をすると、依頼を受けた場所を片付けてもその先が延々と続いている途方もない状況だった。依頼のあった現場近くでおばあちゃんが片付けをしている。「手伝うよ」と声をかけたいが、やっ

てはいけないルールになっていた。非常に制約が多く、改善点を見つけても上に確認する必要がある時間がかかる。今、近くで起きている問題をどうにかしようと自分たちで動く姿勢が欠けているように感じた。

さらに、作業時間は短い。9時にボランティアセンターの受付が始まり、マッチングで1時間から1時間半かかる。そこから現場に移動すると、作業はどうしても11時くらいからのスタートだ。1時間の作業をしたら休憩を取り、14時半に作業を終えて15時までにはボランティアセンターに戻らなければならない。あまり活動している実感がなかった。いくつものボランティアセンターを見たが、どこも同じ状況だった。

一方でいろいろな民間のボランティアグループも現場に入っていたので、その活動も見えていた。ボランティアグループは強い想いで動いているところが多く、スピードや行動力はとても素晴らしい。だが、物がなければ物資をあげる、瓦礫があれば撤去する、仮設住宅があればイベントをするなど、その瞬間は必要だが、どうしても目先の支援にとらわれ、場当たり的な活動をしているように思えた。また、自分が何かしたいという想いが強いので自分の側から活動内容や被災者を見てしまう。たとえば、泥だらけの家があつて、瓦礫出しのボランティア依頼がある。しかし、震災前は瓦礫ではなく家財道具や思い出の品々だ。それを片付けて処分しなければならない当事者は、どうやってもマイナスからゼロには戻れない。どこかで気持ちをリセットし、無理やりゼロに戻してやり直さなければならない。ボランティアは、たしかに被災者から「ありがとう」と言われ、役に立つことができて良かったと思うけれど、それは復旧の一局面でしかない。そこに留まらずもっと被災者の側に立って、生活の立て直しという困難や心情に立って考え、そこでの支援の形をつくることはできないものかと考えた。



撮影：2012.6.23 仙台市若林区種次 畑の土起こし

私も避難をしたが、被災者の目線に立った時、これからの生活をどうやって立て直すかという点が一番の問題だ。生活を立て直すために目の前の瓦礫を撤去することは必要だが、それは第一歩であってそれで生活が立て直せるわけではない。市のボランティアセンターはトップダウンのお役所体質で上から目線に、ボランティアグループは自分の想い優先になりやすい。両者とも当事者目線が欠けていると感じた。

ReRoots（リルーツ）結成

仙台市は宮城野区と若林区の津波被害が非常に大きい。その特徴を見ると宮城野区北部は仙台新港があり工場地帯なので、大きな機械や化学製品も多く、一般ボランティアはなかなか入れない。宮城野区中部は、住宅地でサラリーマンが多い。そこで民家の瓦礫撤去や泥出しの依頼はたくさんあった。被災者は仮設住宅や民間アパートに避難したり、自宅を片付けて家に戻ったりして落ち着くと、元の職場に復帰し生活を立て直していく。ところが、宮城野区南部から若林区はずっと農地が続いていて、住民は農家が多い。たとえ瓦礫出しをして家をきれいにしても、職場である農地はまだ瓦礫の山で手が付けられていない状況だった。農地は農家の生活を支える重要な基盤なので、若林区の農地と農業に着目した。

2011年4月18日、避難所から一緒に活動してきた大学生たちとこれからの復旧、復興活動をしていくためにReRootsを結成した。団体のコンセプトや活動の原則は、若林区の特徴である農業と農家の目線に立って考えた。まずは、瓦礫撤去などの復旧支援が必要だ。また、家や機械、作業場、ビニールハウスが流されてしまった中で、営農再開するのは非常に難しい。復旧の次のステップは、農業を安定して継続できるようになるまでの復興支援が必要になる。さらに、農業は後継者不足などいろいろな問題を抱えているため、農業を活性化する地域おこしも必要だ。「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」という中長期的コンセプトを固めた。

一方、いろいろなボランティアセンターやボランティアグループを見て、当事者目線であることが絶対に重要だと感じた。ReRootsでは①相手の立場、目線に立って支援をすることを活動理念に掲げている。また、被災者はもともと自分で生活していたし、生活する力を持っている。津波の被害を受けて一時的にボランティアを必要とする状況になっているだけだ。ボランティアだからと何でもやってあげるのではなく、あくまでも②農家が再び自分で農業をできるような力を引き出し、社会的地位と尊厳を確立できる支援を目指してい



撮影：2012.7.16 ボランティアハウス前 ReRoots1周年

く。さらに③彼らが立ち上がって初めて、ボランティアと協働で歩んでいけると考えている。これらはReRootsの大事な活動原則だ。

地元密着型の支援を

ReRootsを発足させたものの、学生中心の団体なので資金も人脈もなかった。4月下旬に知人を通じて若林区笹屋敷の農家を紹介していただき、GW明けから、毎週末にボランティアをするようになった。その頃は、畑の表面にある大きな瓦礫を重機などで撤去した後、まだ埋まっている瓦礫を掘り出したり、ビニールハウスの中に入った泥や瓦礫を除去したりする作業をしていた。

まだまだ農地の復旧は進んでいなかったが、驚くことに5月末には若林区のボランティアセンターは撤退してしまった。私たちはボランティアの活動拠点ををつくるために農家の土地をお借りして、6月からボランティアハウスの準備を始めた。最初は更地で何もなかったのが、アウトドア用のキャンピングテントを設置しただけだった。プレハブ、トイレ、一輪車、スコップ、倉庫、自転車などあらゆるものが必要だったので、あちこちに呼びかけをして活動に必要な資材を集めた。その甲斐あって、2011年7月16日、ReRoots若林ボランティアハウスをオープンすることができた。

農地の瓦礫撤去依頼は農家から直接ボランティアハウスに連絡がきたり、現場で声をかけられたりして受ける。これまで累計320件ほどの案件に取り組んだ（2012年9月21日現在）。ボランティアハウスをオープンした頃は知名度もないので、チラシを配り広報したが、その後は口コミで広がった。ある集落で畑の瓦礫撤去作業を行なっていれば、隣の農家から「うちもやってけろ」と依頼されどんどん広がっていった。ReRootsの取り組みでは、地域とのつながりや地元密着をととても大事にしている。いくら自分たちの掲げている理念を説明しようと、それだけで認めてはくれない

し、むしろ仕事ぶりを見て評価され、そこに人柄を見られる。「口ばかりだ」と言われないよう、朝9時から現場に入り長い時では夜7時まで活動をした。農家の方に「なんだあお前らまだやってんのか。もう遅いから帰れ」と言われるまで瓦礫を取った。それでも「やりたくてやっているんです」と、自分たちが若林区の農業の復興を目指して取り組んでいることを話した。仕事ぶりは社会人だろうと学生だろうと関係ない。ボランティアだからと適当に済むわけではない。あくまでも基準は相手側にあり、農家から見て丁寧できちんとした作業だと評価されるかどうか的大事であって、自分たちがどれだけやっているかではないのだ。また、相手の気持ちをくみ取って作業をしないと信用してもらえない。このように評価されて初めて地元に受け入れていただき、根付くことができる。

さらに、震災以降、ボランティアハウスが建っている地区では子ども会や町内会などのすべてのイベントは中止になっていた。畑に行くと瓦礫撤去はするけれども、ボランティアハウス周辺の方々に受け入れられなければ存在できないし、地域との顔の見える関係も大事にしたい。その思いから映画上映会、芋煮会、ジャンボカステラ作りなど小さなイベントも開催している。何のイベントもなくなってしまった子どもたちにとって夏の映画会は大きな楽しみだ。学生スタッフみんなで話合っって子どもたちの喜ぶもの、学生ノリではない地域で受け入れられるものを考えた。子どもたちはボランティアハウスに遊びに来るようにもなった。

ReRoots ファームで 農家のすごさを学ぶ

ボランティアは瓦礫撤去作業が終わればいなくなってしまうと一般的には認識されている。ReRootsは復興から地域おこしまでの活動を掲げているので、瓦礫撤去の先に見える農業と地域の姿を考えていくためにも農家の生活を学ぶ必要がある。そこで、農家をお願いして畑を貸してもらい2011年10月からReRootsファームを始めた。農家と同じように畑を耕し作物を作る喜びや苦勞、体力的つらさなどを実感しなければ農家の気持ちは分からない。私たちは素人なので農家から育て方を教わり、地元の生活空間のなかで土をいじっている。すると、いつの間にか畑を見に来て、あとで「早く受粉しろ」とアドバイスをくれたり、漬物の漬け方や野菜のおいしい食べ方も教えてくれたりする。どの時期に何を植えればいいのかも農家の方が教えてくれるので、いろいろな種類の野菜を作ってみた。初めて植えた小松菜は鳥に食

べられてしまったし多くの失敗もするが、ReRootsファームで農家の心づかいや生産に対するプロ意識を感じることができる。

みんなで瓦礫を取ってきれいにし、畑を借りて農家に教えてもらいながら野菜を作り、収穫して食べることができるのはとても感動だ。あんな瓦礫の山だったところからも野菜ができる。私たちのような素人でも瓦礫を取って一生懸命やればそれなりに野菜を味わうことができる。津波被害を受けた民家は多くの物を失ってしまい、マイナスからゼロには戻れない。しかし畑はマイナスからゼロへ、ゼロから作物の収穫というプラスへと確実に進むことができる。ボランティアも自分たちが瓦礫を取った畑で野菜が作られるのは嬉しいので、継続的にリピートしてくださる方も多い。ReRootsファームは地元密着で農業を対象に活動していく私たちにとって欠かせないものだ。そこにいと、自然と向き合い、あれだけの被害を受け止め、それでも農業をやると覚悟を決めて、黙々と野菜を作っていく農家の姿はカッコいいし、彼らのプロ意識や野菜にかかる労力は素晴らしい。近くで見ている学生たちも農家をカッコいいと思うだけでなく、すごみを感じている人は多い。

しかし、昨年の行政のアンケート調査によると、個人営農で再開する農家は2割、集団化で再開したい農家は6割、残り2割は離農するという意向結果が出た。実際には現段階で集団化はまだ進んでいないので、もっと割合は低いだろう。離農した土地は耕作放棄地になりやすい問題がある。そこで、土地の活用方法としてReRootsファームのほかに、市民農園の取り組みがある。1つは、荒浜の農家の方々と協力して開設した被災者向けの荒浜狐塚農園だ。仮設住宅などに避難しているとどうしても閉じこもりがちになってしまう。もともと土いじりをして生活していた人たちにとって、コンクリートばかりで野菜も作れないのではやりがいも持てない。そこで、畑に来て野菜を作れば天気や雑草が気になり、気持ちも外に向きや



撮影：2012.11.10 仙台市青葉区仙台北 みるまあと オープン

すく閉じこもりがちにはならない。もう1つは三本塚の農家と協力して作った一般向けの市民農園だ。現在、この地域に来る人はボランティアか瓦礫撤去の業者、家や畑の片付けに来る住人に限られている。それ以外にも人が出入りできる仕組みを作る必要があると考えて位置づけた。瓦礫撤去はできないけれど、家庭菜園ならできるという人に来てほしいと思っている。人が入ってくればコミュニティ再生のきっかけになるし、土地の保全にもなる。今はまだ土質があまり良くないので、改良するために試行錯誤している。畑の土質を回復することも復旧の1つ。このやり方も農家から教わっている。

地域の課題と「ひまわりプロジェクト」

津波被災を受けた若林区東部地域が復興していくために抱える課題は①農業の再生、②コミュニティの再生、③景観の再生、そして④防災だ。防災については行政が担う分野が多いので農業、コミュニティ、景観の3つの側面を調査・研究してみた。

まず農業の再生について、行政は圃場を大規模化し、その後集団化さらには法人化、6次産業化して、競争力の高い農業を作っていく方針だ。おそらくいくつかの農家はその流れに乗っていくだろうが、成功するケースと難しいケースが出ると思う。日本の農家の平均年齢は65歳で、生産のプロだがマネジメントや営業販売は得意ではない。能力のある農家はやっていけると思うが、できない場合は借金を抱え込み農業をやめざるを得ない。一方、法人化することでそれ以外の兼業農家や高齢化した農家などの土地が集約されると、農業をする人そのものが減ってしまい、農業以外に仕事を見つけるようになる。すると土地から離れる人が増え、地域で取り組んでいた草刈りや掘はらいなどが行なわれなくなり、農業を維持していた集落の機能が失われていく。たとえいくつかの農業法人の経営は成り立っても、地域全体としての農業が衰退し、農村が成り立たなくなってしまう。営農形態の在り方は、農業経営だけでなく農業を土台に成り立っている若林区東部の未来にとってとても重要なテーマだ。

次にコミュニティの再生は、移転または元の場所で再建かなど、生活の礎となる家の問題について解決がないと先に進めない。沿岸部は危険区域に指定されているので、住民は移転を求められている。農業とコミュニティは密接であり、移転すれば通い農になり、そのような新しい農業方式になったとき集落として取り組んでいた農業の形を維持できるのかまだ見通せていない。また、通い



撮影：2012.8.15 仙台市若林区種次 ひまわりプロジェクト

農になることで農業を続けるかどうか問題となる。どこに移転するのか、元に戻るにしても若い人は来るのかなど、コミュニティを維持し、再建するには家を確保するだけでなく人と人の繋がりや公共施設の整備など生活空間を考えていくことが必要だ。そうした農業、人、生活、地域というトータルなコミュニティデザインを住民合意の中で形成していくことが求められている。

景観の再生はもともと生活していた住民の心象風景であり、農業に適した農村景観であり、豊かな若林区東部地域そのものだ。防風林、垣根、いぐね、花などが津波で流され、一面茶色でとても寂しい風景になってしまった。稲は潮風に弱いので防風林は大きな役割を担っており、いぐねもこの地域の屋敷林として文化的・歴史的にも価値がある。農村風景を取り戻すことは、農業に適した土地を取り戻すために重要な取り組みである。

そこでReRootsとして地域の景観形成のひとつとして「ひまわりプロジェクト」を行なった。仙台市は沿岸部を公園化する方針はあるがまだ具体化しておらず、海岸の防風林再生はとても時間がかかる。ひまわりは単年度で回転させられるし、見ると元気の出る花だ。ちょうど、ひまわりプロジェクトを計画していた時、福島県の「NPO法人シャロームの会」とつながることができた。シャロームの会は障がい者の自立事業の一環でひまわりの種から油を搾油して商品化する事業に取り組んでいた。残念なことに福島第一原発事故によりひまわりを植えることができないため、代わりにひまわりを育てて採取した種を送ってもらうという別の形の「ひまわりプロジェクト」に取り組んでいたのだ。こちらは景観目的でひまわりを植えたいし、シャロームの会はひまわりを育ててくれる里親を探していたので、お互いに協力することとなった。趣旨に賛同してくださった農家から畑をお借りして荒浜地区と二本地区に合計約2万本のひまわりを植えた。そして、夏、見事にひまわりの花は咲いた。住民からは「ぜひ、来年もやってほしい」との言葉を頂いた。

相手の立場に立つ視点

2012年3月～9月の間、毎月約1,500～2,000人のボランティアが参加し、ボランティアハウスオープン以来、累計約1万6千人の方々が来てくださった（2012年9月21日現在）。週末はバスツアー、企業の研修ツアー、市民グループ、学生サークルなど日本全国から訪れる。また、小学生も受け入れているので、親子連れの参加者も多い。ボランティア保険天災型にさえ加入していれば、いつでも参加できる。ボランティアに来る人たちには「少しでも地元の復興の力になれば」という謙虚な気持ちや姿勢で来ていただけるとありがたい。半日でも1日でも、その活動の積み重ねが復興へと進んでいくので、多くのボランティアにたすきをつないでほしい。

ボランティアの他に、ReRootsの仕組みや運営を学びたいと来る方も多い。ボランティア参加者でなくスタッフとして携わるのであれば、ボランティア理論やチーム理論などの学習、そして研究や改善など日々検証が求められる。そうした内容は他の団体でも参考になると思う。たとえば、ボランティアに参加する最初の興味や動機は人それぞれなので、その寄せ集めではチームはうまく動かない。そこで、ボランティア理論が必要とされる。ボランティアするには必ず対象が存在する。対象となる相手のことを理解しなければボランティアはできないし、相手の立場に立とうと努力することで謙虚に現実を学ぶことができる。自分の興味・関心を土台に、ボランティアする対象への理解が深まる過程で関心の払い方も変わり、視野が広がる。それは能力の大小ではなく人の資質に関わるものだと思う。相手の話を聞く力、それを整理し組み立てる力、まじめさや謙虚さ、我慢強さなど人柄が問われる。だから、自分の課題や欠点など見たくないところも見なくてはならない。そうして課題を前進させようとしたとき自分自身もまた成長していくことができる。ただし、自分が成長することが基準ではなく、あくまでもボランティアする対象が変化することが基準であって、その変化を追いかけていたらいつの間にか自分も成長していたという感覚に近い。こうして対象の変化を軸に据えることで、チームとしての判断基準ははっきりし、個々人の課題も明確になり、モチベーションの差や能力の大小ではなく、いかにして問題に近づけるか、対象の変化を促す媒介になれるかを研究していく。

ReRootsの活動を担っている学生たちの力はすごいと思う。最初は軽い感覚だが、理論をきちんと共有して各部局を担当し、農家の中に入り、ボランティアをしていく中で、だんだんと意識が変わっていく。たとえばバスツアーなどで来る40

人のボランティア参加者をコーディネートするので、責任感も強くなる。また農家の復興への思いを感じれば半端な気持ちは真剣さに変わる。最初は10人ほどだったReRootsメンバーも、現在は37人だ（2012年9月21日現在）。

地域が存続できる農業を目指したい

若林区東部地域の魅力は農業、食、自然、防災、星空だ。この要素を活かして人の出入りする仕組みを作りたい。これまで約1万6千人のボランティアが来ているので、これからは一度ボランティアで来た人が再び訪れ収穫祭などのイベントに参加するのもいいし、大学生の農業インターンや新規就農者を増やすファームステイの仕組みもあればいいと思っている。また、これから地域の復興している様子を外に発信したいので、野菜の販売をしていきたい。収益を目指す店舗ではなく、地域に還元する店舗づくりをしたい（2012年11月10日、仙台朝市に若林区復興支援ショップ「りるまあと」をオープン。毎週土曜日営業）。また、買った消費者がこの地域に訪れるような企画もしたいと考えている。

しかし、まだまだ途上だと感じている。畑に行けば瓦礫は片付いていないし、田んぼの除塩作業も来年まで続く。それが終われば大規模農場化の区画整理が始まり、それは3～5年はかかるだろう。本格営農再開はそれからだ。移転も実際に住むことができるのはまだ時間がかかる。それが済んだから、地域の再生、地域おこしの段階に進んでいく。これからやらなければならないことはたくさんある。ReRoots内部においても情報収集や体制整備、当事者との関係作りを丁寧に進めたい。行政のやり方でやればうまくいかないところもあると感じているが、ただ反対するだけではなく、どのようにして地元の人たちを媒介しながらコミュニティや農業形態を作っていくか、どうやって話し合いの場を作っていくか模索していきたい。まだ復興の形が見えないので、今後どのように地域を作っていくかの研究も必要だ。もちろんそれは地元の農家の方々と話し合いをして協働で進めていきたいと思っている。決めるのは住民だ。また、農業は生活の場であり、いつまでもボランティアは必要ではないと思うので、これからReRootsの農業部門を強化し、非営利の農業法人化も考えている。ただし、それは人材と技術、資金が必要なのでまだまだ構想段階だ。将来は新規就農者をどう増やすか、農村をどう保つか、農業が抱えている問題まで踏み込んで、地味で豊かな農村コミュニティとして存続し続ける農業の姿を目指したい。

NPO

地域の人気が兼ねなく集まれる、 そして楽しめる場づくりを

3.11あの時
P33 Report. 15 の続きです

刈田郡

海藤 節生 NPO 法人 水守の郷・セケ宿

取材日 2012.10.04

水源地セケ宿の役割と魅力を伝え、地域の自然と人を守り育てる事業を行なうことにより、水という関わりの中でつながった地域の持続可能な未来づくりに寄与することを目的に活動している。震災後は北上町相川地区を継続的に支援。復興支援ライブも各地で精力的に行っている。2012年農林水産省主催の「オーライ！ニッポン ライフスタイル賞」を受賞。

石窯ピザが地域をつなぐ

遠方よりたくさんの方が来て片づけてくれたおかげで町はすっかりきれいになった。役所から機械が入り地域の人を雇用しながら瓦礫の撤去をやるようになってやがて何も無くなっていく。漁業者たちの船が新しくなり、わかめの種付けをし、そこにボランティアが来て、収穫の時期はちょうど3.11から1年が経ち、それなりにわかめも収穫できるようになっていた。復興祭があちこちで行なわれていた。漁業者たちだけは何となく明日が見える状況になっていた。

瓦礫の撤去が完了した後、トラクターを入れ、石を拾って畑作りをした。そこに仮設に住む人達が野菜を植え、震災の年の8月には収穫して食べた。瓦礫を拾っているとき会話の中で、「あんた仕事は何やってんの？」と聞かれ「ピザ屋です。」と答えると「ピザなんて食べたことねえな。」と言われた。田舎の人には珍しい食べ物だろう。「今度食わせっから」と、ピザ窯を作ることを約束した。

ピザ窯を作るためには資金が必要だ。いろいろなところに助成金を申し込んだが、営業的なものであるとか緊急性が無いという理由で断られた。確かにそうとられても仕方がない。会話するボランティアであったり、読み聞かせをするボランティアであったり、パソコン指導のボランティアなどはいっぱい来ていた。そうしたことも必要だが、今までそこに無かったものができて、食べたことが無いものを食べようと人が集まることで良いコミュニティが生まれると僕は自分の想いを信じ、これは何とか自分で稼ぐしかないという決断に至った。東京にも仲間ができていたので、東京でチャリティーコンサートを開いてその収益金で作るという計画を立てた。ところが見事に大赤字。ピザ窯を作るという想いを聞いた東京の仲間がリベンジしてチャリティーコンサートを企画すると言ってくれた。ピザ窯は30万の費用が必要だ。それなら「30万売り上げを上げるから」と企画してくれた。その結果20万程であったが収益が出た。石窯だと材料の石代はどうしてもかかる。



ご縁があり宇都宮の石屋さんにつながって、大谷石を半値で譲ってもらった。運送もたまたま別の時に被災地で知り合った栃木の社長さんが、無償で運んでくれた。

2012年3月4日は北上町相川地区の復興祭だった。いろいろな人が集まる。ここが狙い目だと思い、力を貸してもらい石窯の型枠を作り、翌日生コンを打って石窯の基礎を作った。その後すぐ、東京の仲間がボランティア10数名を連れて来てくれた。3日間で大体の形ができあがった。

3月下旬には初めて窯に火が入れられた。何も無いところに何かができて煙があがっている。地域の人たちも興味津々で集まってきた。あっという間に用意した30枚のピザが無くなってしまった。余談だけれど、わかめをトッピングしてみたが磯臭くて食べられなかった。

ハーブプロジェクト

ピザ釜を設置する場所は地元のおじいさんに借りている。そのおじいさんが土を入れ畑を作りたいと言っていたので、畑を作ってあげた。ピザ窯があるので、結局この畑はハーブ園にすることになった。そこからハーブプロジェクトが始まった。東京のライブ費用を工面してくれた仲間が、今度は東京でハーブキットを販売する活動を始めた。種と土を袋に入れて500円で販売する。購入していただいた人に里親になってもらい、ある程度の苗になったら、北上町の畑まで運んで植えて、収穫したものはまた里親の元へ届ける仕組みだ。いろいろなところに声をかけてくれて広まっていった。別の仲間は収穫できたハーブを乾燥させてハーブティーを作ったり、バジリコを作ったりして、いろいろな形でつながっていった。

ちょうどその頃、首都圏の女性リーダーと被災地の女性リーダーが集まる「結結プロジェクト」に参加し、ログハウス作り経験者と知り合った。石窯に家を建てようと、6月ぐらいから石窯をログハウスで囲んでいく作業が始まった。

ハーブプロジェクトは広がりを見せハーブを植える場所がなくなってしまった。ふと自分の地元を振り返れば、ピザ屋を構えている七ヶ宿も過疎地であり活性化しなければいけない。東京と被災地と水源地である七ヶ宿の山がつながるハーブトライアングルプロジェクトを立ち上げた。ダムの手管理所に花壇を作りハーブを植えた。ハーブは大豊作となり、9月16日に七ヶ宿で収穫祭を行なった。ジェノベーゼとバジル入りソーセージを作りみんなでおいしくいただいた。

水守の郷音楽祭2012

震災は自分にとっていろいろなことを考える良い機会となった。そして、音楽活動を再開する機会ともなった。付き合いのあるミュージシャンたちも震災復興のためいろいろなところで活動している。初代ハウンドドッグのメンバーで「嵐の金曜日」の作者の八島順一さんは、運転免許がないのでバスに乗って山形経由で石巻の方へ来てくれたという。そんな話を耳にして八島さんに「一緒にコンサートやるか？」と声をかけ、2012年10月27日（土）七ヶ宿ダム自然休養公園野外音楽堂で「水守の郷音楽祭2012」を行なうことになった。

これからの活動

相川の人たちは、石窯ができるとは考えもしなかっただろう。私が行くと何かが始まる。「今度は何やってたんだ？」と言いながら、手が空いていると寄ってきては手伝ってくれる。緊急な状態から脱した現在、現地に来るNPOやボランティアが次のステップに向けた活動を探している。そうした人たちの協力も得て、9月にピザ窯の前にウッドデッキを作った。ここでハーブ園を眺めながらお茶っこしたり、お祭りのステージになったりして元気の出る場になってほしいと思う。

この先、仮設住宅から高台への移転が始まる。さまざまな課題が出てくるだろう。寄り添ってきた皆さんの内面に触れながら、地域の人が気兼ねなく集まれる、そして楽しめる場づくりをこれからもしていきたいと思っている。



撮影：2012.4.3 石窯ピザ



撮影：2012.6.15 石窯をログハウスで囲んでいく作業

大学

志の連鎖。未来への希望を絶やさない。

仙台市

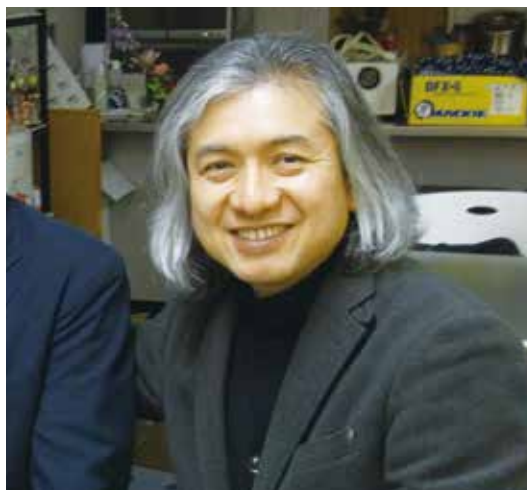
風見 正三 宮城大学

取材日 2012.10.25

2008年4月から、宮城大学事業構想学部教授に就任。全国の都市再生、地域再生、環境共生のプロジェクトや都市政策、環境政策、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスに関する調査研究に携わっている。震災後、宮城県東松島市でC.W.ニコル氏とともに「復興の森づくりと学校プロジェクト」をスタートさせた。

3月11日 14時46分

大震災の当日は、東京でイベントに参加していたが、長く大きな揺れに会場が騒然となる中、上方の落下物を点検しながら、揺れが止まるのを待った。その時は、あまりの揺れの大きさと長さに関東大震災が起きたと思った。揺れが止まるのを必死に祈りながら、まずは、身の安全を守る方法を必死で考えていた。人間はとっさに自分の身を守るために実にいろいろなことを考えるものだと思った。現代の日常では、リスク管理はほとんどされていない。こうした場面に直面した時に人間の生存本能が試されると感じた。イベント会場はたくさん子どもたちが留まっていたが、彼らはいざという時にとてもしっかりしていて、大人よりもずっと冷静だったことを覚えている。そんな時でも、連帯感を持ち、お互いをかばい合っていた。3.11は、その翌日が国公立大学の後期入試で、私の脳裏に浮かんだのは、とにかく今日中に仙台に帰らなければならないということであった。揺れが収まってきて、まずは、タクシーを呼んでもらうために事務室に向かい、そこで見た光景を私は今でも忘れることができない。事務室に入ると、東北が震源地であることを知らされ、テレビでは東北の沿岸部を襲う大津波の信じがたい光景が映し出され、ただただ言葉を失い立ち尽くすしかなかった。まるで、パニック映画を見ているようなリアリティのない感情を今でも覚えている。目の前に、リアルな津波の映像が何度も流され、その光景を見ても信じられない気持ちと現実でないように祈る気持ちが交錯していた。時間が経つにつれ、「東北の地震だったんだ…」という現実と向かい合い、知人や学生が今どこにいるのか、宮城を離れていることで余計に不安は募った。翌日は国公立大学前期入試で、何としても宮城に帰らなくてはならない。ひとまず東京の自宅に帰る判断をしてタクシーを捕まえ、幸運にも東京の自宅まではたどりつけた。東京の自宅に着いてからも停電が続き、情報も得られず、新幹線は動くのだろうか、高速道路は大丈夫なのだろうかと考えを巡



らせ宮城に帰る方法を考え続けたが、インターネットもつながらず、大学のメールも使えず連絡が取れない状態でどうすることもできなかった。首都圏にいても停電が続いている地区では情報が手に入らず、情報的に孤立していた。当日、明け方まで連絡もとれず、宮城にも帰ることはできず、学生の安否もわからず、不安な夜を過ごした。徐々に交通機関がマヒしている現状や被害の甚大さも分かり、しばらくは東京に留まり、学生の安否確認や物資調達の支援をしようという決心をした。日が経つにつれ、徐々に携帯電話のメールやSNSを利用して学生の安否も確認できるようになってきた。

アースデイ東京からの
大震災についての緊急声明

東京にいる自分ができることはと考えて動いたことが被災地への支援の呼びかけと緊急記者会見だった。そして、アースデイのメンバーからのお声掛けで、3月14日、渋谷のUSTREAM STUDIOで行われたアースデイ東京からの大震災についての緊急記者発表に、アースデイ仙台顧問として出席した。アースデイ東京は、市民による日本最大級の環境イベントで、この記者発表はもともと毎年恒例の開催発表を予定していたが、

急遽アースデイ東京からの大震災についての緊急声明に内容が変更となった。

緊急記者発表に出席するため渋谷へ行く途中、福島原発が爆発したニュースが伝えられ、東京から帰途につく大勢の人々を見ながら、逆方向のガラガラの地下鉄に乗っていた。渋谷は、ゴースタウンのような有様で、パニック映画さながらの様相を呈していた。

記者会見では、アースデイ東京として被災地への支援活動を行ない、現地復興支援のために義援金を募集すること、福島原発での原発震災について世界へのアピールを行なった。また、会場で仙台の学生と中継し、被災の状況を伝え、アースデイ東京の実行委員長C.W.ニコル氏とともに東北・日本を救おうと声明を出した。

それから2〜3週間は、ガソリンがなく動けない状況が続き、まず、自分が東京でできること実行しようと思い、安否確認と物資調達を行なった。仙台の学生や仲間と電話で連絡をとりながら、被災地で必要なものを確認し、さまざまな支援団体につないだり、新潟経由で東京と東北を行き来して物資を仙台に送った。

「心に木を植える」プロジェクト

この3.14の緊急記者会見が契機となり、C.W.ニコル氏との復興支援の活動が始まった。C.W.ニコル氏は、長野県の黒姫の荒れた幽霊森を素晴らしい森として再生しており、心に傷を持った子どもたちを森に招くプロジェクトを続けていた。今回、C.W.ニコル氏から東北再生のために、震災で悲しい体験を持った子どもたちをこのアフンの森に招く「“心の森”プロジェクト」を進めることを提案頂いた。このプロジェクトは一般財団法人C.W.ニコル・アフンの森財団とOne by One こども基金が児童養護施設の子どもたちを対象に行なっている宿泊型森林セラピープログラムで、豊かな森で散策や自然観察、川遊びなど全身で遊ぶことを通して、心を解放し、自然や他者を理解し、尊重する心を育むことを目的としている。私は、交流の深かった仙台市、南三陸町、大崎市、東松島市に声をかけ、真っ先に動いたのが東松島市だった。市民協働推進の長い付き合いがここに結実したともいえる。震災復興は、まずは心の復興から。震災で傷ついた子どもたちに森で癒されてほしいと思い、被災された方々を長野県黒姫のアフンの森へ招待した。プログラムが終了して帰る頃には皆「震災があったからこそ、この森に出会えたんだ」と言って感動し、涙ながらに別れた。

“心の森”プロジェクトからつながった志の連鎖

2011年の8月と9月に「“心の森”プロジェクト」が実施された。そして、この活動が思わぬ大きなプロジェクトにつながるようになった。このプロジェクトがご縁となり東松島市との交流は深まり、ニコルさんも私も東松島に何度も足を運んだ。子どもたちの心には、アフンの森を見て、東松島でもこうした美しい森を再生しようという気持ちが芽生えてきた。また、このプロジェクトに参加した市民や行政の方々も協力して、東北で美しい森を再生していこうという機運が高まった。人間の力で自然を再生できる希望をアフンの森でつかんだのだ。

東松島市の教育委員会と私たちは、これからの学校教育の在り方を議論し、森の学校を目指してさまざまな検討を行なっていった。11月には教育復興委員会が設置され、津波で流されてしまった学校の統廃合やこれからの学校づくりをどうするかを検討する委員会が始まった。森の恵み、木登り、火おこしなどのサバイバルな知識を学ぶ学校、地域と共に子どもたちを育てる学校、それが、「森の学校」のビジョンである。現代は、そうした生きる力が衰え、自然とのかい離や社会への不安等から、いじめが起きてしまい、未来に希望を感じられない子どもが多くなっている。大震災でたくさんの命や財産を失ってしまったけれど、それを超えて、より良いものをつくる。未来を共につくっていく機会にする。現在の教育の良いところは残し、悪いところを正していこう。大震災を越えて、我々は決して同じものをつくってはいけない。子どもたちの学ぶ環境は安全な方がいいと思いがちであるが、これまで手取り足取りの仕組みが弱い人間をつくってきた要因にもなっている。「自然欠乏症候群（NDS）」という症状が世界で注目され始めている。自然とのかい離が精神の不安定を引き起こし、生きる力を失わせている。この大震災で、我々は多くの命と財産を失ったが、これまでの社会の問題点を解決し、今こそ、子どもたちに持続可能な未来を残すために、既存の壁を乗り越えて、大きなチャレンジをしなければならない。

復興の森づくりと森の学校プロジェクトがスタート

こうして地域の自然を活かした高台の森の中に、里山の集落のように木造の教室が点在する学校を目指して、2012年2月「復興の森づくりと森の学校プロジェクト」がスタートした。ニコルさんを中心にアフンの森で培ってきたコンセプトをベースに、森の中で自然を楽しめて、地域の中で

皆が支え合えるような仕組みを持つ公立の小中学校をつくるプロジェクトが始動している。子どもたちに未来への希望を持ってほしい。このプロジェクトはそのためにある。重要なことは、「未来を信じる力」。

私は、これまで長くまちづくりに関わってきて、持続可能なまちづくりの基礎となるのは「教育」であると感じてきていた。「教育」という言い方はもう古いかもしれない。「教育」は、文字通り「教える」部分が強い。これからは、「Education（教育）」ではなく「Leaning（自ら学ぶ）」であるべきだ。「森の学校」は教え込まれるのではなく、自ら能動的に動いて危険を学ぶ「Leaning（自ら学ぶ）」による体験的な叡智を積み上げる学びの過程だ。

今、このプロジェクトのために、東松島市にいろいろな人が集まってきている。教育委員会や復興政策部には熱意のある人が多くいて、森の学校のコンセプトに惚れ込み、仕事を越えて推進してくれている。被災地の子どもたちのために何かしたいというニコルさんの思いが東松島の子どもたちや大人たちを変えていつている。プロジェクトが成功する時は、「天の時、地の利、人の和」がそろろうと言われるが、「森の学校プロジェクト」は、まさにそれがそろってきていると感じている。「心の森」プロジェクトを通じて、ニコルさんとも深く知り合うことができた。私は、2008年4月に宮城大学教授に就任し、持続可能な地域づくりの研究と実践を進めてきたが、3.11によって、たくさんの友も失い、自分自身も一日違えばこの世にいなかったかもしれない。大震災で命が繋がれたということは私の運命と感じている。あの日失われた命を想わない日はない。そして、大震災の直後、アースデイの緊急記者会見でニコルさんと会い、共に東北復興を進める約束をし、東松島市を結びつけられたことを本当に嬉しく思う。ニコルさんは自然を愛し、勇敢で真っ直ぐな人だ。この心から信じられる同志とともに、被災地の子どもたちに希望を生み出すプロジェクトを進められることは人生の大きな目標に近づいた気さえしてくる。ニコルさんも自らの運命だと感じると話してくれた。私は涙が出るほど感動した。このプロジェクトには、まだまだ多くの難関が待ち構えているだろうが、子どもたちの未来のために、みんなで力を合わせて乗り切っていきたい。

今後の課題

2012年7月、C.W.ニコル・アフアの森財団と東松島市の間で「震災復興に向けた連携及び協力に向けた協定書」が締結され、森の学校を進める協力関係も動き出した。2012年7月には、子ど



撮影：2012.9.15 アフアの森 ワークショップ

もたちと行政担当者をアフアの森に招いてワークショップを行なった。アフアの森を体感しながら、みんなにどのような学校を作りたいかを考えてもらった。子どもたちからは「森のきのこを使って給食を作ろう」「作った給食は外で食べよう」と素敵なアイデアが次々に飛び出てくる。子どもたちは既に十分自然の森を楽しむ方法を分かっていた。そして、自然を愛するピュアな心を持っている。この美しい心を大切にしたいと思った。2012年10月には、東松島市の小中学生、その家族、プロジェクトに関わる企業や団体の方々とプロジェクトの計画地に入って森づくりを行なった。そして、2013年2月には、宮城大学風見研究室が、森の学校の基本計画を東松島市から正式に委託を受けて検討が始まっている。基本計画では、東松島の自然環境を踏まえて、どのような森の学校にすべきか、自然の森を活かした教育プログラムをどのようにつくっていくか、検討を進めている。この計画は、子どもたちや先生が未来に希望を持てる計画にならなくてはならない。今後、この計画を地域とともに共有し、意見交換を通してまとめていくことになる。この森の学校は、地域の学校、未来に続く学校だから、地域の人々と共にづくり、地域に愛される学校でなければならない。

今後は、そうした活動をどんどん行ない、森の学校プロジェクトに関わったみんなが、震災後、世界にひとつしかない新しい学校を自分たちが作ったといえる誇らしい体験を積んでいってもらいたい。スタートは今からだという想いを共有したい。森を切り開いた時から学校づくりは始まっている。スペインの教会サグラダ・ファミリアのように、地域みんなが手づくりで進めていけるプロジェクトを目指したい。これまでのような学校を作るのではなく、未来への希望を持てる学校、美しい社会を共につくるための拠点となる学校を作

りたい。それによって、たくさんの志のある企業がこれからも協力してくれるだろう。

未来への希望を絶やさない

私は、持続可能なまちづくりを専門としてきたが、これまで警鐘を鳴らしてきたことが大震災で全て現実化してしまったことがとても悲しい。多くの命が失われたことはとても悲惨であり、そこから立ち上がるのは至難の業である。震災直後は喪失感が大きく動き出すことができない時期もあった。でも、何かやらなければと感じ、子どもたちの希望を作ろうと考えた。子どもたちが森で喜んでいる姿を見ていると、「本当に良かった、もっとやらねば」と思った。人間は自然と切り離されて生きることはいない。文明があまりにも高度化し、その便利さに慣れてしまい、自然への畏敬の念を我々は失っていた。しかし、大震災は、人と人、人と自然の関係を隔てていたものを取り戻したともいえる。電気がなかったらどう暮らしたらよいか、人はお互いに助け合えば生きられると分かった。機械がなくなり、手仕事が増えて、仕事を分け合うことができた。大震災は、これまでの社会の仕組みを考え直す機会にしなければいけないし、これまでと同じような仕組みを作るのではなく、誇りを持って未来へ継承できる仕組みを作りたい。これからは、「循環と共生の思想」に基づく自律分散型の社会を目指していかなければならない。大きい電気だけに頼らず、1人ひとりがバイオマスや太陽光などの自然エネルギーを分散して持つことによって緊急時のリスク軽減につな

がるし、食料の地産地消も地域でできる。誰もが弱者の立場を考え、また自分がそうした立場になり得ることを前提にまちづくりをすれば、誰に対しても住みよいまちができる。我々は、この大震災を、本当に実現すべき社会像をみんなでしっかりと考え、持続可能な地域社会を実現する転換点にしなければならない。

今、日本がこれからどうするのか、世界中が注目している。未来の人たちに誇りを持って手渡せる地域や社会とはどのようなものかを真剣に考える必要がある。私自身の中で震災は全く色褪せていないし、震災の学びを活かして、今、何をすることが重要だと思っている。持続可能な社会、子どもたちの未来をどうつくっていくか、そのために、我々は何をするべきか。また、生きることの意味は何なのか、自分たちはどう生きていくべきなのか。震災によって問われたのだと思う。これまで通りの生活に戻ってしまう人たちに「このままで本当にいいの？」と問いかけ、揺り動かしていきたい。子どもたちがピュアな時期に未来をどう作るかという意識を持ったら、世の中はものすごいスピードで変わっていくだろう。既成のものを変えていくのは大変だし、ジレンマもある。しかし、震災から約2年が経過しようとしている現在、持続可能な地域や社会をつくらうとしている人たちが結びつき、少しずつ希望が見えてきていると感じる。その希望を絶やさないように、それらを可視化していくことが私の今のテーマである。東北が成し遂げていこうとすることを全国、世界に向けて、はっきりと語っていきたい。

大学

子どもたちと、ともに学びあうことがESDをはじめの第一歩。

仙台市

小金澤 孝昭 宮城教育大学

取材日 2012.11.20

人文地理学、地域経済論、持続発展教育学が専門。自然に立脚した生業によって成り立つ農林漁村と、消費中心の都市とのつながりの重要性を説く。食農教育の第一人者。FEEL 社の都市環境教育・学習推進会議委員長、仙台いぐね研究会代表世話人、仙台広域圏ESD・RCE運営委員会委員長など、地域社会と連携した活動にも精力的に取り組む。

3月11日 14時46分

あの日は10時30分から12時まで、栗原市役所での環境審議会の会議があった。ガソリンが少なくなっていたので、東北自動車道のサービスエリアでガソリンを満タンにして大学に戻った。宮城

教育大学には教員研修の留学生4人が研修に来ていて、彼らが1年の研修期間を終えて証書を受け取る卒業式が14時からあった。私の研究室にもミャンマーから1人研修に来ていた。14時20分で卒業式が終了し、研究室に戻った矢先に大きな揺れを感じた。

大きな書籍棚が倒れ、書籍が足の踏み場のないくらいに散乱する状況だった。研究室の出入り口を開けグラウンドへ急いで逃げた。多くの大学関係者、学生が避難していた。遠方から通う職員や学生は帰宅困難であったため、大学の学生会館を宿泊施設として開放することにした。私は幸い自家用車にガソリンも入れたばかりだったので、自宅に戻ることにした。途中、カーラジオで聞いたニュースで大津波の被害が起きていることを知った。自宅に戻ると断水や停電が起きていたため、ハリーケーンランプやガスコンロ、石油ストーブなどを出してきた。水は町内会で配給されたものを使い、備蓄していた食料で数日間を過ごした。当時は母が体調を崩していた事もあり千葉の実家に避難することにした。帰るといっても、新幹線は復旧の目途がたらず、ガソリンも心配であったので移動手段は高速バス以外にはない。3月20日ようやく高速バスのチケットが手配でき、バス乗り場で3時間程並んで夜行便に乗ることができた。山形・新潟を経由し、ようやく実家にたどり着いた。

被災校や被災現場を支援

被災地のために何かしようと大学の中に「みやぎ・仙台未来づくりプロジェクト」が設置され、プロジェクトメンバーが2011年4月8日～15日まで被災校や各教育委員会を訪問し、支援物資を届け、ニーズの聞き取りを行なった。被災内容によって支援要請の内容はさまざまで、学校現場の支援、スーパーバイザー等による教職員のケア、児童の心のケア、発達障がい者対応の巡回相談など、継続した支援が必要になっていた。職員室が津波被害にあった学校も多かった。大学が教師用お道具箱（電卓・体温計・文房具一式）300セットを「文部科学省・子どもの学び支援ポータルサイト」へ要請したところ、その日のうちに「HFIくれよんプロジェクト」より支援申し出があった。

4月23日、大学の学生7名とOBI1名が、仙台市立郡山中学校での炊き出しボランティアに参加した。この炊き出し作業は、翌日の日曜日に、女川原発に避難している方たちに、豚汁とカレーライスをお届けするための準備だった。家庭科実習室に学生の他、校長先生、PTA関係者、中学生など約30名が集まり、大根、じゃがいも、人参、タマネギなど食材の下ごしらえを行なった。

4月25日～30日にかけては、気仙沼市立鹿折小学校で学校支援ボランティア活動を行なった。研究室からは延べ11人が参加し、学校に宿泊しながら校舎の清掃活動や全国から送られてきた支援物資の仕分け作業を行なった。職員室の金庫内に保管している機密書類の整理など、一般ボランティアに頼めない仕事もある。宮城教育大学の学



生たちはこれを手伝うことができたので、校長先生からは感謝の言葉をいただいた。

6月には、名取市の水田で、被害の実態調査と田んぼの瓦礫撤去作業を実施した。34名の教職員やボランティア学生らが参加した。水田の瓦礫撤去では、貴重な年金手帳、アルバム、お年玉が入った子ども用バックが見つかった。作業場所は津波が押し寄せた最終地点にあたり、瓦礫が大量に残されていて、海水を含んだ重い畳、プラスチックや木材などを撤去した。

仙台いぐねの学校

仙台いぐね研究会は、主に宮城教育大学の学生が中心となり、いぐね（屋敷林）を使った環境にやさしいライフスタイルの普及やこれらを体験する環境教育の実践に取り組んできた。宮城県名取市にある国指定有形文化財建造物「洞口家住宅」を舞台に、2001年より毎年7月末に『いぐねの学校』を開催している。

『いぐねの学校』では小学生に、かまどでご飯を炊くなど半日をかけて昔のライフスタイルを体験してもらっている。薪を使って苦労して炊飯を行なうことで、いかにボタン1つで火がつく現在の生活が便利なものか、また便利さを生むためにどれほど自然に負荷を与えているのかを実感することになる。この実感を通じ、現代のライフスタイルと比較することで、ライフスタイルを見直す力、疑問を持つ力を育むことを目的としている。実際に参加前と参加後のアンケートでは大きな変化が見られ、参加前では「自然を大切にすることは重要」という漠然とした解答がほとんどだったが、参加後には「時間や手間がかかっても環境への負荷を少なくすることが大切」と具体的な解答に変わっており、これは私たちの趣旨が伝わったのだと認識している。

『いぐねの学校』は広報からプログラム作成、運

営まで全てを大学生が行なっている。「体験できてよかった」等好評をいただいているが、苦労も数多くあった。どうすれば小学生にわかりやすく、飽きずに昔のライフスタイルを体験してもらえるか、プログラム作りでは何度も試行錯誤を繰り返し、いぐねの植物を学んでもらうためにクイズ形式のスタンプラリーを取り入れるなどさまざまな工夫を行なった。名取市の小学校にチラシを配布する時にも、チラシという限られた文面の中でいかに自分たちの活動、趣旨をわかりやすく伝えるかを考え、何度も推敲した。さまざまな苦労があったものの、苦労の根底にあったのは、私たち自身が『いぐね』を理解していないことだった。私たちも、かまどでの炊飯や草木に関する知識はほとんどなく、講師の方々等から教えていただき、私たちが勉強することから始めた。私たち自身が学習していくにつれて、『いぐね』を通じて環境に対して考えが深まり、小学生に伝えたいという熱意が生まれた。このことが小学生に私たちの趣旨が伝わった要因だと思う。一方で、体験はあるものの、事前学習・事後学習がなく、考えの深まりが浅いという問題点も抱えている。参加体験型のイベントのため、事前・事後学習に時間が取れない中でどのようにして事前学習を行ない、体験後のフォローを行なうかが今後の課題である。「環境教育」と聞くと、難しく・関わりにくいイメージを持つと思うが、環境にふれる場や自分のライフスタイルを見直すきっかけを与えることも重要な環境教育だと考えている。参加者である子どもたちだけでなく、運営に携わる私たち自身もともに学びあうことがESDをはじめる第一歩だ。

気仙沼市水産業の復興と産業連関を調査研究

気仙沼地域の水産業の被災状況と復興の見通し、さらに復興過程の課題を明らかにするための調査・研究に取り組んでいる。気仙沼の水産業の規模は、1970年代に8万t～10万tの水揚げだった。1980・1990年代には10万t～14万t規模の水準に増加している。しかし、2000年代になって9万t～12万tの水揚げ量で推移している。主要魚種は、サンマ、カツオ、マグロでこれらの魚は調味加工よりも冷凍加工する場合が多く、気仙沼水産業の特色として、水揚げされたものは生食や冷凍加工が中心であった。1970年代は缶詰などに限定されていたが、1980年代以降、調味加工や海藻類の加工が増加してきた。気仙沼の漁港に水揚げする原料を加工するより他の漁港から移入するものが多く、地元漁港との関連性がかい離していた。漁船乗組員の後継不足も大きな問題で、現在ではインドネシア漁船員を雇用して対応してい

る。また漁業技術者（漁労長・機関長）の高齢化も大きな課題となっている。

気仙沼の水産業のうち、魚市場や水産業関連施設、水産加工事業所の約8割は、鹿折地区と南気仙沼地域にあった。鹿折地域では火災が発生し、水産施設や住宅がほとんど消滅した。地盤沈下の被害も大きい。南気仙沼地域でもほとんどの施設が破壊され、地盤沈下も深刻だった。漁業の町として復興を目指した時、冷凍冷蔵庫施設の復旧が中心課題となる。ここが解決すれば、寄港する漁船が増え、市場の水揚げ量も増え、冷凍加工業が活性化する。現在、製氷業や魚の加工業も復旧されたので、冷凍冷蔵施設の復旧が第一の課題となっている。しかし施設の復旧には地盤のかさ上げや下水道施設の整備は道路計画、都市計画と合わせた問題解決が必要になっている。

震災を振り返って

何をすることが復興・復旧なのかをもう一度みんなで考え直さなければいけないと思う。気仙沼の復興・復旧を考えた時、これまでは起きたことに対する対処療法ばかりが行なわれてきた。震災前の状態に戻すんだ、という声も聞こえてくるが、震災前に抱えていた問題も同時に解決しなければ復興・復旧にはならない。高齢・過疎が深刻な地域で、以前の暮らしに戻しても意味がない。これまで、仙台平野に広く分布する人工的な里山である居久根（屋敷林）を活用して、環境教育や持続可能な開発のための教育の体験学習を行ってきた。東日本大震災の発生後は災害復興プロジェクトを立ち上げ、津波被害を受けた農地の復興、除塩植物（ひまわり）の栽培実験に取り組んできた。これらの活動はもちろん、今後も継続的にいぐねの学校を開催し、子どもたちに田んぼの復興学習を体験してもらいたいと思っている。



学生ボランティア

NGO

思いついたらアクション。 支援活動で生まれた多くのつながり。

秋田市

菊地 格夫 NGO RASICA

取材日 2012.06.20

NGO RASICA（ラシカ）は「思いついたらアクションしよう」という考え方を基本とし、「国際協力・理解」「環境」「地域貢献」「仲間作り」の4つを柱に秋田県を拠点として活動に取り組む。東日本大震災後は、宮城県石巻市を中心に泥出しや炊き出し、バトミントンスポーツ教室などの支援活動を行なった。

3月11日 14時46分

NGO RASICA（ラシカ）の活動の調査のため、ネパールに到着したばかりだった。入国手続きを済ませホテルへ行くと、普段は歓迎してくれる現地の団体の人たちやホテルに滞在していた日本人たちが、皆テレビにかじりついていて。人だかりの訳を聞くと、「日本が大変なことになっている」と言う。テレビをのぞき込むと、津波の映像が流れていた。津波の押し寄せる三陸沖や仙台空港の映像…ショックだった。愛する地元の東北が大変なことになっている。また、テレビの情報からかなり広域の被害を受けていることが分かった。震災が起きてから2日間は、ネパールのテレビも日本の津波の映像で持ち切りだった。ネパールは内陸国だが、近隣のインドネシアに甚大な被害をもたらしたスマトラ島沖地震（2004年）も記憶に新しいことから、ネパールの人たちは日本が津波に襲われている映像を目の当たりにし、とてつもないショックを受けている様子だった。多くのネパール人が日本を心配し、「大変だね」と声をかけてくれた。中には支援とは関係ない事でも「お金はないけれど、僕は献血に行こうと思う。僕にできることをやろうと思う。」と言ってくれた人もいて、胸が一杯になった。震災から3日経つと、福島原発の話題がニュース全体の半分以上を占めた。

震災後メールは使用できなかったもので、ツイッターを活用して日本にいる人たちから東北の情報を得た。家族の無事はすぐに確認が取れ、安堵した。秋田にいる人たちは「東北がどのような状況か分からない」というので、東京にいる知人から東北の様子や震災の概要を聞いた。

帰国したのは調査業務を終えてから、3/22のことだった。

被災地で見たボランティアの姿

NGO RASICAは「思いついたらアクションしよう」という考え方を基本としている。私が3/22



に帰国するまでに、団体メンバーの中では「被災地を助けよう」という機運が盛り上がり、ネパールにいる私に震災の状況を報告し、被災地へ持っていくための物資集めを開始していた。3月末から本格的に物資を集め始めたが、秋田でもガソリンが不足し、スーパーマーケットにまったく商品がない状態だった。関西方面から被災地へ支援に入るためにフェリーで秋田に来た人々は、なるべく積み荷を減らすために秋田で物資を揃えようとしたが、水も食料もなく困窮したと聞いた。そうした状況を目の当たりにして、秋田県は食料自給率が高いけれど、物流が止まると自分たちの周りにはまったく物がなくなってしまうのだと気づいた。今まで私たちの食べていた物が効率性・利便性を優先して管理されていた事実、に、たくさんの人が気づいたのではないかと感じている。北海道から被災地へ来た方によると、北海道は道内で物資が流通しており、今回の震災時にも品薄になることはなかったという。北海道経由で被災地入りした日本赤十字社の人たちとお会いした時、東北は関東経由の流通ルートだけではなく、北海道経由の流通ルートも必要なのではないかと話していた。

石巻で支援活動を始めたのは、4月13日からだ。団体メンバーに石巻日本赤十字病院の医院長と連絡を取っている人がいて、病院の先生方が食料も

なく不眠不休で働いているという現状を聞いた。作業しながらでも食べられるゼリー飲料や栄養ドリンクを支援した。支援を始めて約1ヶ月は自費で被災地を訪れたが、長期的に支援を行ないたいと考えて助成金を申請した。

初めて被災地を見た時は、発展途上国の治安の悪い地区に間違えて足を踏み入れてしまった感覚だった。何かあればすぐに暴動が起きてしまう錯覚さえ感じた。また、戦争を経験したことはないが、夕方、ボランティアの人たちが縦一列に並び憔悴した様子でとぼとぼ歩いている姿は、戦場の前線から帰ってきた若い兵士に見えた。被災現場を見てやるせなさを感じた彼らの表情は、戦争の悲惨な場所を見てきてしまった兵士たちに似ていたからだ。

支援活動で生まれた多くのつながり

石巻の病院への物資支援の後、泥かきのボランティア要請のある湊渡波地区に活動の場に移り、私は石巻市立湊小学校で寝泊まりするようになった。湊小学校では阪神淡路大震災がきっかけで発足した神戸の団体が慣れた様子で手際よく仕切っていた。通常、避難所では体育館にも人々を寝泊まりさせるが、ここでは教室のみに区切り、体育館は物資の仕分け作業用にスペースを確保していた。

NGO RASICAでは発展途上国で活動する際、一方的な支援にならないように現地のニーズからプロジェクトを起案する。被災地でも現地の人々の声を大切にしたいと考え、神戸の団体と協働で湊渡波地区のニーズ調査を行なった。調査の結果、遊びたい子どもたちや体を動かしたい人たちが多くいることが分かったので、湊小学校体育館のスペースを利用してバドミントンを教えることにした。その後、泥かきチームとバドミントンチームで、11月初旬までに計40日ほど訪問し、活動を行なった。

湊渡波地区を中心に石巻で支援活動を行なっている団体同士やボランティアとつながりが欲しいというニーズもあったので、ネットワークをつくるためのニーズ調査も行なった。そして、メーリングリストを作り、情報共有を図った。「〇〇地区で〇〇が足りない」「〇〇地区で物資が余っている」といった情報を共有することで物資の流れがスムーズになり、各団体の特徴を活かした活動ができるようになった。支援活動を行なう上で、団体同士が緊密に連絡を取り合い、連携したことはとても効果的であったと思う。

全国地球温暖化防止活動推進センターから、「低炭素杯2012(※)」の環境大臣賞受賞団体へ授与されるトロフィーの制作を、被災地の子どもたち

にお願いすることはできないかと打診を受けた。そこで支援活動の拠点だった石巻市立湊小学校を紹介した。大震災を経験した子どもたちが卒業制作として作り上げたトロフィーには、子どもたちそれぞれの思いが込められている。作品テーマの発表で児童から「天国の人に私の思いを届けたい」という言葉を聞いた時には、胸が熱くなった。被災地支援の活動がご縁で、多くの良い経験ができたと思う。

※「低炭素杯2012」は、次世代に向けた低炭素社会の構築のため、学校、家庭、NPO、企業などの多様な主体が、全国各地で展開している地球温暖化防止に関する地域活動を報告し、学び合い、連携の輪を広げる“場”を提供することを目的に、低炭素杯2012実行委員会が主催となって開催された。

現在抱えている課題

1つ目は、日本で他国の人が被災してしまった時に、どのような対応をするかという課題だ。新潟県の国際交流協会の方が言っていたが、新潟県中越地震が起こった時、人種がバラバラに避難してしまったそう。例えば、中国人は夜通し話すことで、ブラジル人は踊ることで、不安を解消する文化の違いがある。そうした異文化を理解し周囲へ伝えることや言葉を通訳する役割に、青年海外協力隊のOB、OGや国際交流協会のネットワークが活かせるのではないかと考えている。

2つ目は、いつまで支援をしていくか。災害時の支援の流れは自助、共助、公助が基本だという。通常、行政の支援である公助が行き届くまでには1か月以上かかり、近所の人助けに来たり、助け合ったりする共助までは3日から1週間かかるという。災害への対策として、自助の部分で最低でも3日は耐えしのげるような準備をしておかなければいけない。しかし、今回の震災は被害が広域すぎて、公助に入るまでが長かったのではないかと感じている。通常ならば公助が始まったら、私たちの団体のような活動は、別の段階にシフト



石巻市立湊小学校の子どもたちの卒業制作トロフィー

するべきだと考えているが、この見極めが難しい。私たちが被災地に支援に行くことは、ネパールに行くことと同じだと感じている。例えば、現地の人々のために日本の便利なものをたくさん持って行ったとしても、壊れたらまた持つて行くということを永遠に続けるのは、不可能である。そうした支援の形ではなく、私たちが行かなくても、現地の人たちの生活の中で回せるもの、地元の人々だけで何とかできるようになる支援の仕方やシステムが必要だと思う。地元の人たちが自立して地域を作っていくためには、他県の団体がいつまでも支援を続けることは得策ではない。これまで支援を行ってきた団体が活動の形をシフトするべきタイミングの見極めが難しく、それが大きな課題であると感じている。

青年海外協力隊としてコスタリカで活動した経験を活かし、被災地スタディーツアーを行ないたい。コスタリカはエコツーリズム発祥の地である。公園などの環境を整備し、観光客と地元の人々の利用料金に差をつけ、利益は地元の環境整備へ還元するエコツーリズムの仕組みが被災地でも活かせる

と考えている。すでにボランティア要請のない地域に無理にボランティアをしに訪れるのではなく、町を眺め、買い物をするだけでも良い。ツアー参加者は被災地を訪れることで、多くの学びがあり、地元の人たちとの交流も生まれていくだろう。

大震災を振り返って

自然を相手に私たちができることは何もないのだと感じた。私たちはいつの間にか便利なハイテクノロジーの世界に入ってしまった。「環境」をテーマに考えていく団体として、便利な世界の中でいかにエネルギーを使わずに生活するかを考えてきたが、震災などの緊急事態の時に本当に強いのは、昔の人たちの知恵や人と人のつながりなのだ気づいた。メーリングリストに入っていることやFacebookで友達になっていることが重要なのではない。支援活動を長く続けてこられたのは、誠意をもって活動したことで、被災地の人々と“心”でつながることができたからであると思う。

NPO

お互い様。 支援活動は地元の方々が動き出すきっかけに。

秋田市

船山 仁 NPO 法人秋田パドラーズ

取材日 2012.6.20

カヌー愛好家が集まり、自然と共生することの大切さ、先人の知恵、自然環境保護について多くの人々に伝えるため2003年、NPO 法人秋田パドラーズを設立。美容師という本業を持ちながら、東日本大震災直後より被災地に入り、美容師ボランティアや炊き出し、住民と協働で瓦礫撤去、側溝清掃などの復旧復興支援を行なった。

3月11日 14時46分

職場で仕事をしている時だった。長い揺れが続いた。部屋の中で物が倒れるような被害はなかったが、10～20分後に停電した。市内は停電で信号機が機能せず、渋滞が起きていたので、帰りに帰れない人たちがパニックになっていた。たまたま前日に、団体で使用するための発電機を用意していたので、テレビを見ることができた。津波の映像やアナウンサーの混乱した異常な様子から、戦争が起きているのではないかと感じた。電気は12日の夕方に復旧し、他のライフラインは通常通りだったが、ガソリンが給油できずバスも動いていない状態だった。スーパーマーケットの棚からは日持ちがする常備食が消え、何も並ばない状況が3日は続いた。今から考えると通常の生活に

戻ったのは、1ヶ月が過ぎてからのことだった。

被災地の混乱

パドラーズ会員、スタッフの親類や友人が被災し、各自が支援物資を持って被災地に入った。被災地に入ったスタッフからは、パドラーズとして支援活動をすべきではないかという意見が寄せられた。被災地では避難所の状況把握もできない状態で、県外からボランティアを受け入れるどころではないという。行政の支援だけではどうにもならない現状ならば、我々パドラーズにできる事があると考え、支援に乗り出すことになった。3月20日、現地へ支援に入る前に理事3人を被災地に送り込み、改めて情報収集を行なった。最初に調査したのは支援要請があるか・ないかだ。次に、泊

まるところが確保できるか、水を手に入れるか。こうした条件がそろっていた場所が気仙沼の南郷地区であった。

200世帯ほどが集まる南郷地区では、避難所に行かず自宅に留まっていた家庭が10世帯ほどあった。少し高台にある45号線付近は被災を逃れていたが、店舗があっても商品が何もない。避難所に来ない人たちは自立しているとみなされていたが、実際には物がなく日々の生活に困窮しており、我々はそこに支援の必要性を感じた。

現場はとにかく混乱していて、せっかく送られてきた食料が腐ってしまい、最初に来たボランティアの仕事は腐った食料を捨てることから始まったとも聞いている。全国から多くの物が送られてきたが、現地で処理ができず大きなミスマッチが起きていた。それは仙台も例外ではなく、若林区ではご飯を食べていない子どもたちがたくさんいた。我々が持って行ったおにぎりを美味しそうに食べていた姿を覚えている。かつてない規模の大震災の発生で行政も混乱の極みにあり、3日間ぐらひは自分の力で食いつなぐ必要性があると感じた。また、地域にいるリーダー次第で支援を受けるレベルに差が生じていた。私が行った時は60代から70代の方がとても頑張っていた。日本に物が無い時代を経験した世代は対応力がある。物が無ければ別のもので代用する機転や応用力があり、若い人たちにいろいろな事を教えている姿を目にした。

被災住宅を拠点に

南郷地区で、被災した住宅の2階を住居として提供してもらい、支援活動がスタートした。私が初めて被災地に入ったのは3月29日だったが、冷凍工場から流れてきた秋刀魚などが瓦礫に交じって散乱しており、鼻をつく臭いが印象的だった。最初に気仙沼市を流れる大川を見た時、ここでカヌーができればいいと思った。しかし南郷地区は津波被害が深刻で、川のクリーンアップの前に住宅地の瓦礫を片づける必要があった。

ボランティアセンターでも瓦礫撤去の支援をしていたが、完璧ではなく再度パドラーズに支援要請が来た。道路に瓦礫が散乱していたが、それ以上に家屋の中の瓦礫の量が多かった。どこの家に行ってもとんでもない量の瓦礫が屋内に入り込んでいた。この瓦礫を運び出すことが大変な作業で、やっとの思いで瓦礫を運び出した後にはこれまた凄い量の泥が姿を現した。瓦礫の中には持ち主の思い入れのある物がたくさんあり、第三者の手によって分別やクリーニングが行われた事は、作業をスムーズにしたと思う。

5月上旬からNPO法人北上川サポートセンター



と協働で、気仙沼市を流れる大川のクリーンアップをはじめた。市が業者に委託して重機で瓦礫撤去を行なう予定であったが、少しでも早く、少しの面積でもとの思いから活動をスタートさせた。作業に取りかかると、思った以上の瓦礫があり、中からは写真や年賀状、5円玉、数珠、印鑑、財布なども見つかり警察に届けた。重機で撤去されていたら見つからなかっただろう。クリーンアップを進めていくと、活動を見ていた地域の方々にも参加の輪が広がっていった。地域の公共的な部分にNPOが率先して関わったことが、「自分たちの地域は自分たちで復興させよう」と地域の人たちに思わせる結果へつながったと感じている。結果的には、テニスコートの3倍程の広さをきれいにした。川は心が癒される場所でもあり、多くの人々に影響を与えられたと感じている。

南郷泥アゲ大作戦

6月にみんなで酒を飲んだ時、「側溝が気になる」という話が耳に入った。自分の家の側溝をきれいにしても水が流れず、雨が降った時は水があふれるという。原因は別の側溝にいろいろな物が詰まっていることだ。一部だけ清掃しても意味がなく、広い範囲で大規模にきれいにする必要があった。そこで「南郷泥アゲ大作戦」を企画した。地域の方々が積極的に動き、行政やボランティアセンターに呼びかけて土嚢を1000袋、ボランティアを100人集めてくれた。秋田からの参加者を含めて総数300人ものが集まった。本部の指揮は南郷地区の方、側溝の泥あげは各団体ボランティア、フタの上げ下げをパドラーズといった具合に細かく8班に分かれた。優先順位を決め、処理したところは町内地図にバツ印を付けて確認した。ヘドロと悪臭と戦いながらの作業で、土嚢に入れたヘドロは回収班がトラックで回収していくが、水分を含んだ土嚢は重く大変な苦労であった。1000袋もの土嚢の山ができたが、この土嚢は地

盤沈下の見られる地域で再利用されたと聞いている。

この「南郷泥アゲ大作戦」では地域の方々が率先して動いてくれた。支援に頼るばかりではなく、地域のために自分達が動かなければという気持ちが生まれていたのだと思う。南郷地区にはもともと婦人部がなかったが、このことをきっかけに数人の女性が集まって婦人部ができた。ボランティアの人たちの食事作りやトイレの手配など、活動を支える体制もできて、地域が自治体として動き出す第一歩となった。

最初はパドラーズとして自分たちができる事をやろうと、瓦礫撤去などの復旧活動に取り組んでいたが、いつの間にか地域の方々と協働で作業を行なうようになり、最終的には南郷地区の方々が中心になって協働復旧作業を行なっていた。毎週被災地に入り地域の方々と顔を合わせる事で「お、今日も来たのか！上がってお茶っこ飲んで！今日市役所から来たパン食ってみれ。」と声をかけてもらえるようになった。こうした触れ合いはもちろん、自分の家や公共の場がボランティアの手によってみるみるきれいになっていく変化を目の当たりにして、地域のために奮闘するボランティアへの信頼に、ひいては地域の方々との協働の復旧作業へ繋がったと感じている。

課題は雇用と温度差

今の一番の課題は、被災地の雇用の問題だ。働く環境が整えば町は自然とできてくる。自分で稼ぐことが、復興への一番の近道だ。しかし、被災地には仕事がないために多くの若い人たちが地域を離れている。気仙沼で一緒に活動した若者も皆、仕事を求めて地域を離れてしまった。今年の3月までは失業手当があったが、受給期間の終了がさらに拍車をかけた。もともと人が少ない地域でさらに住民が離れれば、物を売ってもなかなか売れない。この状況を打破するために、「復興応援団」を企画した。秋田からバスで被災地に入り、被災地域で買い物をする。秋田の人たちには、被災地に行きたいけれど物見有山で行くわけにはいかないという思いがあり、被災地の人たちはこの現状を見てほしいし、お金を使ってほしいと思っている。第三者が被災地に行き、現場を直接見て少額でもお金を使うことで、地域は少しでも元気になる。この取り組みは被災地の方から感謝されている。この企画と一緒に、仮設住宅を回ってのお茶っこクラブも進めている。

もう1つ、被災地と秋田の温度差を課題として感

じている。被災地の子どもたちは東日本大震災で、友達が目の前で流されていく光景を目の当たりにしている子も多く、悲惨な経験から自分が生きる意味を強く学んでいる。私は秋田市内の学校から依頼を受けて震災の講演をすることがあるが、子どもたちと話をすると被災地の子どもたちと比べて考え方の大きな違いを痛感する。被災地から生きる意味をもっと学ぶべきだと感じ、秋田の子どもたちを被災地に連れて行く取り組みもしている。被災地の方に秋田に来て寛いでもらうことも重要だが、秋田から被災地に入り人間が生きる意味を真剣に考える事も大切であると感じている。あの震災は、我々に生きていく上での多くの学びを与えたのだから。

「船山さんはなぜ被災地に行くの？」とよく聞かれる。確かに私は美容師という本業を持ちながら、これまで60回ほど被災地に入っている。準備を含めると倍の日数は要している。被災地では阪神淡路大震災で被災した人たちもボランティアとして駆けつけ、誰もが泥まみれになりながら頑張っている。根底には、困った時に助け合う「お互い様」という気持ちがある。これは、行ってみないとわからない気持ちかもしれない。

振り返って思うこと

当たり前の事が当たり前でなくなった時に、それらがどれほど重要であったかに気づく。何気ない生活が一番大切だと切に思う。家族や絆など、失ってみてはじめて必要だと感じる事がたくさんあった。人の痛みや苦しみなどつらい現実を見なければ、震災から1年が経って今、大きな学びがあったと感じている。



撮影：2011.4.1 泥出しのボランティアの皆さん

NPO

同じ東北の秋田で暮らす私たちの想い。

秋田市

畠山 順子 秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」指定管理者 NPO 法人あきたパートナーシップ

取材日 2012.09.12

NPO 法人あきたパートナーシップは2006年より秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」の指定管理を受託。東日本大震災後、NPO 法人秋田パドラーズと連携して物資支援や被災地へのボランティア派遣を行なった。2011年4月より震災避難者支援をする助成団体の募集を開始。現在は秋田県への避難者支援に力を入れている。

3月11日 14時46分

職場でパソコンに向かっていた時、突然、携帯電話の警報アラームが鳴り出し、同時に平屋建ての遊学舎が大きく揺れた。セキュリティシステムの警報機から「異常を検知しました」と放送が流れ、館内からは利用者の「きゅー」という悲鳴が聞こえてきた。「地震だ、とんでもない大きい地震だ。どうしよう、私は何をしなきゃいけなかったんだっけ」と様々な思いが頭を駆け巡った。秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」は耐震構造で平屋なので倒壊などの恐れはないだろうと思ったが、各研修室は全室に利用者がいる状態であったし、古民家を移築改修した文化財指定になっている昭和館の2階でもセミナーが開催されていたので、耐震構造であってもとにかく利用者が無事か心配だった。また、食工房での火の使用を止めなければいけないと思い、男性職員に消火態勢に入れるよう指示を出した。「落ち着いて行動してください」と館内放送を繰り返しながら、職員を各研修室へ走らせ、館内の利用者を外の広場へ集めるよう指示を出した。年2回実施している消火訓練を思い出しながら、館内の利用者を安全に避難させることを第一に考えた。

地震直後はすぐに停電してしまったが、予備電源でテレビを見ることができ、また携帯電話のワンセグも見ることができた。テレビで津波の衝撃的な映像を見た時は、何が起きているのか分からず、日本が壊れてしまうのかと思った。浜に何百人の遺体がある、火事で気仙沼が燃えているという情報は本当にショックだった。秋田県から近いので、もちろん行ったことのある場所ばかりで、気仙沼のホテルに泊まったこと、市場で買い物したこと、海水浴をしたこと、さまざまな思い出がよみがえった。たくさんの知り合いがいて、自分の馴染みのある場所が大変なことになっている。「どうなってしまうんだろう…」と不安だった。周辺の道路は信号機が作動せず大渋滞で、電気はいつ復旧するか分からない。予備電源も本当の緊急時に残しておかなければならないと思い、館内



も停電で暗くて利用は危険と判断し、建物を閉鎖して全員帰宅した。通常は20分で家に着くが、この日は1時間30分もかかってようやく家にたどり着いた。雪は積もっていなかったが、夕方から雪が降り出しとても寒かった。

ライフラインが止まって

停電のため国道は信号が消えていて、交通整理をしている人は誰もいなかったで道路は混雑し、あちこちでクラクションが鳴っていた。スーパーマーケットは真っ暗だったが、ろうそくを灯して駐車場でパンやラーメンを販売していた。その後3～4日は整理券を配ってお客さんの入店人数を制限していたようだ。コンビニエンスストアは商品がなくなり、普段はあまりお客さんが入らないような小さな商店に行列ができ、店員はとても忙しそうだった。

地域によっては一部水道が止まった。自宅はオール電化なので電気が戻るまで、キャンプ用品でしのいだ。心細く、「これからどうなるんだろう」と不安でいっぱいだった。娘が盛岡に住んでいるのだが、電話もメールも繋がらずとても心配し、公衆電話からかけた電話で娘の声が聞けた時は思わず泣いてしまった。ガソリンが不足し、どこのガソリンスタンドにも2～3kmの行列ができていた。給油の制限もあり、2週間くらいはガソリンスタンドに行列ができた。私たち職員も相乗り

して出勤し、ガソリンを減らさない工夫をした。遊学舎はさまざまなイベントが中止となり利用者も減ったので、県と相談し、節電も兼ねて21時30分までの開館を18時までとした。通常通り再開したのは夏ぐらいからだ。

秋田県は同じ東北なのに被害はほとんどなかった。どんどん情報が入ってくる中で「自分も何かしなければ」と感じる人が増え、ボランティア活動をしたいと問い合わせが来るようになったが、被災地の状況が把握できず体制が整っていなかったのもう少し落ち着くまで待とうと判断した。今、現地にボランティアが行っても危険が伴い、迷惑がかかるだろうと思ったからだ。ボランティア活動の問い合わせをくれた人には、連絡先をひかえさせてもらい、その後、支援物資整理や現地への瓦礫撤去の活動に参加してもらった。

間もなく県が支援物資を集めることになり、県職員と日本赤十字社、学生ボランティアで物資の整理を行っていた。寄せられた物資の量が多すぎて大変だったようだが、すでに被災地で支援活動をしている人たちから必要な物資の問い合わせが来るようになっていて、最初是要請と集めている物資のマッチングが混乱した。次第に不足している物の要請が来たら、集めている物資の中から探し出し、支援活動で現地に行っている人に託して届けてもらうようになり、必要な場所へ確実に現地に届けられた。

被災地を訪れて

4月9日、震災後初めて気仙沼を訪ねた。遊学舎の職員4人と地震発生直後から現地での支援活動を行っていたNPO法人パドラーズの方たちと10人で出発したが、道路はめちゃくちゃで迂回を繰り返してやっと活動場所の気仙沼市南郷にたどり着いた。初めて被災地を見た時は、言葉が出なかった。川に船や家の残骸が重なり合い、車がお店に刺さり、魚が道路に散乱して異臭を放っていた。パドラーズの船山理事長に「あんまりびっくりするなよ」とあらかじめ言われていたが、あまりに悲惨な光景に驚き、ショックを受けた。ただただ涙がぼろぼろとこぼれてきて、ふと目をやれば、泊まったことのあるホテルや買い物したことのある市場が見えた。「ああ、ここ来たことあるのに…」同行した運転手さんは泣きながら「去年の秋に、同級会でここに来たんだよなあ」と言っていた。地盤沈下で水が引かず、本当にひどい状態だった。この世の地獄だと思った。

気仙沼を訪れたのは、現地で何が必要とされているのかを知りたかったからだ。秋田県にいる自分ができることは何なのか。また、秋田で暮らす人たちに被災地の現状を伝える必要があると思っ

た。実際に気仙沼の状況を見て、元に戻るには相当の時間がかかると感じた。秋田で何ができるかを考えた時、被災地に入る危険性を考慮して現地に直接行くのではなく、秋田で物資を集めようと決めた。被災地での支援活動は専門の人たちに任せ、そうした人を通じて物資を必要としている人に届けてもらうことにしたのだ。

被災地ではだんだんと瓦礫撤去作業が進み、パドラーズでは4月くらいから毎週末、現地入りし側溝の泥あげや各家々の泥出し、炊き出しを行っていた。遊学舎でもボランティアを募り、2週間おきくらいにパドラーズの活動に参加させてもらった。バス2台に30～40人ほどのボランティアを乗せて、秋ぐらいまで現地に通り、力仕事はパドラーズ、きめ細かい支援やNPOの相談先の紹介などは私たちと役割分担をし、パドラーズと連携して活動した。何度か気仙沼へ行くうちに気仙沼の住民の方たちとのつながりもでき、秋田市の秋田駅前に気仙沼のアンテナショップを開店した。

スギッチファンドに詰まっている秋田の人々の想い

2011年4月、ある企業からスギッチファンドに500万円の寄付があり、その社長から「緊急性のあるものに使って欲しい」と申し出があった。「だんだん秋田県に避難している人たちが増えているので、そうした人たちをいろいろな団体が支えて欲しい。せっかく秋田県に来たのだから癒してあげたい」と社長がおっしゃったので、すぐにやるべきことだろうと判断し、4月末から震災避難者支援をする助成団体の募集を開始した。急な募集にも関わらず、10団体から申請があり5事業が採択された。

スギッチファンドから助成した団体の中には、被災地へ支援物資を運んで空になったバスに現地の被災者を乗せて秋田へ招待するという活動をしている団体もあった。すでに秋田では温泉旅館などを被災者に無料で開放する体制ができていた。秋田に来て少しでもゆっくりしてほしいとの思いからだったようだ。気仙沼のおばちゃんたちを招いた時、一緒にバスに乗ってきたこともある。被災した皆さんは「ありがとう」とたくさんお礼を言うてくださったが、温泉に入ってもほっとしたような表情はあまり見られなかった。きっとそうしたことで癒される問題ではないのだろうと感じた。その後、県からも震災支援助成の予算が付き、イベントで集めた支援金や個人で募金を集めてスギッチファンドへ寄付してくれた方もたくさんいた。

うるさいかもしれないけれど、見守りたい

現在、秋田県には1,400人の方が被災地から避難してきている。ほとんどは福島県からの避難者だ。秋田県では2年間、6万円まで家賃を補助する制度があるが、小さい子どもさんを抱えた母子避難の方が多く、家族がバラバラになってしまう課題が生まれている。ある方が「たまに夫に会ってもケンカしちゃうの」と言っていた。母親は子どものためにと思い、福島を離れたい。しかし、父親は仕事の都合で一緒に福島を出ることはできない。やむを得ない状況の中で原発事故に対する意識が夫婦の間ですれ違い、家族を引き裂いてしまうこともあると聞いた。県の調査結果によると、避難者の40%の方が精神面、身体の不調を感じている状況にあると言う。そうした話を聞いて、秋田に避難している方々のケアが必要だと感じた。私たちの自主事業の「いきいき健康塾」というお医者さんに何でも相談できる講座で、震災支援をテーマに参加者を募集した。でも、避難者の方の参加は1人もいなかった。困っている人、悩んでいる人は多くいるはずなのに、誰も相談に来る人はいない。まだまだ相談するという段階まで進めていないのかもしれない。深く傷ついてしまった人たちは、1歩も前に踏み出せないのかもしれない。現在は、相談員と保健師がニーズのあるところへ居宅訪問を行なっている。「朝5時から起きて来るのを待っていた」と言う方もいるそう。こちらから行かなければ助けることはできないのだと気づかされた。秋田県で自殺する人を出したくない。うるさいかもしれないけれど、見守っていききたい。今後もニーズは多様になり、対応も変化していくだろうと思う。

これからを担う若者たち

先日、遊学舎の広場で「県民協働フェスタ2012」を開催し、企業を含め77団体がブースを出展した。福島や気仙沼のお店にも出展してもらい、少しでも売り上げと交流につながればいいと考えた。復興支援だけでなく協働をテーマにし、会議棟では若者たちの活動を考えようとトークセッションを行なった。事例紹介で「ふくしまの集い」という団体に出会った。この団体は秋田の大学に通う福島県出身の大学生たちが口コミでつながり、福島県出身の子どもたちに無料で勉強を教える活動をしている。秋田駅の近くに「きびたきの家」という学習塾を作った。メンバーのある女子学生が「秋田県でできたつながりは一生つながっていきます。この活動は必ず後輩に引き継ぎます」と言ってくれた。秋田県と福島県のつながりを大

事にしたいと言うのだ。秋田でそうした若者たちが育っているのは嬉しいことだし、心強い。これからも私たちはNPOの中間支援組織として、状況に応じたコーディネートを行なっていきたいと思っている。いま困っているところに、即ピンポイントで助けに行けることが、私たちNPOの強みだと思う。

同じ東北で暮らす私たちの想い

昨今、人間関係は希薄になり、互いに関心を持たずに口を出さないのが良いという社会になってきている。1人ひとりが確立されるのが良いことで、お節介するのは余計なお世話であり、人のために何かやるのはかっこ悪いという風潮が感じられる。今の若者の中には自分の気持ちを素直に口に出せない人もいると思う。だからこそ、お節介をやくのも、熱血であるのも必要なのではないかな。緊急時に隣の家に住んでいる人のことを気にかけられる関係性が必要なのではないかな。熱い想いを持って、いろいろな人と出会うことが人間には必要だと思う。人との関わり方を見直す必要があると、震災を経験して皆が気づいたのではないかと感じる。

去年の夏に陸前高田の仮設住宅を訪れた時、仏壇の前で1人、じっと座っていたおじいちゃんが忘れられない。今そうした人がたくさんいるのではないかと怖くなる。あまりにも辛い出来事が多すぎて傷つき心を痛め、多くの人がそれぞれの辛い想いを抱えて声に出せないことがたくさんあるだろう。「がんばれ」なんて簡単に言うことはできない。それでも、少しでも残念な結末を防ぎたい。同じ東北なのに秋田県の被害が少なかったことに複雑な気持ちがあると言う人もいる。だから、できることがあれば被災地で心を痛めている皆さんのために何かをしたい。きっと簡単なことではないと思うが、ぜひ声に出してほしいと思う。私たちは同じ東北人として被災地の皆さんのことを忘れない。



撮影：2012.9.9 「県民協働フェスタ2012」出展者の皆さん

NPO

それぞれの土地にある多くの智恵を、次の世代に

秋田市

鑑 啓記 NPO 法人あきた地域資源ネットワーク

取材日 2012.10.02

秋田県内各地にある地域資源（ジオパーク・観光・食文化・地魚・歴史・民俗・自然など）に基づき、地域で活動する団体や個人と協働しながら、地域の振興を図ることを目的としている。男鹿市民の持つ過去の地震・津波経験から防災の知恵と伝統を活かし、災害に遭遇した場合の対処法を考える「災害に強い男鹿の地域づくり協議会」にも参加。

3月11日 14時46分

理事長を務める「特定非営利活動法人東北みち会議」の事務所で会議中だった。突然周りで携帯電話の緊急地震速報のアラームが鳴り、その直後大きな揺れが来た。年配の女性職員がパニックになりかけた若い女性職員をなだめていた。終わったと思ったらまた揺れが来て、3度大きな揺れを感じた。その時は宮城県沖地震だと思い、どうしてこんな日に仙台に来てしまったのだろうと思った。事務所は6階で、隣のビルの屋上から立ち上る煙やビルの外へ逃げ出す人々、隣の専門学校的女子生徒が非常階段で泣いている様子などを見るとはなしに見ていた。

事務所はぐちゃぐちゃで居ることができず、立体駐車場も動かなくなっていたので車の出庫ができず秋田へ帰ることができなかった。近くのホテルに泊まろうとしたが予約で満室という返答だった。しかし、予約客もこの地震ではキャンセルするだろうと思い、ホテル側も夜の9時ぐらいまで予約客が来なければ部屋を解放するということだったのでロビーで待ち、何とかその日は泊まる場所を確保することができた。翌朝、ロビーでワンセグを見ていた人から、津波があったようだという話を耳にした。近くの新聞販売店に行き、号外を見て初めて大災害であることを知った。

その後、同僚2人と一緒に仙台港へ行った。45号線を海に向かって車を進めて行くにつれ、建物に付着した海藻やゴミが津波の凄さを物語っていた。やがて流された車や瓦礫が道を塞いでそれ以上進めなくなった。石油タンクが燃えているのを見て、爆撃でも食らったかのような光景に衝撃を受けた。

道の駅の安否確認

震災後2日目からは、東北みち会議が「東北道の駅連絡会事務局」を担っていることから、道の駅に特化した支援を行なうことにした。国土交通省東北地方整備局と相談し安否確認を始めたが、電



話がつながらず確認ができなかった。パソコンは使用できたのでツイッターやブログで情報を集めたが情報が錯綜していてなかなか進まなかった。これは自分の目で確かめるしかないと思い、出かけようとしたがガソリンが無く断念した。ガソリンの供給が平常に戻った3月末になって、八戸からいわきまで5日間かけて海岸沿いの道の駅を訪ねて回った。場合によっては避難先まで駅長（道の駅の責任者）を探し歩き確認した。震災で被害を受けた道の駅は、みやこ（岩手）、高田松原（岩手）、大谷海岸（宮城）、よつくら港（福島）の4カ所だった。

避難の拠点、支援の拠点としての道の駅

全国の道の駅970カ所に募金箱の設置を呼び掛けた。道の駅は震災直後、避難の拠点として機能した。福島の沿岸に近いところの人たちは道の駅へ避難し、休憩、トイレ、おにぎりの配給などを受けた。宮城県の三本木は内陸部の人たち、上品の里は石巻の人たちがそれぞれ避難する拠点となった。それが一段落するとボランティアや自衛隊の支援の拠点となった。道の駅を通じて被災地へ物資を届けたいという問い合わせも多く、それを受け入れ道の駅から配送する機能も果たした。

道の駅は普段から産直に力を入れていて、農家とのつながりがとても強い。1駅あたり100名前後いる農家会員に声をかけると相当なものが集められる。レストランなども併設しているので炊き出しにも活躍した。多いところで60～70人を雇用しているので人手もある。施設全体の電気を賄える充電設備を持っている道の駅もある。三本木や田老は、国が各県に1つずつ設置した防災拠点としての機能を持たせた道の駅で、自家発電や災害用トイレがあり、防災拠点としての機能を発揮した。

道の駅は震災後数か月ほど大きな役割を果たした。現在も復興支援のイベント開催などを行なっている。

道の駅が避難拠点、地域の支援拠点になり、地域の大きな核になることが、今回の震災で明確になった。

この結果を受けて、国が道の駅を防災拠点として整備する動きがある。施設全体を動かせるような充電設備や、情報発信の場として機能すること、利用者が携帯電話やパソコンなどを使えるシステム作りを行い、形だけではなく本当に使える防災拠点にして欲しいと国に提言している。

過去に学び自然を敬うことの大切さ

地域伝承に非常に関心が高く、さまざまな調査を行ない結果を本にまとめている。自然を征服するなどというおこがましいことは言わないで欲しい。自然に対する畏れと敬いがいかに重要で、洪水や大雪、地震などの自然現象は繰り返すということを、みんなが知らなければならないと感じていた。いろいろな学者がさまざまなことを警告していたのに、ほとんど無視されてきた実態が震災後に表面化した。科学一辺倒の日本の姿勢が被害を大きくしてしまったことにつながったと思う。警告は出ていた。それをちゃんと認めなければいけなかったと思う。自然災害は繰り返していることはわかっていただけで、過去に学ぶことをしていなかったのだと思う。伝承・伝説などは大学の先生が言うのであればまだしも、村の古老が言うとうそに付されたりしたものだ。

10年程前に、秋田の雄物川の災害伝承を河川工事にどのように活かせるか、国土交通省に提案し、予算化してもらい本を作った。過去の災害の事例から、どのような堤防を作ったらよいか、どのような護岸工事を行えばよいのかを学ぼうと作成した。

「災害に強い男鹿の地域づくり協議会」を組織し、昭和14年の男鹿地震、昭和58年の日本海中部地震という2つの大きな地震を経験した古老たちに、去年1年間ヒアリングを行なった。男鹿地震の記憶がある経験者は80歳を超えている。今年

はそれをどのように男鹿の地域づくりに活かせるかを考えながら活動を行なっている。この活動のきっかけは、男鹿の人たちが3.11の後に「俺たちは生活に全然困らなかった。」と言っていたことからだった。なぜかと理由を尋ねると「魚の干物はあるし、畑には野菜があるし、海に行けば魚がいる。1～2週間買い物に行く必要が無い」「燃料は炭で煮炊きした」と笑い、「都会の連中はかわいそうだと思って見ていた。」と言う。保存食は非常食になるのだとその時気づき、家庭でどういった食料を保存していて、それが日本海中部地震の時にどのように役立ったかについても調査している。30年前にさかのぼると、男鹿ではスーパーで買い物をするのは恥ずかしいことだったそう。それぐらい自分の家で準備できないのかと思われたという。

調査を進めるうちに出てきたのが核家族化という問題だ。男鹿市の隣の潟上市が秋田市のベッドタウンになっていて、若い世代はそこへ家を建て移り住んでいる。そのため同居家族にも近所にも生活の知恵を教える世代がいらない。町内会もほとんど新しい人ばかりだ。男鹿が持っている伝統的な文化の知恵を若い世代に伝承するのが我々の仕事だと思って行なっている。

年寄りたちに「今だったらまだ間に合う」と言われた。非常食としての保存食の活かし方をはじめ、男鹿の知恵を残し、伝えていきたいと思っている。それぞれの土地にある多くの知恵を、笑わないで聞いて、生活に活かすことを考え、次の世代に伝えていくことが、今の世代の役割ではないかと思う。

震災を振り返って

「道の駅」は、行政とも連携した本当に使える防災拠点づくりが必要だ。離れた道の駅同士での姉妹提携も必要だと思う。地域の人たちと道の駅の



撮影：2011.4.7 福島県南相馬市 行方不明者捜査を行なう自衛隊、警視庁の拠点となった道の駅・南相馬

つながりを普段から密にしておくことも大切だ。科学に頼りきらず昔からの伝承や言い伝えを笑いものにしないで伝えていく努力、私たちが東北で得た経験を西日本へ伝えていくことも必要だ。大学の先生たちが仙台平野や福島沿岸での過去の大津波について警鐘を鳴らしていたが、これからは無視できない。各地の原発がある土地ではボーリング調査を行ない地層に残された過去の津波の調査が行なわれている。科学だけではなく、過去の歴史が見直されている。ようやく細々と伝わってきた自然と向き合う知恵や自然災害の警告が活か

されるのだろうと期待している。

男鹿の海岸に、周りの岩石と異なった性質の、高さ7～8mの巨石が不安定な状態でたくさん存在している。これだけの巨石を運んでくるエネルギーをもった津波が過去にあったのではないかと、私が所属する秋田のNPO理事長が調査・研究している。これが東日本大震災の前だったら「何をばかなことを」と笑われていたかもしれないが、震災の後ではみんなが真剣に耳を傾けるようになった。



撮影：2012.8.11 福島県いわき市 企業などからの支援で建て替えることができた道の駅・よつくら港（NPO法人あきた地域資源ネットワーク提供）



撮影：2012.1.11 石巻市 卒業制作に取り組む湊小学校の児童（NGO RASICA 提供）



撮影：2011.3.31 気仙沼市南郷 ヘドロ出し（NPO法人秋田パドラーズ提供）



撮影：2011.4.1 気仙沼市 大川の状態（NPO法人秋田パドラーズ提供）

NPO

連携し、協働することでさらに力は強くなる。

山形市

齋藤 和人 NPO 法人山形の公益活動を応援する会・アミル

取材日 2012.10.03

博愛精神およびノーマライゼーションの理念のもとに、年齢の高低・障がいの有無・性別の差異等にとらわれることのない住みよいコミュニティの形成に寄与することを目的として活動するNPO中間支援団体。東日本大震災時には災害支援、情報支援、中間支援を行なうNPO3団体及び山形県と協働し、「復興ボランティア支援センターやまがた」を立ち上げ現在も活動中。

3月11日 14時46分

山形県庁に県内NPO関係者などが集まり、協働助成事業の説明会が行なわれていた。県庁は新しい建物ではなく会議室は9階だったので、ものすごく揺れた。突き上げるような大きい揺れだ。机がガタガタと音を立てて移動した。どこが震源地なのかすぐには分からなかったが、近い場所で起きたと感じたので、東北が震源地だろう、4年前に宮城県栗原地域で大きな地震が起きていたから、またその辺りで発生したのかなと思った。説明会はすぐに中止になり、非常階段で下まで降りた。皆、関係各所へ連絡していた。NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミルが指定管理として業務している霞城セントラルビル内の山形市市民活動支援センターが心配だったので、すぐに向かった。普段いるセンターは22、23階にあるので、そこで勤務中であればおそらくもっとすごい揺れを感じただろう。霞城セントラルに到着すると職員や利用者が外に避難して集まっていた。状況確認のため携帯電話のワンセグを見て震源は宮城県だと分かり、すぐに津波の生々しい映像を見た。大惨事だ。これからどうになってしまうのだろうと不安だった。山形県は宮城県から嫁いできた方や山形大学に進学してそのまま就職する方が多く、自分の故郷を心配している方が大勢いた。

ライフラインが止まって

2日間、停電した。寒いのに暖房は使えない。信号はほとんど消えていて道路は渋滞した。多くの人々が食料などを買い求め、コンビニエンスストアやスーパーマーケットに長蛇の列ができた。すぐに物資はなくなってしまい、棚は空になった。また、1週間以上はガソリンがなかなか手に入らず、夜中から並んだ。地震で物が破損するということは少なかったが、物資のない状況は仙台とほぼ同じ状況だったと思う。水道は止まらず、山形は天然ガスを使用している家庭が多いので、ガスも確保できた。お風呂に入れたので、仙台からタクシー



で買い物に来てついでに入浴していく方もいた。温かいものを煮炊きでき、お風呂に入れたことは恵まれていたと思う。

霞城セントラルビル内の暖房が使用できなかったのも、15日まで市民活動支援センターも閉鎖した。霞城セントラルは自家発電装置を備えているが使用燃料の確保の問題から使用できなかった。社会的弱者支援をしているNPOは大変だったようだ。普段行なっている支援ができない。ガソリンがなかったので、例えば移動サービスを行なっているところは送り迎えができず、他のサービス利用者も施設まで来られない状況が続いた。

支援活動をスタートするまで

状況を把握するため、発災してすぐに山形県災害ボランティア支援本部にメンバーを送った。しかし、こうした未曾有の大震災は経験がなく、本部も具体的に何ができるか、何をすべきかで混乱していた。支援本部に送ったメンバーもどのような情報を収集したらよいのかも分からず戻ってきた。発災直後はどう動いたらよいかわからなかったのが現実だ。NPOの中間支援組織として、この時点では自分たちの役割がはっきりとは見えなかった。支援本部に通い情報収集をして、何が求められて

いるのかを探った。山形県のNPOも震災の影響を受けているので、それぞれが自分たちの活動をするのに手一杯で、他県の支援活動を行なう余裕はなかったと思う。山形県災害ボランティア支援本部にきたボランティアの問い合わせは本部が対応していたが、窓口はなかなか整理がつかず、また、混乱を防ぐために登録を受け付けるのが精いっぱいであった。山形県でも何とかしたい何かをしなくては、と想いを募らせている方がたくさんいたと思う。

情報収集をしている内に、全国的に支援が始動した情報をつかんだ。すぐに、関東や関西の方々から山形を経由して被災地に入れるか問い合わせがきた。太平洋側は震災により大きなダメージを受け、物資は行き渡らなくなった。太平洋側の県へ入るには庄内から山形に入り山形からバスで仙台に向かう、あるいは笹谷峠などの県境の峠を越えて宮城県に入る方法しかなかった。道路やガソリンの状況など実際に被災地へ入ったメンバーからいろいろな情報が入ってきて、それをつないでいくのが最初の仕事だった。そのうちにいろいろなNGOがだんだんと被災地に入り活動を始めた。モンベルのアウトドア義援隊が山形に物流基地を置き、物資の仕分けをできるボランティアを集めたいと情報が入ってきたので、つなぎ役として情報を拡散した。中間支援組織のメーリングリストなどでも「物資を集めています」「こんなことができる人はいませんか」と呼びかけがあったので、対応できるものは対応した。動き出した他の団体に対して、どうお手伝いできるかと考えるところから我々の活動がスタートした。

5月末頃に初めて宮城県の被災地を訪れた。言葉もないとはまさにこの状況だと思った。映像を見たり、新聞を読んだりして、被災地の状況はイメージしていたが、家が無くなってしまったり、ぐちゃぐちゃになっていたりする状況を実際に目の当たりにして自然の脅威を実感した。

「復興ボランティア支援センターやまがた」設立

5月連休明け頃から、NPO独自でフットワークの軽い支援活動を展開していく必要があると感じた。行政と協働での支援も必要だが、スピード感が不足していた。行政は行政としてきちんとした信頼性のある情報を出し、対応をしなければならないしNPOとは違ったスタンスがある。NPOはNPOらしく思い通りに活動できる体制を作りたいと思った。

6月頃から災害支援、情報支援、中間支援をしている団体が一緒になって山形の災害支援の窓口になる組織を作ろうと協議を進めた。2011年8月1



2011年8月から月2回発行の広報誌 Welcome

日、復旧・復興に向けて支援に取り組むボランティアに関する活動や情報の拠点となるため、平成23年度新しい公共の場づくりのためのモデル事業として「復興ボランティア支援センターやまがた」を設立した。山形県と災害支援団体のNPO法人ディー・コレクティブ、情報支援団体のNPO法人Yamagata1、中間支援団体のNPO法人山形の公益活動を応援する会・アミルで協働運営している。

事業には3つのミッションを掲げている。はじめに、山形県内で復興支援を行なうまたは行ないたいとする個人、団体への情報提供と場の提供だ。例えば、沿岸部へのボランティアのコーディネートやボランティアバス運行の支援として広報の協力をした。次に、山形県内に原発事故などで避難しているの方々への情報提供である。最後に、情報の受発信だ。広報誌Welcomeを2011年8月から月2回発行し、今年9月で第25号になった。山形県はもちろん宮城県や福島県の震災に関する話題をピックアップしたり、県内のイベント情報を掲載したり、避難者および支援団体へ情報を仲介して伝えている。広報誌とWeb-site（PC、携帯電話）が中心だが、余裕ができてからはFacebookの使用も始めた。現在は県内の避難者支援グループへの支援に重きを置きつつある。予算の編成時期で、今後もこの形態で続けていけるかは見通しが立っていない。

ボランティアセンターという名前の組織はたくさんあるが、我々が目指したのは中間支援型のボランティア支援センターだ。直接ボランティアをつないでいく機能よりは、むしろ支援活動をされている方々や団体をサポートする役割に重きを置いている。そこにイメージのギャップが生じやすく、最初は説明が上手くできずに「もっとボランティアを派遣するべきだ」などの指摘を受けたことも

あった。スタッフも活動の現場に行き直接被災地を支援したい葛藤があった。「中間支援」という言葉は馴染みがないので、センターの方向性を示していくのは非常に難しく、一般の方や支援者にも理解してもらうのはとても時間がかかった。

東北の運命共同体

山形県では被災地からの避難者への支援が行なわれている。主に福島県からの原発事故の避難者が圧倒的に増えた。これは他県と違う点だろう。受け入れ施設として用意していたところはすぐに満員になった。爆発が起きた直後は福島県域で避難した人が多く、その後避難区域や2回目の爆発で恐怖を感じ、次の日から避難者がどんどん増えた。ピーク時で約1万5千人の方が山形に避難していた。

山形県は避難者が多く特殊な状況だったので、被災した県と支援している県という間柄の認識はなく、被災した県と運命を共にしている東北の隣県という想いが強い。昨年、山形県の節電率は日本1位だった。そうした行動を起こさせるのは、被災地のことを他人事ではなく自分事と捉えているからだと感じる。1年半以上が経ち関西方面の方々などの震災に関する関心少し落ち着いてきたように思うが、山形県民は当事者としての感覚を持っている。被災地のために大学や企業などさまざまなセクターが一緒になって動いたことは、プラスだったと感じる。

中間支援組織としての役割

山形県内には支援団体がたくさんあるが、見えていない部分も多くある。中間支援組織として、どんな団体がどこでどのような役割を担っているかを整理し把握する必要があると考えている。全体を把握すれば不足し補わなければならない部分が課題として見えてくる。その欠点を埋められる組織を作りたい。そうした準備をしておかないと、このような大規模災害が起きた時に皆さんに支援の手が届かない。

震災前に「支え合いリスト」作成を考えた。数年前に全NPOに対して、もし災害が起きた場合団体が一番困ること、団体ができることを調査した。しかし、内容がその後更新されておらず、震災時に機能することはなかった。データを集めてもどう活かすかは考えられていなかったのも、反省点として今後に活かしたい。データを活用するならば、常にアップデートしなければならない。また、そのリストに載っている人たち同士と顔の見える関係ができていないと、災害が起きてからすぐに連携するのは難しい。中間支援組織として、リス

トを活かすために顔を合わせる機会を仕かけていきたい。

県内の支援グループとのつながりは震災後にできた。最初は連携するのに苦労し、現在も円滑に連携できているとは言えない。我々が拾い切れていない情報もあるし、支援団体が期待していることと我々がやっていることとの間にギャップがあるだろうと感じる。従来から活動に取り組んできた方々は、我々と連携しなくても活動していくことができる。新しい団体は把握しやすいが、震災以降、新しく山形へ入ってきた方々は何かしなくてはと強い想いできた方が多く、考え方も少しずつ違い、従来のNPOと競合する部分ある。復興ボランティア支援センターやまがたでは月1回支援者の集いを開いている。支援団体同士で情報を交換し、顔の見える関係作りをすることが目的だが、今まで山形での活動のベースがなかった新しい団体の方が参加しやすいようだ。従来から活動している団体の情報は記録にも残っていないので、どう把握し連携していくかが課題だ。NPOはそれぞれミッションを持って活動をしているが、NPO側も他団体と協働することでさらに力が強くなることを認識してほしい。NPO同士の情報交換からでいいので、広い視野が必要だ。

また、行政は担当が変わると対応が変わる特徴がある。行政なら行政として、あるいは課なら課としての方向性が決まっているとNPOとも連携しやすい。担当が変わると方向性も変わるのでは連携しにくいし、行政もそうした特性を持つことを認識すべきだ。中間支援組織としては、こうした行政の特性をNPOが認識できるような場や政策提言をNPO同士で協議できる場を作ることができる、そのための力を養成する必要があると感じている。



「復興ボランティア支援センターやまがた」の玄関

企業

天童市

「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。

武内 賢二 ソーラーワールド株式会社

取材日 2012.10.03

1997 年創業。「ライフスタイルはローテクがいい、でも使う技術はハイテクで」を企業理念に、自然エネルギー機器の開発・販売・施工専門店として、自然エネルギーの有効活用を中心とする循環型社会づくりのため「自然」「人」「社会」の調和を考え、エネルギーを作り出す方法やエネルギーを有効活用するライフスタイルを提案している。

3月11日 14時46分

将来環境問題に携わりたいと考える離職者を対象にした環境学校が山形市内にある。受講は1年間のカリキュラムで、私は自然エネルギー担当の非常勤講師だ。1ヶ月に1回、朝から夜まで自然エネルギーについて講義をする。受講生は30名ほどで、年代は20代前半から60代までいる。3月11日は1年間の最後の講義の日で、14時46分は残り15分ほどとなり、総まとめの話をしていた時だった。突然、ぐわーっと揺れ出した。ぐらぐらと激しく揺れ、これは只事ではないなと感じた。講義はすぐさま中断した。震源地は仙台だと携帯電話の緊急地震速報で分かり、仙台から来ている受講者もいて「大変だね!」と話しながら即解散になった。今後の話もせずに、とにかく帰宅しようと家路についた。

環境学校から30分ほどかけて自宅に到着した。停電で信号が消えたので、渋滞していた。自宅に着いてすぐに電源を確保した。自宅は太陽光パネルによる独立電源を持っている。天童市は1日半ほど停電したが、太陽光パネルで発電した電気をバッテリーに充電していたので30分ほどで電気が復旧した。すぐにテレビとペレットストーブが使えるようになった。テレビで津波の映像を見て「何なんだこれは!」と衝撃を受けた。

夜になり周囲は真っ暗だった。子どもたちを連れて市内の様子を見に行った。電気がついていたのは病院、市役所の1階、消防署、東北電力の営業所だけだ。そして民家で電気がついたのは私の家だけだったと思う。近所のスーパーマーケット、ホームセンターでは行列ができた。多くの人が食べ物や懐中電灯、乾電池、ホッカイロ、ガスボンベを買い求めた。私も行列に並び「仮設照明が欲しい」と言ったら「停電しているのにですか!？」と店員に驚かれた。居間やトイレなど家中に仮設照明をつけ、ペレットストーブの燃料はストックがたくさんあったので暖房の心配もなかった。水は止まらず、ガスはプロパンガスを使えた。少々不便は感じたが、エネルギー源を持っていたので



ご飯を食べて普通に生活できた。

この辺りは温泉旅館街なのでこうした非常時の場合、非常用電源がついて明るいだろうと想像していたが、実際は発電機が動かなかったようで真っ暗だった。日頃、省エネを意識しているため電気をつけたまま寝る習慣はないが、非常時で真っ暗なのは治安的に良くないと考え、事務所の明かりを外に向けてつけたまま寝た。

電気の重要性を実感

翌日の早朝、事務所のドアの前に人が立っていた。襲われるのかと怖かったが、ドアを開けて声をかけると事情を話してくれた。

その方はたまたま仕事で仙台に来ていた時、地震が起きたそう。宿泊していたホテルの従業員に「タクシーで山形に逃げた方が良い」と言われ、真夜中に山形に到着したが宿泊できるホテルはなく、真っ暗な中をさまよっていた。携帯電話の電池は切れてしまい、家族や会社に連絡ができない。ところが1軒だけ電気がついている家を見つけた。なぜだろうと不思議に思い、もしかしたら携帯電話を充電させてもらえるかもしれないと希望を抱いて、朝になるまで外で待っていたとのことだった。携帯電話を充電している間、なぜ電気がついているのか聞かれたので、太陽光パネル

で発電していることを説明した。彼は充電中の携帯電話のワンセグを見て震災の状況を知ったようで、大変驚いていた。充電が終わると、仲間の携帯電話も充電したいと言うので了承した。その話は近所に伝わり、この事務所は携帯電話を充電する人たちでいっぱいになった。電気が回復するまでその対応に追われた。

その後、ガソリンが手に入らなくなった。家からガソリンスタンドは遠いはずなのに、家の前まで行列ができていた。夜中から並び一昼夜を車で過ごす人が大勢いたので、トイレに困るだろうと事務所のドアに貼り紙をしてトイレを開放した。福島県川内村に住んでいる知り合いから、原発事故が心配なので山形県に避難したいと相談があった。そこで、3月12日から約2か月間、2家族2個人を受け入れて、我が家は避難所として開放した。その後は被災地へ行くボランティアたちの中継地として開放した。交通も麻痺していて突然被災地に入ることは難しかったので、関東から山形を経由して被災3県へ行くボランティアが寝泊まりした。

石巻市の方との出会い

地震が発生してからすぐに被災地の知り合いと連絡を取り、太陽光発電で電力を供給するボランティアをしたいと相談した。土地勘がないので、コーディネートを頼もうと考えた。しかし、現在は遺体捜索も続き非常に混乱しているので、少し様子を見た方がよいとアドバイスもらった。地震から1週間後の早朝、事務所にいたら、知らないおばちゃんが血相を変えて突然バタバタと入ってきた。「おおっ！なんだっ！」と驚いていると、息も絶え絶えに「外に立てかけてあるものは何ですか？」と聞く。それは太陽光パネルだと説明すると、突然訪ねた理由を話し始めた。その方は石巻市の避難所でボランティアをやっていたそうだ。ボランティア活動中、支援をする行政と支援を受ける被災者の間に立って、精神状態がぼろぼろになってしまった。天童市の旅館に勤める息子が被災地にボランティアに行った際に、あまりにも疲れきった母親の姿を見て、せっかく生き残ったのにこのままでは身体を壊してしまうと強制的に天童市に連れてきた。しかし、被災地や避難所のことが気になって、旅館で落ち着いていられず散歩していたところ、ここの太陽光パネルを発見した。被災地では電気が必要なので、パネルを売ってほしいと言う。その時すでに太陽光パネルを被災地に届ける支援をしようと決めていたので、「いつになるかは分からないがガソリンを手に入れたら、絶対にあなたの避難所に届けに行く」と約束した。

地震から10日ほど経過し、相談していた知り合いから「そろそろボランティアを始めよう」と連絡が来たので、すぐに被災地に入ることを決め、支援がスタートした。まずは数日前に約束したおばちゃんの避難所からだ。3月末、石巻市湊中学校へ行き、おばちゃんを探した。太陽光パネルを設置し、資材倉庫を照らす明かりを取り付けた。「おばちゃん！約束したから来たよ」と声をかけると、おばちゃんは「本当に来てくれたんだ！」ととても喜んでくれた。家にあった太陽光パネルの在庫をすべて被災地に届けた。

最初に被災地を訪れた時、戦争の経験はないが、おそらく戦争中はこのような感じだったろうと思った。一帯が瓦礫の山で埋め尽くされ、11tのダンプよりはるか高く積み上げられていた。コンビニの駐車場らしき場所で車を止め、ご飯を炊いて食べた。食欲はなかったが、食べないと体力も気力も続かないと思った。

中学生がボランティアで頼もしく成長

私が被災地へボランティアに行く情報を聞きつけた親戚の中学生が「被災地ボランティアに行きたい」とお願いに来た。テレビでいろいろな惨事を見て、被災地のために何かしたいと言う。「いいよ。ただし被災地ではおんちゃんはお前を子ども扱しない、1人の男として接するよ」と伝えた。一晚考えなさいと家に帰したが、次の日の早朝「やっぱり僕は行きたい！」とやって来た。彼にとって焼けた町や自衛隊による遺体捜索の様子は、かなりインパクトがあったようだ。避難所へ行き、太陽光パネルや照明、重いバッテリー、設置するための道具を4階まで運んだ。避難所の係の人にどこに設置してよいかを自分で確認し、照明を取り付ける仕事を任せた。被災地ボランティア後、中学校でボランティアが



撮影：2011.5.19 陸前高田 金剛寺

テーマの授業があったそうだ。母親が「被災地のことを話したの?」と聞くと「お母さん、被災地の状況は簡単に話していいことじゃないと思う」と答えたそうだ。現場を見て、被災者と触れ合い、中学生の彼なりに学んだことがあったのだと思う。

アニメで子どもたちの心を癒したい

5月のGW、東京のヨーロッパアニメの配信会社から上映会「こどもアニメキャラバン」の話があり、開催の協力をした。「きかんしゃトーマス」のライブ吹き替え上映で声優を務める女優の戸田恵子さんと一緒に、陸前高田市、釜石市、野田村の幼稚園や保育園へ行った。被災地ではきっと子どもたちが心に傷を負っているだろうと思い、アニメを見ながら少しでも心を和ませて欲しかった。映像を流すには電源があるので、太陽光パネルを設置し発電して電気を賄った。スクリーンはシーツを縫い合わせた手作りだ。

私の子どもたちはリアルタイムで津波の映像を見たが、映画を見る感覚で全く驚かなかった。子どもたちにとって津波の映像はあまりにも現実味がなかった。周囲の人たちが大変なことになったと言っても、「僕たち、もうその映像見たよ!」と事の重大さを理解できなかった。このままではいけないと感じ、「こどもアニメキャラバン」活動の際に被災地へ連れて行った。子どもたちに被災地を見せ、上映会では手回し発電でわたあめを作る仕事をやらせた。その後は被災地の話をする時は、子どもなりに言葉を考えて話すようになった。あまりにも多くのことがあった怒涛の1年半で、よく覚えていない。これまで合計で約250か所、太陽光パネルに換算すると約2,200枚の支援を行った。

自然エネルギーを実感する場を提供したい

さまざまな被災地で支援活動を行ない、現在浮き彫りになったエネルギー問題は被災地と被災地ではない地域を別々に考える必要があると感じた。被災者はエネルギーよりも明日の生活をどうするかの問題が先決で、生きる、生活するための手助けが必要だ。将来は地域づくりにおいて自然エネルギーを考えてほしいと思い支援活動をしていたので、自然エネルギーの勉強会などの開催も考えていた。しかし、被災地では生きる活力を見出そうとしている人たちがばかりなので、エネルギーの話はピンと来ない。いずれは被災地でも動かなければならないが、今はそのタイミングではないと感じている。

一方、被災地ではない地域は自然エネルギーにつ

いてもっと議論を行なうべきだと考える。3月11日以降、我々の方向性を考え直さなければならぬ時代にきたのではないか。2011年6月、環境学校の卒業式に非常勤講師として出席した。地震で揺れている時はエネルギー問題がこうして新たな局面を迎えるとは思わなかった。卒業生からの1年間の感想で、自然エネルギーの最後の講義中に地震が起きて、その後原発が爆発してエネルギー問題が浮き彫りになったことは、自分自身が時代のターニングポイントにいたと感じるとコメントがあった。私自身も人生の重要なターニングポイントであったと感じている。

私たちは震災によって電気がない何とできないという生きる上で貴重な経験をした。あの経験を未来の生活へ活かすために、「自然エネルギーを使わなくてはならない!」と思うレベルまで人々の意識を変えていきたい。震災以前からエネルギー教育や環境教育をしてきたが、実現性と人々に訴えかける方法を検討し、私たちが窓口をより広げて取り組む必要があると思う。太陽光パネルを被災地へ持って行っても、「太陽光パネルってこんなに使えるの?」と自然エネルギーの力を知らない人ばかりだった。話を聞くと震災以前は全くエネルギーについて関心がなかったし、ましてやこんな事故が起きるとは想像すらできなかったと、多くの人が口を揃える。我々はこれまで自然エネルギーで社会をシフトしようと動いてきたのに、ちっとも変わっていなかった。もっと社会が気づいていれば、原発事故にももう少し違った対応ができたかもしれない。一般市民が自然エネルギーについて考えるよう訴えかけられなかったことは、やり方も含め反省すべきだと思った。

これから一般の方々はどう訴えるかを模索していきたい。例えば、皆の目に触れる場所に自然エネルギーを設置して、実感できる場や機会を提供しなければならない。自然エネルギーが良いものと頭では分かっているにもかかわらず実際に周りに太陽光パネルがなければ、その本当の良さは想像すらできな



撮影：2011.6.4 石巻市大宮神社 地域の避難所

いし、自分たちの未来に取り入れる考えは当然生まれない。これまでのように講座も大事だが、もっと見て触れて使って「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。見る、触る体験の場を仕掛けていくのは自分の役割だと感じている。先々週、コンサートのサブステージの電源を10時から21時まで100%太陽光エネルギー

でまかなった。コンサートなので集客があり、エネルギーや環境に興味のない人まで「太陽光電池って意外と使える！」と体感してもらえるチャンスだ。そうした体験をした人は他の場所で誰かに話してくれるかもしれない。今までの視点とは違った、自然エネルギーを身近に感じられる場を作っていきたい。

行政

高畠町

避難者に寄り添いたい。他人事をいかに自分事にするかが大切。

村上 奈美子 高畠町生活環境課

取材日 2012.10.05

高畠町は山形県置賜地方の東部に位置する。奥羽の山なみ深くに源流をもつ屋代川、和田川の扇状地に拓けた稔り豊かな美しい町。地味豊かな土地で稲作の他、さくらんぼ、ぶどう、りんご、ラ・フランスなどの果物も生産されている。東日本大震災で大きな被害はなかったものの、被災地から多くの避難者を受け入れ、宮城県からの火葬の受け入れを行なった。

3月11日 14時46分

役所で仕事中に「あ、地震だ」と気づいた。最初はそれほど大きくないと思ったが、次第に揺れが大きくなった。ガタガタと細かい揺れではなく、ゆらゆらと大きい揺れだ。書類や物は落ちないが、なかなか終わらない。おそらく2～3分だが、とても長く感じた。すぐに停電になったので一斉放送などの避難の呼びかけはなかったが、庁舎は築40年で崩れる危険性があると各自が判断して外へ避難した。外に出て庁舎を見ると、今にも崩れそうだ。電線はぐわんぐわんと波打ち、駐車場の車はトランポリンに乗っているかのように飛び上がっていた。何度も余震がきたので、庁舎に出たり入ったりした。並大抵の地震ではないと思ったが、いったい何が起きたのか分からなかった。停電でテレビは映らず情報が入らない。携帯電話のワンセグで宮城県沖が震源だとうやく分かったが、他の県の状況は全く分からなかった。

15時半過ぎ、大きな揺れが落ち着いたので、各公共施設など防災担当地区の被害状況を確認した。生活環境課は火葬場も担当施設だ。電気が付かないので、火葬場は真っ暗だった。慌てていたため懐中電灯を持ってくるのを忘れてしまった。火葬場にはろうそくがたくさんあるので、ろうそくを使って被害の状況を確認した。

余震がきてもすぐに逃げられるように役所の隣の中央公民館1階に対策本部を設置した。高畠町は建設クラブと防災協定を結んでいるため、発電機を持って駆け付けてくれて、情報収集等に必要



電力を確保できた。役所に戻ると、職員は情報収集で混乱していた。このままでは職員も帰れそうにない。地震後すぐに設置された災害対策本部に炊き出しの必要性を確認し、できる職員が自主的に炊き出しにまわった。緊急時の割り当てで住民対応窓口の課が炊き出し担当だったが、明確な指示がでなかったため、機能せず自主的に残った職員で対応することになった。生活環境課では講座などで大人数の試食づくりを行なった経験があるので段取りは分かる。まずは米屋や個人商店を回って、炊き出し用の食料をかき集めた。ホームセンターやスーパーマーケットは水やコンロを買う人で混雑し、商品はあっという間に売り切れた。スーパーマーケットなどの混雑を予想し、個人商店に買い物に来た人も見受けられた。

役所に戻り、キャンドルづくり用にストックしておいたろうそくを災害対策本部や調理室に用意した。ろうそくの明かりを頼りにおにぎりを握った。18時半には東北電力との協定で役所周辺の電気が優先的に復旧した。また、救急車両や公用車を優先にガソリンを入れてもらい、夕方には全車両が満タンになった。次第に町の被害の情報が入り始めたが、これからまだ余震が続くのか、いったいどれほどの被害規模になるのか見当もつかなかった。

21時過ぎになってようやく対応が落ち着き、災害対策本部にあったテレビにふと目をやった。仙台平野を津波が遡上している映像が流れていた。最初は何の映像が全く分からなかった。夕方にはテレビが見られるようになっていたそうだが、炊き出しの段取りや油漏れの応急処置、一人暮らしで不安なお年寄りや携帯電話を充電したい住民の対応に追われ、テレビを見る余裕はなかったのだ。映像を見つめて、やっと津波が田んぼの方まで来ている映像だと理解した。「えーっ！こんなに飲みこまっちゃうな？！（飲みこまれていたの?!）」その映像を見て驚き、大変なことが起きていたのだと分かった。

ライフラインが止まって

高島町のライフラインの復旧は早かった。自宅は停電しなかったし、LPガスのため調理にも困らなかった。大きいボンベなのですぐなくなる心配はない。そうした緊急時にLPガスは強いなと実感した。地震以降、東京にいる息子と連絡が取れなかったのも、とても心配した。災害伝言ダイヤルはつながらず、安否を確認できなかった。携帯電話をかけ続け、地震の翌日に電話がつながり、ようやく無事を確認できた。

停電が続いている地域もあったが役所の近くは回復していたし、家屋倒壊など大きな被害はなかった。よそはすごいことになっているが、町の被害は最小限だと感じていた。

一番混乱したのはガソリンが手に入らないことだ。地震の次の日にはガソリンスタンドに行列ができた。1週間ほどは来ないだろうと思ったが、大部分が仙台から流通しており、ルートが新潟に切り替わるまで不足した。山形県は新潟県まで2時間ほどなので、ガソリンを買いに行く人もいた。自家用車は偶然、地震の2日前に給油したばかりだったのであまり困らなかったが、職員は数人で乗り合わせて出勤してガソリンの延命を図った。3月末からガソリン不足でゴミ収集車が走れず、可燃ごみの回収だけになった。通常に戻ったのは4月初旬だ。

それまで物がどこから来ているか意識したことは



避難者交流 パステル音楽隊

なかった。震災があって初めて、ガソリンが仙台を經由して流通していること、町内は3か所の変電所から電気が来ていることが分かった。これまで情報はあったのだろうが、仙台が止まると高島町まで全て止まってしまうことを実感した。

火葬の受け入れ

被災地から火葬の申込みが来ることが予想されるので、どのくらい受入が可能か県から問い合わせがあった。燃料（灯油）も限られているし、古い火葬炉が2炉しかないのも、午前中は町民優先、午後は被災者優先で対応した。

県が火葬場の連絡先一覧を出したのだが、こんなに混乱するとは想像できなかった。被災者からの電話予約を生活環境課の係で受け付けた。宮城県の山元町からの依頼が多かった。初めて受けた電話はすごく淡々とした声で、悲しみを受け入れられる余裕がないように感じた。普通はそうした場面では悲しみ打ちひしがれて涙声になったりするものだと思っていたが、とにかく目の前のことをしなければと混乱していて、悲しいという感情がまだ働いていないのかなと思った。電話を受けているこちらが涙を流してしまった。報道で死者・行方不明者数何万何千人と流れていても漠然としたイメージでしかなかったが、1人ひとりの命の積み上げでそうなっていることを実感し、とても辛かった。電話を受けるたびに感情移入していたらやっていけないのは分かっているが、悲しかった。子どもを亡くされた方の場合には特に切なかった。自分がもし、子どもに先立たれたらと想像すると本当に心が痛い。淡々とこなさなければならぬ場面もあるだろうが仕事だと言って割り切れないし、1人の人間として被災した方々に寄り添いたかった。だんだんと気仙沼や石巻からも問い合わせが来るようになり、4月初旬まで受け入れが続いた。

県外からの避難者の受け入れ

3月12日（土）に福島第一原子力発電所1号機で水素爆発が起きた時は、高島町も避難区域に入るかと思った。災害対策本部の職員にもしも全町避難になったらどうするかと話しても、そんなことにはならないという様子で全然考えていなかった。かなり情報が錯綜していたので、役所としては全く動けなかった。

個人で「六ヶ所村ラプソディー」の自主上映会に協力したことがある。六ヶ所村の再処理工場の仕組みを知らなければ、一般の方にドキュメンタリー映画は分かってもらえない。その時に自分も原子力発電について勉強したので原発の恐ろしさは分かっているつもりだったが、今回の原発事故で原子力発電所が高島町からそう離れていないところにあるのだと知った。

避難所は3月13日に閉鎖し、14日には片づけをする予定だった。ところが、月曜日の朝、役所が始まる前から郡山や南相馬から避難者が押し寄せた。高島町の被害は少なく通常業務に戻る予定で、職員はすっかり日常に戻ったと思っていた。すぐに避難所を再開したが、対応に追われ混乱した。防災計画の中では、町民が被災した場合の避難所として捉えていたから、他市町村から受け入れることはまったく想定していなかった。これが混乱やとまどいの原因だったと思う。

公民館のロビーに机を並べ、武道館に畳を敷いて寝る場所を準備した。避難所は1か所では足りなくなり、4か所設置した。その日のうちに温かいご飯を提供できたことはよかったと思う。

住民に食料の提供を呼びかけると米がたくさん集まった。越冬野菜や食品加工業者から食材の提供があり、田舎のほうが災害には強いと感じた。会社でまとまって避難してきたグループがあったので、避難所の立ち上げはとてもスムーズだった。混乱の中にありながら、会社の中のリーダーがリーダーシップをとって、そこに一般の方が一緒にになり、炊き出しも「自分たちでできることは自分たちでやります」とおんぶに抱っこではなかった。しかし、別の避難所では不安を抱える人が多い中で、「自立して運営してください」と急をお願いされても難しいだろうと感じたので、給食の調理師に炊き出しに協力してもらい、「本職の人がくっから、給食のおばちゃんの指示通り野菜切ってもらえばいいよ」と言って、だんだんと運営を手伝ってもらえるようにした。最初は地元のボランティアを頼んだが、次第に自分たちで運営を始め、支援は食材の調達だけになった。こちらも少しずつ自立してもらえるように、後片付けの時に「だんだん皆さんでやるようにしてくださいね」とお願いした。

雪が降っていて外で子どもを遊ばせることができず、「子どもがうるさいって怒られた」と泣きながら相談に来るお母さんもいた。近くの小学校の体育館を開放してもらい、遊びのボランティアを頼んだ。

避難者は着の身着のまま避難して来るのかと思ったが、そんなことはなく、必要最小限の身の回りのものを持参された方が多かった。ライフラインが止まっているので、しばらく避難しようと思って来た人もいた。避難して来た人の状況に合わせて、対応できたと思うが、すべて希望を受け入れられた訳ではない。5月の連休明けに避難者が旅館などに移動し、避難所は閉鎖した。

ボランティアのコーディネート

住民から「何かされっことないか？（何かできることはないか？）」とボランティアの問い合わせがきたが、最初は受入体制が整わず要望に応えることができなかった。

社会福祉協議会のボランティアセンターに集約し、そこからボランティアを派遣することにした。最初はコーディネートが上手く機能しなかった。だんだんと体制が整い、町県内の人がボランティアで来るようになった。高校が休みだったので、高校生も来た。職員自身が何をしたら良いかわからない時に、ボランティアに説明し指示をすることは難しく、振り分けが大変だった。ボランティアには物品の仕分けや除雪をお願いしたが、プライバシーに関わる仕事はボランティアには頼めない。どの辺りまでボランティアに頼んでいいのか分からなかった。避難所の運営が軌道に乗ってからは、避難所の職員2名体制を1名体制にしようという案はあったが、被災していないので職員だけでも十分に人手がありボランティアに全てをまかせようという発想はなかった。



避難者交流 子どもと一緒にランチ

エネルギーの在り方

大震災を経て、原子力発電がリスクを兼ね備えた物だと一般の人でも分かったと思う。これまでは、原発反対というより自然エネルギーを普及させようと言って、原発の存在そのものには触れないようにしていたところがあったが、多くの犠牲を出して、少しでも早く止めなければならぬと感じた。あの悲劇からたった1年半しか経っていないのに、目先の利益だけを考えて原発を動かそうとしていることが悲しい。昨年、私たちは節電をして乗り切ることができた。もちろん昨年の取り組みで節電が定着した部分はある。しかし、喉元過ぎれば熱さを忘れるということなのか。電気に不自由するならば原発も仕方がない風潮になっている気がする。なぜ制限令をかけないと人々は節電をできないのか。

東北は福島県に近いのでまだ原発の危険性に対する意識が高いが、西日本の方は温度差があるように思う。東日本大震災や原発事故のことをどれだけ覚えてもらえるのだろうと不安になる。高島町は被害がほとんどなかったのに、風化が心配だ。

火力発電に依存している以上、気候変動という地球規模の深刻な問題もあるのに、なぜ企業活動が停滞する、電気が不足しているという側面だけが強調されるのか。この異常気象に直面しても気づかないのか。電気が不足しているから再稼働、地球温暖化防止のためには原発という発想は疑問を感じる。地球温暖化防止の以前の問題だと思う。福島第一原発の事故はどれだけの影響があるのかは誰も分からず、専門家の意見も分かれている。福島市内から自主的に母子避難してきている方がいるが、子どものことを考えたらリスクは回避した方がよいと思う。核と人類は共生できない。原発のある地域には原発がなくても自立し生活が成り立つように別の産業を興すなど雇用対策が必要だ。

もっと私たちにできることはあるはずだ。私たちは今の暮らしの中で、便利・快適を求めすぎではないか、本当に必要なエネルギーとはどの程度なのかを考え直さねばならないと思う。

寄り添うことができたのか

高島町はこれまで地震などの自然災害が少ない地域だったので、こうした震災を誰も経験したことがなかった。役所では災害発生緊急時の割り当てはあるが、今回の緊急時には機能しなかった。職員が自分のできること、やるべきことを自ら判断して動く必要があると感じた。そうしないと現場で判断するのに時間がかかってしまう。住民を守るために、行政職員は能力を高めねばならない。災害の起きる曜日、時間帯、季節によってもさま



避難者交流 地元ケーブルテレビ収録

ざまな違いがあると思う。もしも休日だったら行政職員はすぐには対応できなかっただろう。日頃からさまざまな想定をしなければならぬと感じた。

また、避難者にはさまざまな事情がある。障がいを抱えている方、子どもを心配する母親たち。そうした方を連れている避難者がワンフロアの避難所で過ごすことは、どれだけ大変だろう。自分がもしも避難者の立場だったら、きっとものすごく不安だろうなと思った。個別に対応できる場所もなく、施設も設備がなく、何とかしてあげたいがどうすることもできなかった。せめて食べる物だけは温かいものを提供したいと思った。ある時、避難所で小学生が「ごはんおいしい！」と言っておかわりをし、母親が「家では好き嫌いが多くて、おかわりなんてしたことないのに！」と驚いていた。そうした光景が活動の救いとなり、今でも忘れられない。「お世話になりました」と挨拶をして避難所から帰っていく姿も忘れられない。

山形県では自主避難者を含めて家賃補助をしているが、7月、今後も避難を続けるかどうかの調査をきっかけに、また少しずつ除染が進んでいることもあり、帰られる避難者もいる。

最初は県外からの避難者数は約500人だったが、現在は約300人でほとんどが母子避難だ（2012年10月5日現在）。子どもの保育園が見つかったり、環境に慣れてきたりしたことで落ち着き、短時間のパートをやりたいという問い合わせもある。これから自立して暮らしていこうという時、雇用は重要な課題だ。避難者はさまざまな事情を抱え、ニーズは多様化しているので本当に困っている方々に支援の手が届いているのか、私たちは常に問いかけねばならないと感じている。

これまでも避難者に本当に寄り添うことができたのか疑問を感じる。すべての要望を受け入れることはできないが、避難所を設置するだけで、果たして本当に心情的に寄り添うことができたのだろうか。他人事をいかに自分事にできるかが大切なのではないかと感じている。

大学

私たちは挑戦していかなければならない

上山市

村松 真 東北創生研究所

取材日 2012.10.05

山形大学准教授・東北創生研究所コーディネーター。専門は地域計画論、農業経済学、資源環境経済学、地域づくり、まちづくりである。震災後、山形大学の学生たちとともに「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」を立ち上げ、だんだんと移り変わるニーズや課題の中、宮城県東松島市と石巻市で復興支援活動を行なった。

3月11日 14時46分

次の日の水力発電の研修会の準備を終えて、西川町から車で移動しており、県職員と学生2名が同乗していた。西川町役場の近くで、突然地震が起きた。車に乗っていても大きい揺れだと分かり、すぐに停車するよう指示をした。1978年、仙台で学生生活を送っていて、宮城県沖地震を経験した。かなり大きい揺れだったので、その地震を思い出した。すぐにまた宮城県沖地震が来たのだと直感した。電柱も看板もぐらぐら揺れていて、落ちてきそうで危ない。揺れている時間がかなり長かったので、被害は大きいだろうと感じた。車には宮城県出身の学生が乗っていたので、「宮城県沖地震だからご家族に連絡しなさい」と指示した。その時は電話がつながっていたようだが、すぐに停電で電話はつながらなくなった。車のガソリンがなくなってしまったので、その地点から一番近い県職員のお宅にお邪魔した。

その後、車を乗り換えて大学の研究室まで県職員に送ってもらった。信号機が消えて、道路は渋滞していた。県の職員も総合支庁に戻っていった。研究室はほとんど被害がなく、無事だった。家族や家を確認するようと言って学生を帰宅させ、私は車で宿舎に戻り、姉の安否を確認した。山形は大きな被害がなかったと思う。

夕方、テレビで津波の被害を知った。映像を初めて見た時は実感がなく、信じられなかった。映画を見ているよう、もしくはスマトラ沖地震のように遠い国の出来事だと思った。まさか日本で起きていることだとは信じられない。すぐには受け入れることができなかった。その日の夜は姉の家で過ごした。停電していたので懐中電灯と手動でつくストーブを使った。ガスは回復して使えた。2日目には電気も通り、普段通りの生活ができるようになった。



「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」結成

石巻市出身の学生がいたので、連絡がつくまで何日間か研究室で待機させた。交通はマヒしているので行くことはできないし、学生は心配だっただろうが慌てて動いても何もできない。研究室の電話で石巻市の家族に電話をかけ続けた。4～5日たってようやく連絡がつき、地震から1週間後、学生は地元へ帰省した。その学生は家族や自宅が心配で落ち着いていられなかっただろう。そうした学生の様子を見て、他の学生たちが何かしなければならぬと思うようになっていた。

10日間ほど研究室で5～6人の学生と一緒に過ごした。幸い研究室にはカップラーメンやお米、炊飯器、カセットコンロなどがある。一人暮らしの学生には夜はなるべくグループになって友達と過ごすよう指示を出した。

3月末、大学の人文学部の副学部長から震災復興支援をしなければならないねと相談があった。そこで関係ある先生方4～5人と代表の学生2～3人が今後どうするかについて話し合った。その日のうちに「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」を結成した。次の日、山形市の総合スポーツセンターには被災地の避難者が大勢いたので情報収集に行った。ある程度、道路が確保さ

れ、情報が入ってきてからでなければ動き出せない。泊まることも想定していたが泊まる場所がないことは分かっていたので、車に寝泊まりしようと考えていた。被災地では何もない。学生たちの安全確保は最優先だ。ボランティアに行く時は、本気で行かなければならない。行ってから「何をすればいいの？」というボランティアは地元の方を困らせるだけだ。「ボランティアのボランティアはいないぞ」と学生に言い聞かせた。被災地ではマンパワーが必要だと考えたので、自分たちが移動できる手段と食料を用意した。また、瓦礫撤去などの作業が想定されたので、雨具、長靴、軍手、帽子などを準備した。

初めて被災地を訪れて

山形大学人文学部は蔵王の青年部と連携協定を結んでいる。4月3日、蔵王の青年部と一緒に初めて被災地を訪れた。総勢21名。場所は石巻市の渡波地区だ。皆ショックを受け、言葉が出ない。どう表現して良いのか分からなかった。車が1台通れるほどの道が確保され、その両サイドには瓦礫が積み上げられている状態だった。渡波駅にも人が泊まっていて、近くにトイレがあったがとても使用できる状態ではなかった。状況の把握とできることを手伝おうと思った。情報を得るために時間を見つけて写真を撮影した。地震からはかなり経過していたので食料に困っているだろうと思い、炊き出しを行なった。また、瓦礫撤去の支援では私たちは人力なので床上浸水したくらいの家しか支援に入れまいだろうと判断した。片づけを始めている住民がいたので、何グループかに分かれて「何か手伝うことがある方は申し出てください！」と呼びかけながら道路を歩いた。ピアノやタンスを運び出したり、畳をはいたりする仕事が尽きることがないほどあった。被災地に入ったら「今回の震災を受けてどうだったか」と被災者に質問しないことを徹底した。学生も企業も被災者の方々と交流したかったようだが、被災された方は肉親を亡くしているなどさまざまな事情を抱えている。一緒に作業をする中でおのずと話してくれるようになる。後で学生たちに聞いてみると、苦しいことも大変だったこともすべて話してくれたという。一緒に作業をするだけで、質問なんかする必要はないのだ。アンケートや調査などの研究は後からでもできる。黙って震災復興を手伝うことが先決だと思った。

ニーズの移り変わりと課題

最初は炊き出しや瓦礫撤去だったニーズはだんだんと移り変わってきている。作業の記録を見ると

情報収集から被災地・避難所訪問、炊き出し、被災地家屋の復旧作業、物資提供支援、仮設住宅への物資配布、自転車・バイクの収集と提供、お茶のみクラブ、悪臭対策、放射線調査、除菌水精製装置取り付け、公園での音楽クラブ、ミーティング、復興状況報告会などさまざまな形で移り変わっている。企業を巻き込むことで多岐に渡る活動を行なうことができた。お茶のみクラブには山形のお菓子を持って行っただが、当然資金が必要なので、連携している企業が出資してくれた。活動を見て復興支援に役立ててほしいと寄付をしてくださるところもあった。山形大学、学生と民間企業が協働して行なった「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」の活動で、被災地へ総額1,800万円の寄付をした。

1家庭でもいいから、個々のレベルで支援をしなければならないと思っている。ある程度、個人の生活に見通しが立たなければ、地域づくりを進めることはできない。

学生と企業の協働のモデル

この支援活動を通して学者の事情や公務員の事情、民間が手助けしたいのにできない状況などさまざまな構図が見えてきた。学者は組織的、体系的に活動をすべきなどと言うが、最初からそうした体制は作れない。マンパワーが充分になった上で、次第にできてくるものだからだ。最初から組織的にはできないし、皆がそれぞれゆかりのあるところへ支援に入るしかない。誰も経験したことがないので、最初は支援のばらつきができるは仕方のないことだ。ある程度片づいて落ち着いたところで見えてくるものがある。

これまで述べ426人の学生がこのプロジェクトに参加している。大学なので教育の一環でもあるのだが、学生たちは多くのことを学んだと思う。個人で民間企業が被災地に入ると地元の人に怪しいと思われてしまうことがあるが、このプロジェクトの支援企業になることで民間企業の社会貢献も私たちのボランティアも力を合わせて一緒にやることができる。現地情報を分かっている地元の学生や卒業生もメンバーになった。学生は労力があるが資金がない、民間企業は労力も資金もあるが地元とのつながりがいい。これをマッチングさせた。「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」は、学生と民間企業の協働モデルになると思っている。

震災を振り返って

一極集中の社会の弊害は今回の震災で良く分かった。物資は仙台にすべて集まってから山形に来て

いて、仙台がストップしてしまうと経由している県の流通がすべて止まってしまう。一極集中は良い側面もあるが、その周辺を衰えさせる。この機会に自立分散型の社会を作らなければならないと思う。自立分散型であるためには地域社会システム、地域経済システムや地域エネルギーがセットでなければならない。極端な自立分散型は自給自足の社会だ。それは現代ではできないので、ある程度自立分散型ができていて、比較優位の原理で地域間が輸出輸入しながら経済全体が発展するような現代型の仕組みができればいいと思う。エネルギーは薪、石炭、石油、原子力と変遷してきた。まずはエネルギー革命を起こさなければならない。

多雪地帯では水が安定的に供給できるので、現在、小規模の水力発電を進めている。水の状況を注意して見ることにより、周りの環境が分かる。水は第一次産業には欠かせないし、水の動きを注意して見ながら、エネルギーを取ることができれば効

率的だろう。私たちは挑戦していかなければならないと思う。

今回の震災は、自然を無視してはならないと伝えているのだと思う。現代人は忙しすぎる。人間は何に生かされているのか。いくら高層ビルが立ち並んでも、周りにいろいろな自然があることで食べ物や水、気候が保たれている。そうして生きていることを私たちは忘れてはいけない。自然を意識して人間の営みをすべきなのだとメッセージが込められている気がする。私たち学者がどんなに分厚い資料をまとめて残したとしても、後世には伝わらないだろう。どんどん風化して忘れ去られてしまうかもしれないが、津波がここまで来たという痕跡を残すことはできる。現地に災害の痕跡を表す石碑を立てたり、モチーフを設定したり簡単に伝承する方法が必要だと思う。古いものに新しい何かを加えて、現代の伝承として後世に伝える術を模索しなければならない。



撮影：2011.7.24 南相馬市原町二中避難所
第2回ありがとう祭りin火の祭り「願と絆」（つながろう南相馬！提供）



宮城県山元町 仮設住宅団地の駐車場（ソーラーワールド株式会社提供）



撮影：2012.3.12 山形避難者支援団体意見交換会
（NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル提供）



支援者の集い（NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル提供）

任意団体 福島のこれからの 10年、20年、30年後に向けた動きを。

3.11あの時
P74 Report. 35の続きです

いわき市

吉田 恵美子 いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター

取材日 2012.06.26

いわき市社会福祉協議会、特定非営利活動法人ザ・ピープル、いわき地域活性プロジェクト MUSUBUが参加団体となり、小名浜地区内の災害被災者に対する生活復興支援を行なっている。小名浜のショッピングモール「リスポ」に「小名浜地区交流サロン」を開設し、イベントや各種教室、民生委員の方によるよろず相談なども開催している。

お母さんたちの雇用創出 プロジェクトのその後

「母さんのお弁当」プロジェクトは、2011年6月から3月末までザ・ピープルが助成金を利用して運営し、2012年4月以降の自立を目指していた。しかし、自営での継続は難しかった。昨年6月時点では、私たちが認識する地域の最重要課題として、津波被災者の雇用問題を掲げていた。だが、現在ではその認識を改めている。いわきが抱えている地域の課題は、被災者のための雇用の不足だけではない。28,000人が双葉郡からいわきに避難していることで、コミュニティ内には様々な問題が生まれつつある。また、一次産業は大きな打撃を受けているし、外からどう人を呼び込むかという点も悩ましい問題だ。

自分たちが関わっていかなければならない課題は、あの時点(2011年6月)から比べて明確になった。そしておさえるべきポイントが最初の頃とは違ってきていることも分かった。お弁当屋さんの維持のために自分たちの体力を注入するのではなく、本来私たちがやらなければならない事業にシフトしていくことを決め、助成期間が終わった時点でこのプロジェクトを終了することにした。

ボランティアセンターの課題

課題として取り組んでいるのが「コミュニティ」の部分だ。小名浜のショッピングモール「リスポ」の一角に「小名浜地区交流サロン」を開設した。誰でも、どんな人でも来てOK。本を読んだり、お子さんを遊ばせたり、手芸教室に参加したり、お茶を飲んだり、誰でもが買い物ついでに気軽に集まれる、そんな場所を目指している。気軽に集まって一息つける機会が、誰にでもオープンに設けられていることが大事だと考えている。いわき市内の現状として、仮設住宅より借り上げ住宅に入居されている被災者・避難者の方が多いので、こうした方たちの行く場所、集まれる場所としてこのサロンの設置・運営を行なっている。



また、地区の社会福祉協議会、包括支援センターと協力し合いながら、毎月小名浜地区で1回、泉地区で1回、いわき市民の被災者、特に見なし仮設入居者に対してサロンを開いている。ちょっとした音楽や、マッサージなどを楽しみながらコミュニケーションの場づくりを行なっている。更に、県保健福祉部相双地区担当いわき駐在の保健師さんたちが、双葉8町村からの避難者にとって交流の場を設けることが難しいという悩みを持っていることが分かったので、今後は町ごとに呼びかけて、「小名浜地区交流サロン」を使って町の交流会の日を設けようと話が進んでいる。

いわきではいまだに仮設住宅が建設中だ。加須市に避難している双葉町民の50%が仮の町をいわきに持ちたいと思っているとの調査結果が発表されていたが、会津や県外に避難した人たちもいわきに帰りたい、いわきまでは行きたいという思いがあると聞いている。受け入れのための住宅は足りず、用地さえあれば仮設住宅をもっと建設したい意向を持っているという。迎え入れている側としては、去年の事故直後の時期とは違った受け止め方を示す人も現われてきている。そこに難しさがあると思う。今回の震災以降の経過の中で、色々な立場の違い、思いの違いがコミュニティの中に表面化してきている。支援の立場にいる私たちも、相手によって顔を伺い、相手の立場によって話す内容が違って来ざるを得ない。これが現実だ。

サロンを運営しているスタッフは若い人たちが中心のため、基本的に重い悩み相談は受けず、民生委員の方に入っていただき対応してもらっている。NPOが単独でできることには限界があるが、様々な主体と連携することによって、できることは大きく広がっていくと考えている。NPOとしての独自性に固執することより、困っている人達にとって「助けて下さい」と言いやすかったり、私たちが他のもっと力になる人たちと手をつなぎやすかったり、そういう立ち位置でありたいと願っている。

いわきオーガニックコットンプロジェクトのその後

15箇所、15反ぐらいのところで栽培しているのだが、なかなか生育が進まず雑草との戦いに明け暮れている。コットンプロジェクトは一次産業の再生も念頭にあるのだが、有機農法でのコットン栽培は雑草を抜くのも収穫もすべて手作業のため、たくさんの人手が必要となる。その部分に孤独感を深めている避難者の方、地域の方、首都圏からのボランティア、いろいろな立場の方たちが手を差し伸べることによって交流が生まれて、コミュニティの再生につながっていくような、農業だけではなく人々の心にも何か動きを生み出すようなプロジェクトにしたいと思っている。

ボランティアは首都圏から毎週50人ぐらい来ている。栽培地によっては仮設の方々や地域の方々にも参加いただいている。今年は試験栽培の年。まずは順調に生育してくれることを願っている。収穫の時期は11月。最初に収穫した綿花からは、いわきのオーガニックコットン100%で何かシンボリックなものを作りたいと計画 중이다。

農家の方たちは、自分たちは酷いダメージを与えられた上に孤立無援だと感じている。コットンプロジェクトは、その思いが少しでも和らげばいいという思いで始めた。巨万の富が築けるとも思っていないし、いわきオリジナルのオーガニックコットンブランドを立ち上げると明言しているが、ビジネスとして成立するかなどまだ見通しが立っていない。でも、今まで農業に関係のなかった本会のような団体でも、こういう取り組みがあるから一緒にやりましょうと提案して動き出すことが農家の方の目に留まり、孤立しているわけではないのだと感じてもらえたら、それだけでもいいと思っている。

市内の中山間地にある遠野町には、首都圏からの援農ボランティアが度々訪れている。農作業のお礼にと、農家の方が毎回毎回震災後の体験を語り、地域の方々がお昼ご飯を作ってごちそうする。それを楽しみにまた首都圏からボランティアに来て

くれるリピーターも多い。こうした形を市内各所で作り出せたらと思う。

これから

福島の「今後」はここ3年の話ではなく、10年、20年、30年先のことを指す。単独のNPOで被災者に向き合う事業を継続していくには限界があると思う。つい先日、いわき市内で被災者支援に関わっているNPOや社協、いろいろな主体が集まって「3.11被災者を支えるいわき連絡協議会」を立ち上げた。大きな組織を作って被災者と長期的に向き合う仕組みをきちんと作っていくことが、いわきの今後を考える時に必要だろうと思っている。これから長期戦をするためにはきちんとした核が必要だ。いわきでのこの体験を外から人を招いて学んでもらう、スタディツアーの受け入れを有料でできるような形も考えていきたいと思っている。

直近の「これから」で言えば、私たちの将来は水俣にひとつの答えがあると思っている。水俣に学ばせていただいている。コミュニティの中にチソの関係者、患者、行政、いろいろな立場の人がいた。あの町の中で何もしゃべれない時間が40年あった。これではだめだともやい直しが始まって、今では環境に特化した町として再興を果たしている。あの流れを理想とし、私たちはもっと時間を短縮して追いかけていきたい。

この夏には福島のことを思って水俣から発したメッセージを集めた展示会や、水俣病の資料館で語り部をされている当事者の方に来ていただき「語る」ということを伝えてもらう企画を行ないながら、10年、20年、30年後に向けた動きを作っている。その世代を担う人を育てなければならない。熊本のNPOと連携して夏休みに中高生をいわきから水俣へ派遣し、水俣の事を学び保養もして帰ってきてもらう企画も進めている。



撮影：2012.11.4 いわき市遠野町為朝集落オーガニックコットン栽培地
収穫祭の様子

任意団体 子どもたちに海で遊んで欲しい。

いわき市

橋本 孝一 いわき地域環境科学会

取材日 2012.08.02

環境問題に関心を持つ人々の情報交換等を通して会員相互の学識の向上、環境の質の向上への寄与を目的として設立。大震災後は、津波被害の軽減効果があった海岸林の調査や海岸域の放射線量調査を行ない、海岸環境の安全性を確認する活動を進め、災害に強いまちづくりを目指し、海岸での環境学習やレクリエーション復活のための事業を開始した。

3月11日 14時46分

車で湯本駅近くのコンビニに寄ろうかと思った時に、大きな揺れが来た。はじめは車がパンクしたのか、あるいは道路のせいかと思った。コンビニではみんなが外に出ていた。車から降りようとしたが揺れのせいで降りられなかった。用事があったのである程度落ち着いてから予定通り目的地に向かった。揺れが強いという実感はあったが、これほどまでの被害になるとは予想もしておらず、訪問先で「揺れが凄かったね」とスタッフの方と話していた。

家に帰ると本棚はすべて倒れていて、これまでにない規模の地震だなと思った。停電にはならなかったのでラジオやテレビで被害の凄さを知った。比較的海岸に近い四倉に嫁いでいた娘から、家が床上浸水になり、こたつの上のものがかろうじて流されないくらいまで水がきたのだと聞いた。子どもも生まれたばかりで、大変な思いで避難をしたようだ。いわきではこれまで津波が来ても数十cm程度で、それ以上の津波が来ることは想像もしていなかった。

4月になってから、所属しているいわき地域環境科学会のスタッフと現地を見に行った。橋脚と陸地の段差、地盤沈下、車が家に突っ込んでいる様子を目の当たりにした。一気に衝撃を受けたというより、被災の現場を見るにつれじわじわと事態の深刻さを実感していった。

被災の状況を確認して、記録にも残そうと仲間たちと話し合った。環境科学会では海岸で子どもたちに環境学習を行なっており、永崎海岸でごみの調査などを行なってきた。今後も継続できるのかという不安もあり海岸を調査して回った。いわきの場合、津波の高さが海岸林を超えるほどではなかった。そのため背後地の家が助かった。また、横川という川が防波堤のように受け皿となって被害を少なくしたこと、一方では防波堤が機能しなかったことなど、調査の中でいろいろなことが解ってきた。防波堤やテトラポットは景観上問題が多いと思っていたが、これらが津波の抑制効果



に役立ったようだ。

福島第一原発事故

まさかそんな大きな事故が起こり、自分の身に降りかかるとは思ってもいなかった。まわりでは避難している人がたくさんいると聞いたが、原発からの距離を考えるとそんなに急に避難をしなくてもよいのではと思い、普通に生活していた。遠方の親戚から「いつでもいいから避難して来たら」と言われたが、「大丈夫、心配しなくていいよ」といわきに居た。郡山に義兄がいたので、避難がてら3月14日から2泊した。後で知ったのだが、その頃はむしろ郡山の方が線量は高かったという。こうした情報をもっと早く伝えられていればよかったと思う。

いわきに戻った夜、まだガソリンが残っていたので町へ出てみると、ゴーストタウンのようになっていた。原発の怖さは目に見えないだけに、それぞれの思いで避難したのだろう。隣近所でも住民は1/3～1/4ほどしか残っていなかった。GW頃になるとようやく人が戻り始めた。放射能は目に見えない分、自分の判断に任される。親の立場からすると、赤ちゃんを守るために少しでも線量を減らしたいと思うのが親心だろう。

半年ほどが経過し、いわきの線量がある程度低い

ことが分かると、仮設へ移る方も増え、車が多くなり商店街の人通りも多くなってきた。一方で地場の産業、一次産業である漁業や農業をこれまで通り営むことができなくなり、漁師や農家の方たちは私たち以上に戸惑ったと思う。

海岸の放射能測定活動のきっかけ

これまで、私が所属している「いわき地域環境科学会」では、子どもたちを海や川へ連れて行き、観察会などを行なってきた。ところが放射性物質が海に流されたという報道があった。海岸が汚染されているかもしれない中で果たして安全に遊べるのか、いつになったら海岸で元気に遊べるのか。それを確認するためいわきの海岸の北から南までを調査して回った。放射線に関しては素人なので、最初は福島高専にあった線量計を借りて調査をした。

計測にあたっては専門家のお話を聞き、勉強会を行なって、地表面下60cmから70cm位の深さまでを10cm刻みで計測することにした。その結果、陸地に近い方は表面の線量が少し高めで、下層部はそれほど高くない。海岸寄りの地域では、上層部は低い下層部は少し高い。波が来ず植物が繁茂しているところは線量が低い、といった傾向を示した。陸上の粘土質の土と海岸の環境では違うことが分かったので、測定場所を工夫した。福島高専の先生方にも基礎的なデータの採取に協力をいただいた。現場ではシーベルト単位で計測するだけであるのに対し、採取した砂から放射能濃度（ベクレル単位）まで計測して信頼性のあるデータはある程度得られるようになった。

しかしながら団体内では値が持っている意味や、数値をそのまま発表することに戸惑いがあった。会の信用問題にも関わる。いろいろな専門家の意見を聞く中で、「それは貴重なデータだからぜひ発表したほうが良い」との後押しもあり、団体内でよく検討した結果、昨年の12月1日に記者発表をした。新聞報道もあり、市民の方々からの問い合わせもあった。その発表を見たのか、12月中旬になっていわき市観光物産課から、海水浴ができるかどうか調査をしてほしいと依頼が来た。いわき地域環境科学会のメンバーが中心になって立ち上げたNPO法人いわき環境研究室が受け皿となり、今年の1月から3月まで毎月、15海岸の調査を行なった。結果はいわき市のホームページに掲載されている。

この地域で今の時期に調査しておくことは、世界的にも貴重なデータになるであろうという自負もある。後々になって再調査に利用できるよう、採取した砂はタッパーに入れて保管している。解釈はどうあれ、できるだけ正確なデータを残してい

くことが団体の大きな使命の一つだと思っている。また、人によって安全だととらえる基準は違うが、なるべく早い時期に子どもたちに海で遊んで欲しいと思っているので、数値を公表することで判断するための材料を提供したいと考えている。

国の方針である追加被曝線量年間1ミリシーベルトを基準とした時の、12時間屋外にいた場合の被曝線量である0.23マイクロシーベルト。これが1つの値と思っている。海岸調査の結果、0.23より高いか低いかで色分けを行なったところ、ほとんどが0.23以下であった。少しオーバーしている場所は陸地寄りにある。市ではこのデータと、津波が来た時の避難場所が確保されているかなどを総合的に判断し、勿来海岸の海開きを決定しようだ。

正しく怖がる必要性

海岸自体は津波による被害はあるものの、元通りになれば活動ができと思っている。ただ海岸線が大分後退しているの、子どもたちを遊ばせる場は減っている。放射線に対して基礎的な知識を持って正しく怖がることは必要だが、必要以上に怖がらなければ海岸は安全だと思っている。

もうひとつの課題は、海岸林の活用だ。震災前から林間学校の復活を考えていた。津波に対する抑制効果もあり、海岸林は保全していかなければいけないものと思っている。普段から人手が入り利用していないと林は荒れてしまう。津波の後、海岸林の背後地では、松林に不法投棄されていたゴミが津波で流れてきて、家が壊されたという話を聞いた。松林の維持管理が十分に行き届いていなかったのだろう。海岸林の放射線は値が高めで、このままでは子どもたちを遊ばせることができない。現在は、子どもたちが海岸で屋外活動をし、維持管理にも参加できるような、なるべく線量の



再調査に利用できるよう保管している砂

低い遊べる場所をリストアップしている。松林の活用に向けて整備に取り組むことが今後我々が行なうべき活動であると考えている。

振り返って

いわき地域環境科学会には自然エネルギーワーキンググループがある。津波被害はある程度物理的に対応できるが、原発の場合は目に見えない。ホットスポットがいたる所にある。私個人の考えとしては、原発に依存しないような社会にしていけないといけないと思う。あるセミナーで話されていた「地産地消のエネルギー」は大きく賛同できる考えだ。この事故をひとつの契機にして、自分たちでエネルギーを作り出す、そのことを通じてエネルギーの在り方や、いかに無駄遣いをしていたかを反省することができる。大震災を風化させな

いよう、町づくりの在り方、環境に対する向き合い方も考えていかなければならない。

これまでエネルギーの問題を切実には考えていなかったように思う。行政に任せっぱなしにしてしまうと他人事になり、受け身になる。今は自分たちのエネルギーは自分たちで作る、自分たちの環境は自分たちで守るというスタンスに立てる状況にあると思う。忘れてはいけないというかけ声だけではなく、現実的な手段を手に入れて展開していく、その一つの有力な手段が自然エネルギーではないだろうか。身の丈に合ったエネルギーの利用を広めることで、今回の大震災・原発事故の教訓の風化も防げるだろう。それは今後のまちづくりの在り方、国民生活の在り方にまでつながっていくのではないだろうか。

NPO

放射能に対する緊張感が薄れていくことも危険。

福島市

清水 義広 阿部 浩美 NPO 法人市民放射能測定所

取材日 2012.08.02

CRMS 市民放射能測定所は、放射能防護のための活動をするNPO法人。食品の放射能測定と、ホールボディカウンターによる体内残留放射能測定を中心に、福島市で市民の手による自発的な活動をしている。市民からの測定依頼を受け付けるとともに、広く情報を共有するために測定したデータはWeb-site等で公開している。

3月11日 14時46分

【清水さん（写真右）】宮城県の丸森町に住んでいる。震災当日は選挙の事務を手伝っていて、選挙事務所の中で震災に遭った。そんなにびっくりはしなかったが、時間が長かったのでただ事ではないなと思った。すぐに停電になったため、車を持ってきてカーラジオをつけた。「仙台湾で津波の高さ10m」という放送を聞いたが想像できず、信じられなかった。

【阿部さん（写真左）】私は東京で仕事をしていた。東京でも揺れは凄かったし時間も長かった。すぐに仕事場近くの主婦たちが外へ飛び出してきた。ツイッターで仙台駅のホームの標識が落ちている画像を見て目を疑った。テレビで仙台空港に津波が押し寄せる映像や、逃げる車を追う津波の映像を見てとんでもないことが起こったのだと感じた。



福島第一原発事故

【清水さん】丸森でラジオを聞いて知った。うまく想像できなかった。福島なのでもう少し遠いだろうと思っていたが、後になって調べてみたら意外と近かった。逆に女川のことが報道されず、福

島の報道ばかりだったので女川は大丈夫なのかと心配していた。

【阿部さん】放射線・放射能に対する知識もなかった。実家は福島市にある。60kmも離れているから大丈夫、程度に思っていた。爆発事故が起こるまで原発のことは頭になく、津波によってあのような状況になるということは考えもしなかった。

測定所設立のきっかけ

【阿部さん】2011年5月1日に子どもたちを放射能から守る福島ネットワークを組織し、当時の文科大臣、政府三役へ20ミリシーベルト基準の撤回を求める活動から始めた。子どもたちを放射能から守る福島ネットワークのなかには情報共有班、保養班、放射線を測る測定班など4つの班がある。首都圏から福島の状態を見て、現理事長の丸森あや氏と現理事の岩田渉氏が測定班にボランティアで参加してくれた。線量計を持って来て、福島県内各地の空間放射線量を計測して歩いた。その後文科省へ行き、1ミリシーベルトへの基準見直し交渉を行なったが、その日のうちに結論は出なかった。だが、5月27日に文科省より「学校において、当面、年間1ミリシーベルト以下を目指す」という発表があった。

翌週の日曜日にチェンバ大町で食品測定イベントが行なわれた。フランスのCRIIRADというNGOから一番簡単な食品測定器を借り、持ち寄った食品をその場で測ると、ものすごい反響があった。空間を測るのも大事だが、消費者は今ある食べ物の値を知りたいのだと知り、食品を測る測定所が必要だと話し合った。こうした経緯で岩田渉氏、丸森あや氏、子どもたちを放射能から守る福島ネットワークの測定班が中心となり、2011年7月に「市民放射能測定所」が設立された。

測定を始めて

【阿部さん】実家も福島で農家をやっている。インターネット上の情報では暫定基準値500ベクレルと掲載されていたが、チェルノブイリの事例から考えると500を食べていいとは全く思えなかった。行政でも数値を測っているが、500ベクレルを超えたものについては出荷自粛を要請した等の報道はあっても、下回っている食品の具体的な数値は公表されなかった。検査依頼は、新米と果物の時期の11月から12月がピークだった。現在は落ち着いている。

【清水さん】依頼では、自家用に作ったが家族が食べてくれないので測って欲しいという依頼が多

かった。

【阿部さん】行政や農協の場合20ベクレルより下回ったら不検出となるが、それよりも下の数値を求められることもある。ここではもっと低い数値も出せるので、たとえば出荷するにあたってネット通販等で数値を聞かれた時のために測ってほしいとの依頼もあった。検査にあたっては1kg分が必要で、これを用意するのが大変なようだ。お米であれば検査後再利用できるが、切り刻ぎんでしまうとどうしようもない。また、家庭菜園で1kgはなかなか用意できないこともある。去年はそれでも検査したいという緊張感があったが、最近ではそうでもなくなってきた。

【清水さん】ホールボディカウンターは2011年10月から開始した。始めた当初は凄いい件数だったが、こちらも現在では落ち着いている。思ったより低い値で安心している。個人的な思いだが、結構内部被曝しているのではと予想したが、計測してみても値が低かったことは意外といえば意外だった。まだわからないことの方が多いので率直に安心とは言えない。初期被曝しても放射能は体から出ていく。ヨウ素なども半減期が短いので消える。今は体の中には入っていないが、事故当時はわからない。だが、今の段階ではほとんど検出されないことで、一定の安心はしてもらえると

【阿部さん】去年の秋は測定できるところが限られていたので福島全域や避難先からも計測に来たが、行政も同じサービスを始めたこともあり今年は福島市内からの方が多い。

活動に携わるきっかけ

【清水さん】2011年3月下旬には空間線量を測る機械を手に入れ、丸森の有機農業をやっていた



微量放射能測定装置

仲間と近所の線量を計測していた。最初の頃は怖くて福島に入れなかった。6月くらいから子どもたちを放射能から守る福島ネットワークのイベントの手伝いを行なうようになったのがきっかけだ。

【阿部さん】2011年8月に京都大学助教の小出裕章さんの講演会が福島であり、参加した。そこで再開した同級生が、子どもたちを放射能から守る福島ネットワークと市民放射能測定所で活動していて、彼に誘われたのがきっかけだ。

【清水さん】福島県内に測定所ができてきて、測定を依頼する人が減ってきている。緊張感が薄れていくことも危険なので、どう啓発していくかが課題だ。

震災を振り返って

【清水さん】事故当時の政府の原子力問題への対応について、マスコミも政府から言われたことを伝えるだけではなく、自分たちの基準で発言してもよかったと思う。結局、避難するか・しないか

は自分で決断しなければならない。政府をあてにせず、自分の身を守るのは自分の判断なのだ。市民の力で変えていかなければいけないと、デモも盛り上がっている。現在は放射能の問題は落ち着いているが、表面化するのは数年後だ。事故になった時、放射能に対する知識があるかないかで行動は大きく違ってくる。原発付近に住んでいる人は予め知識を得ておかないと、自分の身は守れない。事故が起きてから勉強しようとしても間に合わない。初期被曝をいかに避けるかが大事だ。

【阿部さん】これまで漠然とながら国を信用していなかったが、今回の震災で確信に変わった。自分の身は自分で守らなければならないというのは同感だ。一時東京に出ていたが、震災を機に自分の地元・故郷を再認識し、福島に戻ってきた。自分の生まれ育った場所がこういうことになり、地元への思い入れが再確認できた。都市の繁栄を維持するために存在している田舎。原発に代表されるように、受け入れなければならないことはあまりに割が合わな過ぎるのではないか。一度事故が起きてしまえば自分の子どもが死ぬまでも帰って来れなくなる場所になってしまう。その点を、踏み込んで考えるべきだと思う。

NPO

環境カウンセラーとして伝え続けた被災地の状況

南相馬市

長澤 利枝 NPO 法人福島環境カウンセラー協会

取材日 2012.09.11

地球環境の保護・改善に対して、行政、事業者、市民団体及び一般市民などと連携し、環境保全意識の高揚、環境経営の構築・推進、人材育成等の方策に関する事業を行ない、現在及び将来に係る人類共通の課題である地球環境保全に寄与することを目的に設立された。震災後は避難所を訪問し避難者のメンタルケアを中心に様々な支援活動を行なってきた。

3月11日 14時46分

別棟の2階で書道教室を開いている。教室の準備をして生徒を待っている時、地震が来た。初めはたいしたことはないだろうと思ったが、やがてもの凄い揺れとなり、慌てて外に出て母屋に戻った。自宅は高台にあり、母屋からは海が見渡せる。3時30分頃、夫が海の方に真っ白な砂埃を見た。松の木よりも上まで舞い上がっているのを見てあれは何だろうかと首をひねっていた。そのうちに高台を目指して逃げてきた人の車で隣の空き地はいっぱいになった。

みんなが海の方を見ていた。直後に津波の第一波が到達し、その様をただ呆然と見ていた。国道6

号線より太平洋側の地区は壊滅状態となった。その夜は空き地に避難してきた人たちのために2階を開放し、何とか用意できたおにぎりを食べてもらって一晩を過ごした。

逃げてきた人たちに聞くと、防災無線は聞こえなかったという。ここの地域の人たちは過去にも津波の経験がほとんどなく、来ても50cm程度位の認識だ。大丈夫だろうと自宅に残っていた方たちが皆犠牲になってしまった。逃げてきた人たちは第一波を見ながら逃げてきたという。私の住んでいる地区でも30人近くが亡くなった。まさに想像を絶する光景だった。

津波が引いた後、書道教室に兄妹で通う生徒の両親と祖母が訪ねてきた。祖父が学校まで迎えに

行ったが2人とも見つからず、あらゆる場所を探しているという。後日、2人とも津波にさらわれてしまったのだと聞いた。

福島第一原子力発電所の水素爆発から避難まで

3月12日に福島第一原子力発電所の水素爆発が起こった。停電でテレビが見られなかったこともあり、どうやら原発がやられたので逃げた方がいいと前の家の人から知らされた。猫を2匹飼っていて、娘は事故で体が不自由なこともあり我が家はすぐに避難することは難しく、様子を見ることにした。家は原子力発電所から21km地点にあり、この地域は屋内退避区域に指定された。行政も避難を勧めていて、12日の夜から周囲も避難を始めた。気づけば近所の老夫婦と、我が家の2軒だけが残っていた。

3月16日の夜、状況を確認してから避難をしようと、情報を得るために市役所へ向かった。そこでテレビに映し出された映像を初めて見て、言葉を失った。それまではこれほどの大惨事だとは思っていなかった。夫と2人、しばらくその場から動けなくなっていた。

3月17日に市役所の広報車が回ってきた。7時から中学校で避難についての説明会を行なうという。説明会では18日に最後の避難のためのバスが出るということだった。行政も何とか市民を避難させようと必死だったのだと思う。後日聞いたところでは、とにかく用意されたバスに乗せられて、着いた先で初めてそこが何県の避難先かわかるような状況だったという。

前述した理由もあり、寝耳に水の話であったため、夫は怒りを覚えて避難バス搭乗名簿に名前を書いてこなかった。

19日になり姉とようやく連絡がつき、姉のいる埼玉への避難を勧められた。避難に必要な放射線の測定のため市役所へ向かうと、町はゴースタウンのようになっていた。飼い主を失った犬や猫がたくさんいた。車で10時間をかけてようやく埼玉の戸田市へ避難することになった。

2011年5月、自宅へ戻ると

友人のほとんどが20km圏内の避難区域に住んでいた。津波で家も流され、身内が犠牲になっている人も多かった。江井地区では津波で孤立し、高台のビニールハウスに60人程の人たちが固まって寒い夜を身を寄せながら何も食べずに過ごし、翌日のおにぎりの配給時に水素爆発の音を聞いたという。その後、二次避難で市内の学校に行き4～5日生活したが、さらにその後の避難で地域の



人々はちりぢりばらばらとなってしまった。それで、なかなか連絡も取り合うこともできなかった。自宅へは5月4日に戻った。近所では一番早かった。大勢の自衛隊や機動隊が遺体搜索のために現場へ入っていた。放射能の影響で活動は休止していたが、避難している間の4月29日から再開されたということだった。

市が借りた民間企業の工場建設予定地に、水が引かずまだどろどろのままの瓦礫をダンプカーが行列をなして運んでいく。その様子を見て、どんなことが起きてしまったのだろうと恐ろしく思った。

書道教室の生徒の住んでいた家を訪ねたが、跡形もなかった。生徒自身、生徒の家族も津波と原発であの日を境に人生が全て変わってしまった。

その後は、背中を押されるように環境カウンセラーとして被災地の状況を伝え続けた。8月からNPOや環境カウンセラー協会などが、南相馬市に入り様々な支援を頂くことになった。1年6か月を経た今、多くのかげがえのないネットワークに支えられている。

避難先の生徒たち

どうしてもやらなければならないことが1つあった。書道教室26人の生徒の安否確認だ。子ども達は各地の避難先に散っていた。いろいろなツテをたどって居所を調べた。環境カウンセラーの方が用意してくれた「幸せの黄色いたけとんぼ」や手作りのお人形を持って、宮城県丸森町の避難所へも行った。再会した生徒が「会いたかった」「お習字がしたい」「戻りたい」と抱きついてきた。山梨に避難していた女の子は、朝からずっと私を待っていていたという。会うなり抱きついて来て、手紙を渡してくれた。「将来はお医者さんになって、必ず戻ってくる」と今も頑張っているようだ。お正月には年賀状も届いた。子ども達にとってはつらい環境だと思うが、現実

に向き合って日々生活している姿を見ると、救われる思いだ。

環境カウンセラーとして避難所を回り、避難している方々のメンタルケアにも取り組んだ。ビッグパレットでは荒れている子どもがいて、他のカウンセラー達が手を焼いていた。私は絶対にこの子と対峙すると心に決め対応した。最後には母親の手を引いて、お母さんに竹とんぼをあげたいからひとつ欲しいと、私のもとへやってきてくれた。

震災を振り返って

あまりにも大きすぎて、これから先どれくらいの時間で私たち人間はもとより、失われた地域や自然が回復するのがわからない。現在、福島県環境カウンセラー協会の会長として福島県総合計画審議会の委員に着任し、総合計画の見直しに関わっている。意見は言えるが、自分の気持ちとかい離していてもどかしい部分もある。現場に近い私の意見に対し総合計画は「こうあるべき」という中で折り合いをつけていかなければならない。福島県の危機的な状況を考えると、私がこれまで



冊子「キッズフォトジャーナル」に教え子が掲載された

培ってきたことを意見として出し、施策の中に活かされていくようにする責務もある。本当に福島が再生するかどうかかわからない状況の中、新たな総合計画が福島再生の大きな力になるものであれば、私の役割は果たせると思う。

任意団体 キーワードは「お互い様」

相馬市

小幡 広宣 相馬遊楽応援団

取材日 2012.09.11

福島県相馬市にある同級生8人で立ち上げた市民ボランティア団体「相馬遊楽応援団」。震災後は瓦礫の撤去をはじめ、仮設住宅への緑のカーテンの設置、仕事を失った方々のための支援としてアクリルたわしの製造・販売の支援など精力的に活動している。

3月11日 14時46分

建設関係の会社を経営している。3月は建設業界が忙しい時期だ。普段は現場回り、営業が主な仕事であるが当日は現場に出ていて、トラックを運転していたため地震だとすぐには分からなかった。周囲の人の話を聞くと5分ぐらい続いたということだが、1分ぐらいにしか感じなかった。後ろから追突されたのかなという感覚で、赤信号で停車してやっと地震だと気づいた。現場が気になったが電話が繋がらなかったため、付近の現場を2カ所回り、元請会社の指示に従うようにと声をかけた。その後、原釜にある自宅へ戻り、大した被害が無かったことと、家族全員の無事を確認した。

ひとまず安心したが、南相馬市にある現場と連絡がつかなかったため、心配になり現場へ向かうことにした。トラックから乗り換えた自家用車のテレビでは、3mの津波警報を伝えていた。3mであれば堤防は超えないし大丈夫だろうと思っていたが、途中で10mの警報に切り替わった。相馬の堤防は確か7m前後だから、明らかに超えてしまう高さだ。南相馬へ行くにしても道路の状況がどうなっているのかわからない、行ったところですでに避難しているかもしれない。家族のことも心配になり南相馬市の現場へ向かうことをやめ自宅へ戻ることを決めた。

戻ると、妻子と義母が避難せず家にいた。義父は地区の区長をしていたこともあり消防と一緒に避難指示を出すため出かけていた。「10mの津波警

報が出たから避難するぞ！」と言ったが、妻も義母も本気にせず、家は3階建てだから津波が来たら2階か3階に逃げれば大丈夫と呑気に構えていた。私は津波が確実に来ると思い、とにかく避難しようと急かした。義母は預かっている町内会費を心配してそれだけでも持っていきたいと言っていたが、自分は危険を感じていたため町内会費と命とどちらが大切かを説得し、急いで避難指定所になっている高台の公民館へ向かった。記憶が定かではないが、着いて5分か10分後には人が乗った船や黒い煙を上げながら津波に流される家々を高台から見ることとなった。

ホームページにもその写真を載せているが、自宅は鉄骨で波が当たる面積が少なかったこと、地形や他の建造物が緩衝してくれたことなど、さまざまな要因があつてその形をとどめた。翌日自宅へ行ってみると、3階の部屋で腰の高さほどの位置に津波の跡が残っていた。

当日はそのまま高台の公民館で過ごし、早朝、中学校の体育館の避難所へ移動し、そこで2カ月間生活した。

地震当日の深夜、市役所へ何をしたらいいかを聞きに行くとき重機をあるだけ出してほしいと要請され、翌朝から約1週間は道路を通れるようにするための瓦礫の撤去にあたった。

福島第一原子力発電所の水素爆発

避難所の中でも家族ごとに避難するかしないかが話し合われていた。うちもどうするか話していたが、直ちに健康に害はないという総理大臣の話を聞いて一度とどまった。周囲は続々と避難していった。従業員も15人のうち11人が避難した。私も避難を迷ったが、いろいろ考えた結果、3月18日に妻と子どもだけ私の実家の秋田へ避難させた。だが、慣れない生活の中で余震が続き、大きな震災があつた直後に離れて生活することに不安を感じたのか、妻も子どもも戻りたいと言ってきた。また同じような地震が来て、何百kmも離れたところで妻や子どもに何かあつては心配だ。放射能の被害がどの程度か分からないが、いつ何が起るかも分からない。ここで暮らす以上、原発のリスクを負うことは覚悟しなければいけないが、一緒にいられるのならできるだけ一緒に暮らせた方が良く腹を据えて、妻子を呼び戻した。5月の中旬まで避難所で生活し、現在は仮設住宅で生活している。

相馬遊楽応援団

相馬遊楽応援団は平成20年に相馬をもっと元気にしたいと、同級生8人で立ち上げたボランティア



ア団体だ。相馬の観光地をきれいにすることぐらいならできる。最初は市内でのゴミ拾いを始め、海上保安庁や小名浜港湾事務所などの協力を得て相馬の海をPRするイベントなども実施した。

震災後は震災復興を目的に熊本のNPO法人青年協議会の協力を得て、代表の上村さんにアドバイスをいただきながら県外からのボランティアさんに加わっていただき活動に取り組んだ。

最初に行なったのが、熊本からの支援物資の配給だ。1軒目のスーパーマーケットが開くまで、一軒一軒に物資を届けた。次に避難所の体育館にいる人たちの健康が心配だし、お金も必要だろうと考え、瓦礫の撤去作業に避難所の方たちにも加わっていただき、対価を支払うことにした。原資は東京での募金活動で得て、作業に必要な道具も購入した。避難に伴う犬や猫の問題が出てきたため、犬の避難所を設置することにした。土地を確保し、保健所と調整し、施設を建設、運営にあたった。屋外に出られない子どもたちのために、東京で募金活動をしながらか社会勉強をしてもらう活動もした。0円サマーキャンプや仮設住宅への緑のカーテンの設置など、必要と思えばとにかくやってみた。

これまでの常識では不可能と考えていたことをことごとく成功させることができたのは、ひとえに周囲の支援があつてのことだと思う。

緑のカーテンは、当初の計算で400万円が必要だった。募金でその金額が集まるという保証はない。だが、まずは「やる」と決めないうちは事が進まないと言われた。犬の避難所もしかり。白紙の状態から土地の確保、資材の調達、保健所との打ち合わせ、すべて1週間で準備した。無理だと思っていたことも、やってみれば案外できるということを上村さんに教えてもらった。それが正しいかどうかはわからない。大分無理なこともやったし、結果オーライだったただけであつて、一歩間違えば危険なことたくさんあつたと思う。でも躊躇するのではなく、まずアクションを起こすこ

とが大切だということを半年間で学んだ。同時に、いつまでも外からの支援に頼るばかりではいけないと思うようになった。震災から半年が経過し、上村さんも相馬を離れることとなりここからは相馬のために自分たちだけでやってみようと心に決めた。

市民にできることを考える

やる気のある人をサポートしていくのがボランティアだし、それが本当の支援だ。仮設住宅に住み仕事を失った女性達を募ってアクリルたわしを作って売ることにした。2011年10月ぐらいから構想をあたため、始めたのは2012年3月。全国から沢山の方々の応援を頂き9月末までに8,000個を販売した。作り手は10名～15名程度。1個300円で販売し、100円が作り手さんの収入になる。原材料などのコストを引いた残りは、新商品開発や新企画のための費用などに充てる予定だ。そのほか、食品の放射性物質の測定を民間団体に依頼して、数値をブログで公開している。市でも検査は行なっているが、行政に任せきり、依存することは危険なことと考え市民にもできることはやるという気持ちが活動のベースになっている。これまで行政にすべてを任せ依存してきたことが今回の大震災後の混乱を拡大させたのだと思っている。震災後の行政の対応を非難する声は多いが、市民にも責任がある。あの当時の行政職員は、目の下にクマを作って対応していた。それでも追い付かない現状があった。我々市民は行政に与えてもらうのが当然と思っていたが、それが間違いであったことに気づかなくはないかと思っている。原発問題や政治問題に対して、日本国民はあまりにも専門家に任せきりで、依存しすぎている。依存するということは、ある意味無関心であるともいえる。

食品検査は、無関心をやめなければという意味もある。市が検査をしているから良い、国が大丈夫と言っているから大丈夫ではなく、万が一行政が機能しなかった時、我々市民にも何かしらの行動ができる体制づくりをしておきたい。最初は風評被害の助長だと非難されるかと思っていたが、今のところはない。持論をブログに書いているおかげもあるかもしれない。危険だとも言えないし安全だとも言えない、それを無責任だという人がいるかもしれないが、自分の子どもに食べさせるならやっぱり放射能は無い方が良い。私は5ベクレルくらいだったら食べる、でも自分の子どもに5ベクレル大丈夫だよと食べさせるか？検出された食品と未検出の食品があったら、絶対無い方を食べさせると思う。ブログにはそんな持論を公表している。もう一つ、市政勉強会をしようと、相馬



編み手の皆さん

市の市議会議員の方たちを招いて意見交換を行なっている。無関心を続けるのではなく、自分達が暮らす街の政治や復興に興味を持ってもらうためだ。

活動を「やらせていただいている」

犬の避難所の運営費に、個人の方から匿名で100万円の寄付があった。あまりの大金に驚き、どうにかお礼をしたいと銀行に追跡をお願いしたが、名乗るつもりはない、とにかく応援しているとだけ伝えてほしいとの伝言だけが返ってきた。

お金だけではなく、そんなことまでしてくれるのかと思う出来事もあったし、ボランティア活動に心から感謝されると、こちらも嬉しくなる。それがモチベーションであり、やっていてよかったと思う瞬間だ。

上村さんからは、「やってあげている」のではなく「やらせていただいている」のだと、それを忘れてはいけないと何度も言われた。やってあげていると思うから見返りを求めるし、ありがとうと言われないことに不満を感じたりする。やらせていただいているのだから、ありがとうと言われなくて当然だ。それはまだ呑み込めていないが、そう思うように心がけている。

震災を振り返って

信仰心はないし神や霊の存在を信じていないが、1年半経過した今、大震災は神様が人間に対して送ったひとつのメッセージだと思っている。我々が気づかなくはないかというのは、依存や無関心ではいけないこと、お互い様という心を思い出すようにと言われているのだと思う。

アクリルたわしの趣旨文には「お互い様の心を広めたい」と書いた。どこかに呼ばれていった時も必ず「お互い様だよ、支援じゃないよ」と言って

いる。一方的に何かをしてもらうつもりはなく、支援してもらったら必ず何かの形で返したいと思っている。リクエストがあれば震災の経験を語るし、相馬に來たいという人がいれば仕事を休んでも、案内する。一日つぶしてでもお互い様という心の大切さを伝えたいと思っている。

宮城県のスコープ団の団長さんとお会いする機会があった。団長さんも「復旧とか復興ではないんだ。お互い様って言う気持ちなんだよ」と、自分がずっと思っていた事と同じことを仰っていた。これから日本が良い方へ向いていくためのキーワードは「お互い様」だと思っている。

今回の大震災では多くの命が奪われ、その方々や家族の心情を察すると軽々しいことは言えないが、生き残った我々はこの体験から気づいたことを生かしていかなければならない。私にとってその答えが「お互い様」である。この気持ちを持つ

ことを実践し発信していく事が福島・東北の復興に繋がり、亡くなった方々へのせめてもの報いだと思っている。



犬の避難所

NPO

相馬市

震災後の思い、志が未来に伝わるものに

新妻 香織 NPO 法人フー太郎の森基金

3.11 あの時
P68 Report. 31 の続きです

取材日 2012.09.14

1998年、アフリカの緑化と水源開発を行なう「NPO 法人フー太郎の森基金」を創設、代表。国内においては2000年松川浦の環境保護団体「はぜっ子倶楽部」創設、代表。東日本大震災後は、「(社) Fukushima市民発電」「(社) 東北お遍路プロジェクト」を創設、ともに理事長。また相馬市市議会議員になり、津波と原発事故の被災地復興に取り組む。

現在までの活動

津波で故郷も実家も流されてしまった。事務所を置いている自宅は2軒前で津波が止まってくれ、たまたま残った。周りの家は破壊され家族を失った方もいて、あまりの惨状に涙も出なかった。そのような状況の時には、私は落ち込む前に逆に何かやらなければとアドレナリンが出る性格のようだ。震災以降、猛烈に走ってきた。しかし最近になって震災の映像を見ながら話している時、声が詰まって話ができなくなることがある。今までは緊張していたのだなということがよく分かった。

私が属する「フー太郎の森基金」と「はぜっ子倶楽部」の相馬市のメンバーを中心に、鎌倉からやってくる青年ら、県外の会員、ボランティアセンターから派遣されるボランティアの皆さんらが加わって、様々な支援活動を行なった。まず緊急支援として、炊き出しや瓦礫の撤去を行なった。次は避難所から仮設住宅へ移る人たちの生活支援をする



ため、全国から日用品を集めて配った。また在宅で被災した人たちが何の支援も受けていなかったため、全戸アンケートを取り、必要なものを早稲田のマッチングサイトなどから支援を受け届けた。

この辺りではスーパーマーケットが2軒流されて

しまっていたので、買い物は3.5km先のスーパーまで行かなければならなかった。市民からは「タイヤの付いているものなら何でも欲しい」そんな声が聞かれた。そこで全国からきれいにした放置自転車を600台いただいた。中には新品の提供もあり、通学や通勤、買い物に、皆さんが利用して下さっていた。

物資の提供の次に取り組んだのが、町づくりのためのゼミナールだ。私たちは故郷を失くしてしまっただが、それをどのように再建していくのか、市民も勉強して声を市に上げていきたいと思います、と、「松川浦の未来を語るゼミナール」と題して2011年8月から3月まで毎月1回実施した。登録は120名程度で毎回の参加者は50人前後だった。この時期の福島だからこそ来てもらえるという、著名なオピニオンリーダーらが、建築や町づくり、ナショナルトラストといった分野について熱心に語ってくれた。これは私自身にとっても非常に勉強になった。

市議会議員への立候補、当選

今回の震災はあまりにも破壊が大きすぎて、市民活動のレベルでは解決できない問題が多いことを痛いほど感じた。市民活動でできることはほんの僅かだった。確かに物資の配布やセミナーの開催も喜ばれてはいたが、実際に上がってきた声を市につなごうとしてもなかなかパイプができなかった。市にオブザーバーとしての参加を要請しても駄目。都市計画審議会の委員の公募があり、ここに入れば町づくりの声をつなげられるかと思い応募したが落ちてしまった。どうしても次のステップが踏み出せず、八方ふさがりの状態だった。

そんな時、2011年9月のニュースで県議会議員の選挙と市議会議員の選挙を11月20日に同日で行なうという報道が流れた。相馬市の市議会議員の選挙は4月の予定だったが震災で延び延びになっていた。1年ぐらい延びるだろうと言われていたが、それがいいよいよ行なわれるというのだ。「何だ、こんな方法もあったではないか！」と思った。私が議員になれば市民の声が市に届く。恐らく今後の4年間で被災地のほとんどの計画が立つだろう、何事も計画が全てであって、計画ができなくなってからは動かせない。決まった後で、こういう風になりましたと言われても、私たちはどうしようもない。

その夕飯時のニュースが終わるか終わらないかのうちに、「私、選挙に出ます。」と家族に宣言した。みんな驚いた。普段私のやることに理解のある夫は「絶対反対だ！」と言った。しかし、「今やらなければ私はきっと後悔する。」と立候補を決意した。



撮影：2011.7.16 全国から送られた自転車を相馬の被災者600名に配布した

もともと政治家は嫌いだった。世の中は市民活動で変えていけると、1988年からNGOを作り活動してきたが、その限界を今回の震災で思い知らされた。政治家を嫌いなどと言っている場合ではない。選挙までは時間がなかった。おまけに経験もない。資金もない。方法も知らなかった。20代ではないが「20代コネなしが市議会議員になる方法」という本を一冊だけ読んで参考にした。昔編集者だった頃の友人のカメラマンが、ポスターの写真を撮りに東京から飛んできてくれた。選対委員長は最後まで居なかった。被災した同級生や支援活動に取り組む仲間たち、隣組のご近所がみんな手伝いに来てくれた。仮設から通いながら同級生がウグイス嬢をやってくれ、強面の漁師の同級生も白手袋をして選挙カーから手を振ってくれた。周りからは「票が減るからやめろ」などとからかわれていた。最後まで何をやってよいのかわからなかった。出陣式や事務所開きなど何をどうすればよいか勝手がわからず、「知り合いの議員に聞いてみる」と前日の夜に電話したりした。不謹慎だが、そんなこと一つ一つが愉快だった。だけどパンフレットだけは誰にも負けずに勝負できるものを作った。これを見たら私に投票してくれるだろうと自信の持てるものを作り、皆さんに見てもらうことを徹底した。結果、私は3位で当選させていただいた。みんなの力が私をここまで導いてくれていた。

市民活動と議員としての活動

議員になった後も、市民活動は継続して行なっている。たとえばエチオピアでの緑化事業。JICAから5,000万円の予算を受け、3年間で150万本の苗木を植える計画で、初年度は50万本、2年目は70万本、3年目は30万本という3年計画が

あった。そのうちの2年目の一番重要な年度に震災が起き、しかも3月は、エチオピアは苗木づくりの一番大切な時期だった。呆れられるが、原発が爆発している時に、どうやって海外送金するかを話し合っていた。

どう見ても相馬市の状況はエチオピアより悲惨だった。こういう状況の中でもエチオピアに支援を続けていくべきか私は悩む。自分一人で始めた事業が、エチオピアの世界遺産の村を緑に変え、外務大臣から表彰されるまでの事業になったことは誇るべきことでもある。会員の皆さんのためにも何とか継続したいと考えている。

それ以外にも被災地では「東北お遍路プロジェクト」をスタートさせている。「お遍路」というのは究極のスタンプラリーだと私は思っている。1カ所でも抜けていたら、必ずそこに行きたいと人々は考えるはずだ。そうすることで東北の被災地に、福島に、人を呼び込めると思うのだ。現在青森、岩手、宮城、福島の津波被災地の市町村に2カ所程度の巡礼ポイントを設けて、それらを結ぶ道を作ろうと計画している。このプロジェクトの説明のために青森、岩手を訪問した際「我々は自分たちの町をどう復興させるかだけを考えていた。東北の被災地全体で観光客を招こうという発想がなかった。」と喜んでいただいた。

震災後の私の行動の原動力は、「償い」かもしれない。なぜ、こんなに自分を駆り立てられるのかというと、次世代に対して取り返しの付かないことをしてしまった、償いきれないことをしてしまったという思いがあるからだ。

大学2年の時に原発のことを知ってからずっと反原発だ。12年前から住まいには太陽光発電を設置し原発の電気は使わないようにしようと思ってきた。プルサーマル導入に際しても、県民の意見を聞く会で反対を唱えてきた。原発事故はこういう電気の使い方をしてきた私たちの世代すべての責任でもある。震災後、10日間相馬を離れていたが、帰ってくる決心をしたのも、次世代に1mmでも良い相馬市を手渡さなければならないという思いからだ。

福島県は国に先んじて2040年までに原発ゼロを決定した。福島が変わらなければ日本は変わらないだろう。形にしていかなければ何も変わっていない。言っているだけではだめだ。まず実践しようと、市民発電会社を作り、一般社団法人化する準備を行なっている。最初は72kwだけだが工場の屋根に設置した太陽光発電から始め、次は小水力発電を目指そうと考えている。南ドイツのシェーナウは1人の主婦の「原発は嫌だ」という声から自然エネルギー100%の町になった。相馬市を日本のシェーナウにしようと呼びかけている。

震災後、福島の子どもたちは福島というだけで重い十字架を背負ってしまった。福島の子どもたちをどう育てていくかというのが私たちの大きな課題だ。子どもたちには広い視野を持って強く生きて欲しい。自分で道を切り開くために学力、体力をつけさせ、地道な努力をすることや相手を思いやる豊かな心も必要だ。そんなことから相馬の子どもたちはみんな馬に乗れるようにしたい。相馬野馬追祭りの後継者を育成できるのはもちろんだが、馬場を作って常に馬に接することができればホースセラピーにもなる。そういう場所を作りたいと目論んでいる。その他まだ形になっていないプロジェクトがたくさんある。

これから

松川浦は東北で一番生物多様性が高い干潟だった。しかし震災直後の松川浦は、その楽園の様相が消え失せ、どこか別の惑星のように見えた。砂州は決壊して外洋とつながり、白砂青松の松林は津波で全て無くなった。現在砂州の土盛りの計画が進行中で、今が正念場と思っている。移行帯をどう創出するか、林帯幅の考慮も必要だ。前の状態に復旧すればよいという発想ではなく、どうせやるのであれば後世の人たちが「いいものを残してくれた」と言ってくれるものにしたい。それは私がやるべきことだと思っている。またまちづくり協議会やまちづくり条例を作ったり、議員だからこその仕事をやっていこうと思っている。私たちが震災後どんな思いで町を再建していったか、その志が未来に伝わるものになればいいと願っている。



撮影：2012.2.22 「東北お遍路プロジェクト」を始めるに当たり、青森、岩手の被災全市町村を訪問して説明に歩いた

任意団体「ありがとうからはじめよう！」

南相馬市

須藤 栄治 つながろう 南相馬！

取材日 2012.09.14

支援していただいたすべての人へ“ありがとう！”の気持ちを伝えるとともに、みんなが手を取り合いつながることで郷土の誇りを取り戻し、一度は人がいなくなった街を感謝の気持ちが溢れる街に変え、活気ある街を取り戻すため情報発信することでふるさとを再生していきます！をスローガンに、南相馬で復興支援活動を行なっている。

3月11日 14時46分

経営している店の開店準備をしている時に地震が起きた。その大きさに驚いて思わず店の外に出た。近所の人たちもみんな外に出ていた。収まったかなと思い店の中に戻ると、再び大きな揺れが来た。お酒のボトルは棚から落ちて割れていた。すぐに近所のお店はどうなっているのか様子を見に行った。ある店のテレビの画面に映し出されていた津波の映像を見て「これはただごとではない」と思った。

この周辺はもともと強固な地盤ということもあり、電気、水道、ガスなどのライフラインにダメージはなかった。自宅は山側に近い方なので津波の被害もなく家屋も幸い無事だった。

当日は店に予約が入っていたが、この地震の影響でお客さんは来ないだろうと思っていた。近所の焼き鳥屋さんは、「うちではボトルが1本しか割れなかったから営業するよ。」と言っていた。予約時間の7時まで待って、お客さんが来ないことを確認して自宅へ戻った。それからはテレビにかじりついて震災のニュースに見入っていた。

つながろう南相馬

3月14日に3号機が爆発した後、母と一緒に会津若松で避難生活をした。出かける所もない缶詰状態で、流れてくる情報は原発の状況ばかりで、先行きがどうなるかわからなかった。2週間ほどで「何もしていない状況」に耐えられなくなった。南相馬市は原発から30km圏内のため、支援物資が届かないというニュースが流れ、テレビでは市長や近所の病院の院長が支援を要請していた。身近な人が地元で頑張っているのを観て、自分も何かしたいと思い3月下旬に南相馬へ戻った。店の後片付けをしていると、大町病院の看護師長さんが訪ねてきた。「病院が4月4日に再開する。みんなで食事会をしたいので、その日にお店を開けて欲しい。」と言う。この日に合わせてお店の再開を決意した。



一生懸命頑張っている人たちに感謝の気持ちを何かしらの形で表現したいとずっと考えていた。「ありがとうからはじめよう！」というキャッチフレーズを考え、地元でクリーニング店を営む高橋さんと一緒にのぼりを作ることを決めた。デザインはすべて友人のデザイナーが担当し、最初の活動資金は高橋さんに提供していただいた。のぼりは当初サンプルで5枚作り、そのあと400枚を作って地元の商店街に買ってもらい、掲げてもらった。チャリティーライブの開催や、現場の声を外に伝えるという趣旨で東京や静岡で南相馬市の現状を話す活動も行なった。

原発事故を受けて

自分が生まれた時には既に近くに原発があった。既にできてしまっている原発は稼働していいようにいまいが、完全に無くしてしまわない限り危険性は変わらない。原発問題は多岐にわたっていて複雑だが、今後をどうするのが問題だと思っている。補償だけではなく、語り継ぐべきものや次の世代に何を残すのが大事だ。人がどう生きるかということ問われている。その部分は大事にして、発信していかなければならないと思う。震災が起きて原発事故が起きて、人と人とのつながりの大切さ、コミュニティの大切さ、家族の絆、

助けてくれる人がいること、選択することの自由がある幸せなど、どこかの地域や国に行っても通じることや気づかされたと思う。今年の6月にリオ+20に参加させてもらった。そこで活動の報告を行ない、皆さんにとって幸せとは何でしょうかと問いかけた時に「人と人とのつながり」という答えが返ってきた。それは宗教や人種が変わっても共通の答えだった。

3.11 を振り返って

色々な意味で価値観を問われていると思う。政治的プロセスは政治的プロセスとしてやらなければいけないが、民間でできることは民間で、自分たちでできることは自分たちでという流れを作り、必要なところは政治家やNPOなどの協力を得て、行政の理解を得ながら協働していく、そうした循環を作るための仕組みが必要なのかなと思う。そうでなければ各地域によって異なる問題にも対処できず、ニーズに合わないものになる。自分たちに何が必要なのか、ダイアログ等の場で話し合い、発信していく時代になってきたと思う。今、南相馬にいて感じることは、情報が早く、外部から人が入って来ていろんな刺激を受けているということ。他ではなかなか実現できないことがここでは簡単にできたりする。すべてが壊れ、ある意味で国に見放された部分もある。行政に頼ってばかりいないで、自分たちでなにかやらなければと動いている人が多い。市民活動が広がり、いろいろなものをもう一度作り上げられる、ここじゃないとできないことをやっていける場所でもある。そうした強みを活かしていきたい。

これからの課題

若い人が動いていないし、活動の場が無いと思う。いままでの活動でも同じで、外で原発の状況を訴えるのも大事だと思うが、それだけでは人を惹き付けたり、メッセージを届けるのは厳しいのではないだろうか。

自分たちにこれから何ができるか、若い人たちと何かできることはないのかと、新しいことを始めようと動き出したが、そこに参加する人の平均年齢、復興会議に参加する人たちの平均年齢は高い。どこに行っても同じだと思う。被災地では若者が外へ流出してしまっている。そこには若者が夢を見られない現状がある。

一方で、復興ライブを開催すると多くの若者が参加している。そのエネルギーをどうにかして町づくりや復興会議のような場所に出せないかと考えている。話をしてみるとみんな熱い思いを持っている。気持ちを持った若者たちの受け皿や、発信

する場が無いというのは問題だ。若者たちをつないで声を発信する場を作っていけたらと思う。リオ+20の最終日の分科会で、「世の中の半分は若い人たちだから若い人たちがメッセージを発信していかないと持続可能な社会は作れない」と、参加した25か国の全員が言っていた。人種や宗教が異なっても同じ考えを持っているのだなと思った。

どこへ行っても過疎化・高齢化が進んでいて、これからは若い人たちに頑張ってもらわないとだめだと言われる。しかし、若い人たちを育てる環境が無いように思う。専門家たちが、上からものを言ってもなかなか若い人には響かない。専門家たちが常に周りにいて、若い人たちのビジョンを建設的に応援してくれるような仕組みがあればいいと思う。

これから

今行なっているのが無線塔空想局というプロジェクトだ。無線塔が無くなってから今年で30年になる。年配の人にとっては出かけて帰ってきた時に無線塔が見えると故郷へ帰ってきた気持ちになる、原町のシンボルだった。30年前は子どもたちもいっぱいいたし、町にも活気があった。原発の事故について聞くと、「元に戻ればいい」という答えが多く返ってくる。当時の様子を聞くと顔が輝き出す。何かをやりたいんだというメッセージを集めて、自分たちで発信しながら、形にしていくヒントを作れないかと動き始めている。



撮影：2012.6.20～22 ブラジルのリオデジャネイロにて開催された国連持続可能な開発会議（リオ+20）

任意団体

いわき市

今回の震災を何とかカタチに残して、
後世に伝えたい。

小宅 幸一 いわき地域学会

取材日 2012.10.04

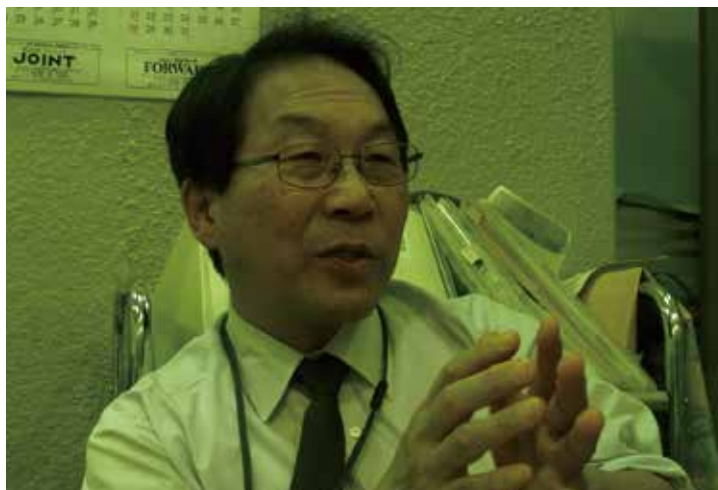
「いわき地域学会」（1984年発足）に所属。地域を継続的に探究し、歴史的・文化的遺産を次世代に引き継ぎたいと考え、活動をしている。「いわき市の合併と都市機能の変遷」（2001年）、「地名の変化にみる、いわきの近代化」（08年）、「いわき市勿来地区地域史1」（12年）など他多数執筆。現在、市嘱託で東日本大震災の記録誌を執筆。

これまで地域史研究に携わって、
考えてきたこと

いわき市は気候が温暖で雪がほとんど降らず、冷害も台風もほとんどなく、また海山の幸が豊富な地域だ。昔から地震などの自然災害も少ないため、市民はこれまで災害に対する危機をあまり感じていなかったのが、正直なところだろう。また、いわき市は約45年前に14市町村が合併した市で、「いわき市」の名称に落ち着くまでに、古くから使用された「磐城」「石城」などが候補としてあったが、どれも過去に使用された経過があり、既成の観念が根付いていて、そのまま使うには抵抗があった。このため平仮名となった経緯がある。合併して以降長い時間が過ぎたが、合併前の市町村にはそれぞれ固有の歴史、文化、産業が育まれており、また市域面積が広いと、現在でも一体化を成すのはなかなか容易でない状況にある。

私は昨年度までいわき市職員として勤務し、勤務のかたわら個人で地域史や伝承の研究を進めてきた。前述したように、市内各地で異なった歴史や文化を有していることから、市全域を網羅している伝承は残っていない。加えて、明治時代以降は石炭産業、臨海工業などが活発となり、生活の糧を求めて、東北各地方の農村などから移転者も多かったことで、昔からの延長として存在する小規模な町村のように後世に伝えていこうという流れにはなっていない。

このような近代いわきのめまぐるしい変化によって、地域の歴史を連続的なものとして容易に捉えきれない状況にあったことから、私は地域的な歴史や地誌を少しでも明らかにしようと考えた。また、市職員として勤務するなかで、業務を通じてさまざまな情報を得ることができるようになり、歴史をまちづくりとして捉え直すことによって活用できる手法はないか、と考えるようになった。その過程で、多くの人が理解でき、また後世の人たちにも理解できる内容で、歴史、石炭産業、河川、地名、絵はがき、地誌、交通、まちづくりなどを主題とした本を、公私に分けて発刊してきた。



3月11日 14時46分

午前中、中学校の卒業式に来賓として出席し、勿来支所に戻って執務をしていた時にどーんと揺れた。とても長い揺れで、6分ほどだったと思う。いわきの歴史を調査してきて、これまで自然災害が少なかったことを知っていたので、これからは自然災害はないと漠然と思っていたが、「やっぱり、大丈夫じゃなかったんだ！」と揺れるなかで感じていた。揺れが止まらず、職員が外へ避難した。私は現場を離れるわけにはいかないと思ったが、建物が潰れる危険性があったので外へ避難せざるを得なかった。災害時には勿来地区災害対策部の本部長となる立場なので、すぐに本部を設置する場所を検討した。とりあえず本部を中庭に設け、対応策を講じているなかでも余震は続いた。情報を収集していると、支所から2kmほど離れた海岸に津波が来ているとの一報が入った。いわき市は60kmの海岸に面しており、昭和35年（1960年）のチリ地震では、2、3人が津波で犠牲となっていたので、津波が来たら漁師は船で沖へ逃げろ、他の人は裏山へ逃げろという話は古老の間で口承されている。しかし、現在は漁業を離れ海との生活が切れてしまった人が多く、若い世代には言い伝えはほとんど伝わっていないのが

現状だ。海沿いの集落では高潮からの避難は時々生じていた。2010年のチリ地震では津波警報が出て避難したにもかかわらず津波は来ず、人々の中には津波の心配はないと認識してしまった人もいた。地震が収まった後、津波を見に行く人もいた。大津波は地震発生から約50分後に到達した。一旦は逃げたものの、再び海岸の自宅に戻って流された人や逃げなかった人、犠牲者の行動はさまざまだったが、いずれも「まさか自分が…」という思いだったろう。

数日の間、原子力発電所の爆発が気がかりだったが、正確な情報は入らない上に、私は地区の何か所にもおよぶ避難所やライフラインの状況把握、その対応で放射線被害に気を回す余裕はなかった。

ライフラインが止まって

停電はしなかったが、まず上水道と都市ガスが止まった。また、2～3日経過し、福島第一原子力発電所（以下、「原発」）の避難区域が広がるにつれて物流は止まり、ガソリンが枯渇していわき市には容易に支援物資や生活用品が届かなくなった。

勿来支所管内では避難所向けの食料備蓄が1日でなくなってしまったので、地域の区長代表を集めて各地域における毎日のおにぎりづくりをお願いした。避難者に何とか食事を提供しなければと必死だった。

市全体では原発事故の関係で支援物資が滞った。この最大の理由は原発事故の風評被害で「危険」として輸送手段が福島県入りしなかったことであるが、この後「大丈夫」となると滞っていた支援物資が溢れるように一気に入ってきた。「YouTube」ではその状況を認識しないまま、支援物資が滞っている状況だけが流れた。この震災では情報の一断面だけを捉えて報道されることが多く、情報が多様化し錯綜していると、いかに真相とかい離するかまざまざと見せつけられる結果となった。

3月20日過ぎになると徐々に物流は回復し、コンビニエンスストアなどの小売店に商品が並ぶようになった。ガソリンも手に入るようになり、だんだんと生活は元に戻りつつあった。

勿来地区の避難所運営は8月20日まで続いた（いわき市で最後）。一般的に避難所の収容人数が少なくなると運営は楽になると思われるが、避難者が個別の事情を抱え、問題が深刻ゆえに避難所から出られないという理由によりかえって難しく、最後まで気が抜けなかった。

2011年4月、直下型地震

4月11、12日の地震は直下型で、ちょうど勿来地区および周辺の真下が震源地だった。ロッカーが吹っ飛び、3月11日とは異なり揺れは短く一瞬のことであった。電気がストップし、一昼夜は回復しなかった。3月11日の地震で止まった水道は原発被害で資材や応援が滞り、1ヶ月をかけて4月10日にはようやく通水率97%まで復旧したが、この誘発地震により通水率20%まで落ちてしまった。しかし、3.11のノウハウがあり、全国から支援を得て、1週間ほどでほぼ復旧した。また、3.11で被害を受けた家屋が、4月の地震でさらに大きな被害に広がった例が市内南部地区を中心に多く見られた。

勿来支所では、山口県宇部市および山陽小野田市の市役所職員が4月から6か月間、交代で人的支援をしてくれた。罹災証明書の申請窓口で対応していただいたが、「福島県の人たちは我慢強い」と驚いていた。関西と比較しての印象だと思うが、言われるまで気づかないことであった。4月上旬、支所に50人以上の地区住民が来て、「災害状況を聞きたい、ついでに地域全体で情報を共有したいから皆で来た」と言った。東北は他とは違うコミュニティを持っているのかもしれない。非常時において、住民の共有意識が高く、統率力が取れているのだと感じた。

地域社会が抱える課題

いわき市はさまざまな歴史、文化を持った地域の集合体として成り立っているという認識が必要である。「平成の大合併」を果たした市町村は、一様にそうした課題を抱えていると思う。いわき市は40年以上も前に大型合併をした。まだ一体化し得ない部分があることについて遅いという考え方もあるが、地域というのは何千年という歴史土壌の上に成り立っている。この歴史認識を基本に考えると、「まだ40年」という答えが見えてくる。今回の大震災では、広域な市域がさまざまな面で功罪をもたらした。60kmにおよぶ海岸部では津波被害に遭った地区民、原発圏内約30km弱の地域から遠い所では約70km離れていることに起因する地区民の意識の違い、市南部地区民に打撃を与えた4月の誘発地震と、市民の震災に対する意識が地区によってそれぞれ異なり、被害の実態が伝わりにくい状況となった。一方、双葉郡などの町村からの原発避難者約2万3千人をスムーズに受け入れできたことが広域都市のメリットとして挙げられる。市長の決断により、一度で市内に避難者を割り振りができた。これが合併前であれば、それぞれの首長との協議が必要であるし、とても

円滑な受け入れができなかったことは、原発事故後に双葉町村の足並みがそろわなかったのをみても明らかと考えられる。

さらに、日本全体の高度経済成長期以降の個人の考え方の変容が気かりである。それ以前は、身の周りの生活全般を個人や地域が自らの責任において実施してきた。しかし、高度経済成長期における税収の増を背景に、個人や地域で実施してきたことを、行政や民間が肩代わりするようになっていった。この結果、地域におけるつながりが解け、個人的な関係も希薄になっていた。現代の地域社会では、結婚式や葬式などの冠婚葬祭を業者が取り仕切り、個人的な悩みやトラブルは行政の困りごと相談や消費生活センターに委ねられ、地域内部における関わりはほとんどなく、地域を意識するのは災害があった時という皮肉な結果となっている。昔、地域の人たちは古老たちに聞きながら皆で協力し、その過程でつながりが生まれた。今はそうしたつながりは薄れ、自分の暮らす地域について何も知らなくても、関心がなくても生活していくことができる社会となってしまった。

勿来地区は3町2村が合併した「旧勿来市」が母体となっている。避難所で食料が不足し、各地域の区長代表を集めておにぎりを作るようお願いした時、旧村だった地域の方が上手いいくと思ったが、町の方が事は上手く運んだ。旧町ではサークル活動などを通じて団体活動が日常的に行われ、その延長上で上手く進んだが、旧村ではすでに「結(ゆい)」などのつながりがほどこけてしまっていて、ほとんど機能しなかった。今回の震災を経験して、あらためて地域のつながりが弱まっていることを実感した。支援に来ていただいた全国とのつながりは一過性にせず、つながりが続くよう努力していきたいと思うが、何と言っても災害直後は「自助」「共助」である。そこに住んでいる地元民が助け合うことができるか、最後は地元力が試されると思う。

地域の歴史を後世に伝えたい

震災を経て現代社会の良い側面も見えてきた。今回の大地震では、被害が広範囲にわたり、復旧へ向けた支援を地域内で実施することが容易でなかった。ところが、全国からすぐにさまざまな、しかも若い人たちが支援に来て、その力にはすご

さを感じた。インターネットが普及して情報がすぐに届くことで風評被害などの弊害も生まれたが、被害の状況がすぐに全国に広まったことで支援はスピーディに届いた。

明治時代初期、いわき地方は200以上の町村で構成されていた。前述したように石炭産業、臨海工業で栄えた歴史を持ち、合併を繰り返してきた。会津地方は変わらない歴史の積み重ねを多く持っているが、いわき市は過去を清算しながら現在の都市像を創ってきた。端的に良く言えば、過去にこだわらないが、すぐに過去を忘れてしまう気質を持っていると言える。そのことは高度経済成長期には上手く作用したが、今は新しいことを一から生み出す時代ではなく、これまでの蓄積を有効に活かさなくてはならない時代となっている。いわき市という存在を意識しながらも、もっと足元を見つめて、つまり合併前の旧市町村にも目を向け、旧市町村一つひとつの活力がいわき市全体の活力につながっていくという発想が必要ではないか。私が旧勿来市、現在の勿来地区の歴史を掘り起こしたいと「いわき市勿来地区地域史」を執筆しているのも、こうした発露に基づくものである。地域に眠っていた津波や地震などの災害についての伝承が掘り起こせるかもしれない。それらは、記録や書物として残さなければ、何も後世には伝わらないと考えるべきだ。それは、人は忘れる存在でもあるからだ。我々は地域のつながりや昔からの伝承などを後世にバトンタッチする手立てを持つ必要がある。「いわき市勿来地区地域史」で今回の震災を何とか形に残して後世に伝えたい。



地区の歴史を後世へ伝える史書

個人

石巻で出会った人たちは、わたしの宝物。

札幌市

有坂 美紀 個人

取材日 2012.07.31

「生き物が大好き！」との思いから大学院で海洋生物を研究した後、水産新聞の記者を経て、オーストラリアへ。帰国後2012年までEPO北海道で持続可能な社会を目指して活動した。東日本大震災後、「ブラキストン線を越えよう！プロジェクト」を立ち上げ、北海道で震災に関する情報発信を行ない自身も積極的に被災地へ通った。

現地での支援活動に取り組む きっかけは一本の電話

「支援活動を手伝ってほしい。」

震災から3週間ほどたった4月初旬、知人から一本の電話があった。電話をくれた彼らは、スマトラ島沖地震の津波被災者を支援するためにNPO法人アプカスを発足させ、普段はスリランカで活動している。そんな中、東日本大震災が起こり沿岸部を大津波が襲った。彼らは自分たちのスリランカでの活動を東北で活かせるのではないかと思い、宮城県石巻市で支援活動をスタートするのだと、その移動中に掛けてきた電話だった。

私が所属しているEPO北海道（北海道環境パートナーシップオフィス）でも、震災発生後の錯綜する情報を少しでも見やすく届けたいと思い、東日本大震災に関する特設WEBページ「ブラキストン線を越えよう！プロジェクト」を3月21日に立ち上げた。現地で支援活動をする彼らをはじめとした北海道の団体に対して、「人、もの、金」という活動に必要な情報を届けることによる後方支援が、中間支援組織で働く自分の役割であり、それを続けていくつもりだった。

ところが1ヶ月も経過すると、「こちらがやりたいと思っていることと、現地が本当に必要としていることが違うのではないか？」と感じるようになった。支援をしたい側と現地のニーズにズレがあることに気が付いた。被災地の様子を見ずに後方支援をすることは、もう限界だった。

被災地を見て決意したこと

前述の知人から「できれば現地に来てほしい」と声をかけられていたこともあり、5月末に初めて石巻を訪れ、南三陸町や気仙沼市本吉町を見て回った。初めて被災地を見た時は、あまりにも甚大な被害に途方に暮れ、「ここで自分にできることは何もない」と無力感に襲われた。それでも、知人やボランティア活動をしている大学生の様子を見て、被災地のために何かできることはないの



かと悩み、自分にできることの答えを出した。ひとつは、これまでと同じように震災関連の情報を伝え続けること。すでにたくさんの人が情報発信を行なっているが、伝える窓口は1つでも多い方が良い。もうひとつは、これまでEPO北海道で携わってきた地域づくりの経験を活かし、被災地でも地域づくりのお手伝いをする事だ。刻一刻と変化する現地のニーズを把握し、自分にできる限りのお手伝いをするためにも、月に一度のペースで北海道から石巻へ通おうと決意した。

本当に必要な人へ情報を届けた「かわら版」

収集した情報は被災地で必要としている人に届け、さらに被災地の様子を北海道にいる人たちに発信していこうと考えた。

石巻を訪れては災害復興支援協議会の定例会議に参加して、支援活動や避難所の様子、課題になっていることなどの情報を他団体やボランティアの方々から収集し、その時点での動きを把握した。また、石巻市役所へ行き、市役所職員の方から支援や復興計画についての情報を聞き取った。特に復興計画に関しては、自分たちのことで手一杯な地元の方々が見逃さないようにと目を光らせた。地域の未来を決める重要な計画が、地元の人たち

の知らない間にできてしまう事態を避けたかったからだ。

2011年9月頃には、支援のばらつきをなくそうとNPO法人いしのまき環境ネット（所在地：石巻市）とNPO法人アプカスとともに「かわら版」を発行した。在宅避難者や小さな規模の仮設住宅には支援情報が届きにくく、情報が得られないために支援を受けられない状況もあった。支援情報だけでなく、明るくなれるニュースを市や新聞社のWeb-siteからピックアップして掲載した。かわら版は、支援が本当に必要な人を探し出し、地域のニーズを拾うために門脇浦屋敷地区の家を一軒一軒訪問して配布した。すると口コミで広がり欲しいという要望も出てきたので、地域の世話人にまとめて渡すことで、より多くの人へ配布してもらうことが可能となった。2011年9月から12月にかけて、計6回のかわら版を発行した。

地域の未来を考える 「お茶っこサロン」

2011年秋には、浦屋敷地区にNPO法人いしのまき環境ネットが地域の方々が交流するための「お茶っこサロン」をオープンした。サロンでは、石巻市の歴史家を講師に招いた学習会も企画した。地域の人たちにこれからのまちづくりを考えてほしいかった。そのためにはまず地域を知り、自分たちが住む石巻をもっと好きになってもらう必要があると考えたためだ。参加者からは「生きがいが感じられる町にしたい」「津波を海で止める方法はないのか」といった意見が飛び交った。さらに、石巻市の復興計画に対して地域として意見を出してもらうことを目指し、地域の課題と未来を考える続編のワークショップを開催した。当日は約20名が参加し、地域の課題や未来への関心の高まりが感じられた。この様子は地元の日日新聞社に掲載され、地元の人たちの更なるやる気呼び起こしたのではないかなと思う。

地域としての意見を行政に届けるまでには至らなかったものの、参加してくれた方の中には「町は行政がつくるのではない！自分たちがつくるのだ！」と、復興計画に対するパブリックコメントを出した人もいた。地元の人たちがこれから自分たちの地域をどのようにしていきたいかを考える、そのきっかけ作りをお手伝いできたのかなと感じている。

お茶っこサロンは年内で終了したが、震災前は2～3軒隣までしか知らなかったご近所同士の関係も、サロンを通してエリアを超えた交流へと広がり、今でもお茶っこする関係が続いている。お茶っこサロンは地域の交流の場として役に立てたのではないかなと思っている。

思い出の写真展

2012年2月、石巻で加藤登紀子さんの慰問ミニライブが開催された。加藤登紀子さんは歌を通して被災者の心身のケアをするため、何度も被災地を訪れている。会場の準備は地元の人たちの手であつという間に終わり、お母さんたちが得意料理を持ち寄ってお汁粉やドーナツを用意してくれた。ミニライブが始まるのを楽しみに待っている来場者に、お母さんたちがはりきってお汁粉を配る様子を見て「女の人たちのパワーってすごいな」と感じた。

このミニライブに合わせて写真展を開催した。ライブが行われた浦屋敷地区は、運動会や敬老会などの地域行事が30年以上続く自治会が活発な地域だった。会場となった会館に保管されていたアルバムには、運動会や川開き、婦人会の集合写真など地域の思い出がたくさん詰まっていた。しかし、津波を被ったまま放置されていた。もちろん、地域の人は個々の生活を考えるのがやっとの状態であり、地域の思い出を振り返る余裕はなかった。ただ、そのままではせつかくの写真が台無しになってしまうし、地域の思い出も消えてしまう。楽しい時を思い出せば、地元の人たちが「よし！もう一度自治会を皆で頑張ろう！」と奮い立ってくれるのではないかと考えた。

NPO法人いしのまき環境ネットを通じて自治会長さんに写真展開催の了承を得た時、会長さんは写真洗浄を他の団体のボランティアさんに依頼してくれた。きれいに洗浄された比較的状态の良い写真をピックアップし、引き伸ばしてライブ会場へ続く階段に展示した。展示の準備は、地元の人たちも協力してくれた。当日、写真の前では昔話に花が咲いていた。展示した写真の中には、津波で亡くなった方の楽しそうな笑顔が写っている。「この時すごく楽しくてね。もう一度、この地域



撮影：2012.2.12 石巻市浦屋敷地区で開催された写真展

で運動会をやりたいわ」と、微笑みながら涙を浮かべる姿に、こちらまで目頭が熱くなった。この写真展を企画して本当に良かったと感じた。

東北での学びを北海道に伝えたい

これまで被災地を見てきて、コミュニティのあり方によって復旧・復興のスピードや質が違ふことを知った。震災で受けた被害を無駄にはしたくない。東北での学びを北海道に伝えて活かさなければと考えた。

そこで、EPO北海道が主催となり、地域ESD（持続可能な開発のための教育）学び合いフォーラム「震災から考えるコミュニティのあり方」を開催した。基調講演には気仙沼市教育委員会の伊東毅浩氏を講師として招き、震災で気づいた日頃のESD活動の重要性と地域のつながりについてお話ししてもらった。気仙沼市はESDを積極的に推進していて、震災時はESD活動を通して築いたネットワークが活かされ、いち早く支援や協力を得ることができた。日頃からのコミュニティ形成がいかに重要であるかを大震災で学んだ。伊東氏から「せっかく北海道を訪れるので、学校でも講演をしたい」と相談をいただいた。そこで、札幌市内2箇所の中学校で、出前講座「命の授業」を企画した。「命の大切さ」や「自分と他者とのつながり」などを一緒に考える趣旨の授業だ。最初は面倒そうな様子で座っていた男の子も、だんだんと真剣になっていく。泣いている子もいた。中学生にとって東北は遠く、どこか他人事の問題だったかもしれない。経験者による大震災の生の声を聞くことで、命について、家族や友人の大切さについて考えるきっかけになったと思う。

被災地を忘れない

支援する立場としては、被災地が自立して復興していくことを阻害するような支援をしてはならないと思っている。地元の人たちが本当にやりたいことの中で、自分がお手伝いできることをやろうと、地域の人たちの声を聴くことを心がけてきた。お茶っこサロンも写真展も、地域の人たちの声を聴くために行なった側面がある。振り返れば、「支援したい、被災地のために何かやりたい」という気持ちを受け止めてくれる地元の人がいるから、私たちは支援活動ができるのだと思う。受け入れてくれる人たちがいて支援活動ができることをありがたいと感じるし、押しつけの支援や独りよがりの活動になっていないかと疑心暗鬼になる心が少し楽になる。活動をする中で、自分には一体何ができるのだろう、石巻の人たちのために何かできているのだろう



情報紙「かわら版」を一軒一軒訪問して配布した

うかと悩んだ時期もあった。ある時、地元の方に「毎月石巻に来てくれて、それだけ気にかけてくれている人がいるってだけで心強いよ」と言われた。何をしなくても石巻を訪れるだけで、被災地を気にかけていること、震災を忘れていないことを体現してくれているのだと。被災地を忘れないでほしいと思っている東北の人が大勢いる中、他地域から被災地を訪れることは、それだけで地元の人に「忘れてないよ」と伝えることに等しい。そしてそれが心の支えになり、元気づけることにもつながっていく。それだけでもいいのかと、ふと肩が軽くなった気がした。今も地域の様子を見るため、そして何か困っていることがないか、自分がお手伝いできることはないかを探しに石巻に来ている。

石巻の人たちは「お隣さん」

この支援活動を通して石巻でできた関係は、生涯続くだろう。もしも私が毎月石巻を訪れなくなっても、コンスタントに会わなくなったとしても、ずっとお互いに相手を気にかけていられる関係になったと思っている。石巻に来ると地域のおばちゃんが「また来たの！お茶っこ飲んでかいん」と声をかけてくれる。その触れ合いにほっとするし、石巻は私のコミュニティの1つだと感じる。石巻と北海道の距離は遠いけれど、心の距離はまったくない。

たまに石巻を訪れて、地元の人たちとお話したり、一緒に何かを作ったり、一緒に考えたりすることが大事だと思っている。これからも地元の人たちが「やるぞ！」と何か始めようとした時に当然のようにお手伝いするつもりだ。石巻で出会った人たちは、わたしの宝物であり、いつでも「ただいま！」と言える感覚で今後も付き合っていけたら幸せだと思っている。

NPO

本吉町は自然と共生している素敵な町。

函館市

堀池 舞子 小柳 元樹 中村 かれん NPO 法人アプカス

取材日 2012.11.07

NPO 法人アプカスは2004年に発生したインド洋大津波の被災者支援をきっかけに結成し、「対話・自立・持続」をテーマに活動している。そうした支援活動のノウハウを活かし、震災後すぐに宮城県全域で緊急支援活動を、2011年8月からは「中長期支援活動プロジェクト」で宮城県気仙沼市や石巻市に現地スタッフを派遣して支援を行なっている。

3月11日 14時46分

【堀池さん】福島県伊達市で工作中に地震にあった。地域を回る仕事だったので、地域のおばあちゃんのお宅にお邪魔していた。地震に驚き「ひゃー！」と叫びながら、皆で外へ避難した。揺れが落ち着いてからテレビをつけてみると、津波の映像が流れている。衝撃を受け「こんな映像、テレビで映しているの?!」と思った。何が起きているのか訳が分からず、車が津波から逃げている映像をただただ呆然と眺めるしかなかった。私の住んでいる地域ではライフラインは止まらず、水道も井戸水で電気も大丈夫だった。部屋の中の物が壊れることはなく、地震の被害は屋根の瓦がちょっと落ちたくらいだったが、車で20分行ったところの地域では家の中がぐちゃぐちゃになって靴で家の中に入らなければいけなかったり、歩いて10分の所では水道が止まったりとライフラインは止まっていた。

【小柳さん】京都で建築関連の仕事をしていたが、3月上旬に時間ができたので、北海道から南下しながら東日本の建築物を見る旅をしていた。岩手県平泉で中尊寺を見学している時に地震にあった。ものすごい揺れだったが、「あのすごい揺れにも壊れないなんてすごいな」と昔の人の建築技術に感心した。中尊寺は揺れが落ち着いた後も、ぎしぎしと音を立て10分ほど揺れていた。平泉は内陸にあり、周辺には木造建築物しかない。建物が壊れるなどの被害はなかった。揺れはとても大きかったが、現実味がない。テレビや映画の世界に迷い込んだような感覚だった。中尊寺を離れて民家がある方へ行くと、住民が外へ出て騒いでいた。その様子を見てだんだん「大変なことが起きているのかもしれない…」と感じ始めた。電車に乗ろうとしたが、止まっていて動けない。周辺には歩いている人も少なく、情報を聞き出せそうな人もいなかった。どうすることもできずに歩いていると、舞鶴ヶ池の前に民宿があり、その前で建物の修理をしていたおじいちゃんとお



左：中村さん、中央：堀池さん、右：小柳さん

ばあちゃんを見つけた。「電車が止まっていて帰れないので泊めてもらえませんか」とお願いをし、それから計4日ほどお世話になった。その間は情報が遮断されていたが、普通の生活をしていた。お風呂は入れないもののおいしいご飯を出してもらい、一緒に山菜を取りに行くなどのどかな生活を送った。手回し発電型のラジオで情報を集めたが、津波の情報などは得ることができなかった。3日ほどたち、民宿で一緒に泊まっていた出稼ぎの薬屋さんが「黙っていたら商売にならない!」と言って隣町に出かけていった。帰ってくると「大変なことになっている!」と騒いでいる。ちょっと大きな地震だったのだろうと旅行を続けるつもりでいたが、こうして大変な事態が起きているのだと知った。出稼ぎの薬屋さんが「早く帰った方がいいよ」と言う。薬屋さんから話を聞いた周囲の人たちが騒ぎ出した。民宿の方も「いつまでもいいよ」と言っていたのが、「ここにこのままだら大変だから帰った方がいい」と言い出した。電車が止まっていたのでどうしようか困っていると、その薬屋さんが「片道分ぐらいのガソリンならあるから、一緒に帰ろうか」と言ってくれた。日本海側を通り、幸運にも帰ることができた。関東はどうなっているのだろうと気になり、新潟から関東へ向かった。

気仙沼市本吉に出会った理由

【堀池さん】私の出身は静岡県で、震災当時はたまたま福島県で働いていた。放射能の値が比較的高い地域だったので、いろいろと考えた結果2011年7月末に退職した。その後は西日本の友達、東北、北海道など、いろいろな所を回った。その時も宮城県の津波被害にあった町の風景を忘れることができず、だんだんと宮城県や岩手県の津波被害に遭われた地域の方たちの事が気になり始めた。津波被害のあった地域を見て「これまで自分は放射能問題のことしか考えてなかった」と感じた。NPO法人アプカスの気仙沼市本吉駐在員となったきっかけは、大学時代のご縁だ。退職後、出身大学の先生と会った。その後すぐに「2011年5月から酪農学園大学の学生を被災地へ派遣する取り組みがあって、アプカスで学生を受け入れたいのだが、受け入れる人がいない。探している」という話を聞いた。大学の先生から「10月から第2回があるので現地で駐在員をやってほしい。学生を派遣するので、3ヶ月間宮城県か岩手県に行ってください」と言われ、最初は3ヶ月間のつもりだったが、気づけば約1年が経っていた。

【小柳さん】僕は東北で被災し、東京の機能がストップしている状況も見た。しかし、京都へ帰ると何でもない日常の風景が流れていた。友人たちと会って東北や東京の様子を話しても「大変だね」とは言うが強い関心はないようで、僕が抱えている問題意識も伝わらなかった。何か自分ができることはないのかとずっと思っていた。2011年10月、仕事でつながりのあった京都工芸繊維大学の准教授より、NPO法人アプカスという団体が仮設住宅の住環境改善に取り組んでいると聞いたのをきっかけに、短期で被災地に入った。タイミングが合えば何かしたいとずっと感じていて、住環境改善ならばこれまでの仕事のスキルを活かせると思った。短期の活動が終わった後も何かできることがあれば、いつでも行きたいと思っていた。そうしたつながりがあり、2012年5月から駐在員として関わっている。

【中村さん】酪農学園大学の学生派遣の経緯は、震災が起こり「何かしたい」と学生の声が集まってきたことを受けて、酪農学園学生ネットワーク（酪ネット）という団体の顧問の先生を中心に始まった。2011年5月から1週間ずつ5人1組の派遣だ。その間はもちろん授業はあるが公認欠席を取り、交通費は1万円ほどの補填が付いた。希望者が集められ、私もGW明けの派遣で石巻市を訪れた。派遣されるメンバーは募集をかけて集まった学生なので、学年はバラバラで全員初対面だ。

仙台までのフェリーの中で1日交流して、その後かなり濃い1週間を一緒に過ごした。

あの頃はまだ震災が起きてから2ヶ月ほどだったが、仙台駅に到着してあまりにも普通な状態に驚いた。札幌駅と同じくらい賑わっている。自分たちは荷物が多くて、まさにこれからボランティアに行きますという姿を全面に出しすぎだなと焦った。「仙台市民はこんな感じなんだ…」あまり被災地に来た感じがしなかったが、バスに乗って海岸沿いへ行くと、道路の両脇は瓦礫の山で、信号機も動いていなかった。そうした状況を目の当たりにして、現実を受け入れることに精一杯だった。石巻市での活動は、日々避難所を回って物資配りやニーズ調査だ。石巻市から1日かけてトラックに乗り、一番遠いところは気仙沼市小泉まで物資を配りに行った。お風呂は3日に1度、作業が早く終わった時に道の駅へ急いで向かって入った。ご飯は近くのスーパーマーケットで廃棄の食料をもらってきて、皆で調理して食べた。冷蔵庫はないので、保存ができない。活動の拠点での生活は普段の生活とは全く違い、自分の気持ちを整理する暇もなく1週間動いた。

札幌に帰ってからやっとゆっくり振り返りをして、考えることができた。石巻市で活動をしてから被災地のことが気になり、アプカスの事務局の方と連絡を取り合っていた。「場所は石巻市から気仙沼市に変わるが、活動をやるから来ないか」と誘われて、2週間夏休みに気仙沼市へ来て以来、定期的に通っている。

【堀池さん】酪ネットの学生はさまざまな子たちが来る。フェリーの中で仲良くなるグループもあれば、まだ緊張しているグループもある。しかし、活動をする中で、だんだんとすごくフレンドリーになっていく。夏に明石工業高等専門学校（明石工業）の学生もインターンに来ていたが、酪ネットの学生たちと同世代ということもあり、楽しそうにお互いに良い刺激をし合って過ごしていた。活動に来た子が「〇〇さんに会いたい」と言ってもう一度来ることもある。住民さんも見たことのある学生が来ると、とても嬉しそう。

仮設住宅での寒さ対策

【堀池さん】2011年10月から中村かれんさんのような学生を現地で受け入れて、コーディネートしている。その頃の活動は、仮設住宅の寒さ対策だ。学生たちにお手本を見せて、教えながら作業した。作業内容も確定していない最初の頃は、きつと大変だったと思う。私が来てからはすでに周りの方々との関係もできあがっていて、作業内容も決まりマニュアル化されていた。

【小柳さん】僕が2011年10月に短期で被災地に来た時が、まさに作業をマニュアル化しようとしている時だった。ボランティアがせっかく来てくれるのだから、作業内容が分かりやすいように冊子にした方が良いと思った。混乱した当時を思い返すと、現在とは全く違い、体制が整ったと感じる。

【中村さん】仮設住宅の寒さ対策は、小泉中学校の仮設住宅が最初だ。チラシで説明会開催を広報して、集会所で説明会を行ない、希望者を募った。その時は都合がつかない住民の方もいたので、作業をしながら空いた時間にまだ申し込んでいないお宅へ個別で訪ねて取り組みを説明した。

【小柳さん】寒さ対策は女性や学生でもできるように、適性技術（身近で安価な素材を使用し非専門家でも実施可能な技術）と言われる簡単なもの考えた。断熱性能が向上するプチプチシートなどだ。

【堀池さん】簡単と言っても、窓を二重にする内障子の作業は難しかった。カーテンレールを外して、木の棒を打ち込み、またカーテンレールをつける作業を行なうのだが、なかなか同じ穴にとめることができなくて、住民の方にやってもらったこともあった。住民の方々は作業が終わるとお菓子をくれるなど、こちらが申し訳なくなるほどすごく気遣ってくれた。良く見ず知らずの私たちをお宅に入れてくれるなと思った時もあったが、それ以上に寒さに対して不安や心配も大きかったのだろう。

【小柳さん】現在は、去年の対策のメンテナンスや政策提言に備え、データを集めるためにヒアリング調査をしている。

2012年からの新たな取り組み

【堀池さん】2011年12月、寒さ対策の作業が本吉町内の対象としていた仮設住宅の希望するすべてのお宅へ完了した。2012年1月からはいろいろな取り組みを始めている。1つは共同農園だ。畑を借りて、住民の皆さんと一緒に畑をやる取り組みである。20m×15mの敷地を半分だけ使わせてもらって、それを10区画に分けている。参加者にお話を聞くと、「自分で好き勝手にできる場所が欲しかった」と言ってくれる。たまに小さなお子さんと来る参加者の方もいて、今後はもっとたくさんのお子さんが参加できるようになればいいと思う。酪ネットの学生たちが畑仕事をしていると「あんだだち、こんな暑い時に何やってんの」と言ってお水を持ってきてくれた方がいた。地



宮城県気仙沼市本吉町 共同農園

域特有と言うのだろうか。いつも地域の方々の優しさを感じている。

1月に共同農園の希望調査をした時、「いいね」と言ってくれた方も、いざ始めようと3月にまた希望を聞きに行くと、参加したいという方がいなくなってしまった。畑を貸してくださる方、協力してくださる方々の思いを無駄にしてしまうかもしれない、と思いながらも準備を進めた。実際に募集をかけた時に4の方が希望してくれて、本当に良かった。後からまた1名が追加希望し、今では5の方が畑作業をしている（2012年11月7日現在）。参加者から「畑があつて良かったよ」と言ってもらえて、やって良かったなと感じた。次に、住環境改善からコミュニティの再建に関わる活動をしている。殺風景な仮設住宅の集会所の壁面緑化をしたり、暑さ対策でルーフシェードを屋根に設置したり、住環境改善は続いているのだが、7月から「あかりかふえ」というコミュニティの再建に関わる人の居場所づくりを行なっている。普段、集会所などで開催するお茶っこに出てこれない方も夜の時間なら出てこれるのではと考えて、東京の企業と連携して計4回開催した。参加者は100人を越えた地域もあった。内1回は仮設住宅が建っているグラウンドをお借りして、地域の方々にもお手伝いをしてもらい、仮設住宅と地域の方が一緒にになれる空間を作りたいというコンセプトで行なった。その後、「あかりかふえ」で地域のお祭りにお邪魔したこともあり、地域の方からは「いつものお祭りと違うね」と言ってもらえた。

【小柳さん】去年はお祭り自粛ムードだったし、お祭り道具が流されてしまい、今年からどうやっていこうと頭を抱えている地域もあった。また、去年のコミュニティセンター再建で集会所が変わってしまった津谷大沢地区は、アクセスしやすい人、しづらい人という状況が変化したこともあったので、それを含めて今後のお祭りの盛り

上げや地域のコミュニティの再編に「あかりかふえ」の企画を絡めることで協力できないかという考えがあった。

これまでの活動を振り返って

【堀池さん】寒さ対策の時にまだ慣れない学生だけに現場を任せてしまい作業を失敗してしまったことがあった。その時、住民さんから「やってもらわない方が良かったね」と言われ、学生たちも気にしてしまい、住民さんにも嫌な思いをさせてしまった。その失敗もあったせいでなかなかその住民さんと距離を縮めることができずにいたが、2ヶ月ぶりに連絡を取らなければならなくなった。「音楽のイベントをやらせてください」と内容をお話ししてイベントを開催させてもらった。そのイベントがきっかけで距離を縮めることができ、内容もすごく良かったと喜んでもらった。失敗をしてしまったけれども、地域の方と距離を縮めることができたとても印象的な出来事だ。

2011年12月末に本吉町に拠点を構えた。その前の2011年9月から12月までは上沢地区にある集会所を借りていた。コミュニティセンターの再建に取り組んだ津谷大沢地区のキーパソンに相談してこの家を紹介してもらった。以前、学生が来る時期が重なった時に、この拠点で30人はさすがに寝泊まりができないことがあり、「あかりかふえ」を開催した地域のコミュニティセンターを貸してもらったことがある。本当に地元の方々に助けられて、活動を続けることができると感じている。

私はこの12月でアプカスを離れるので、これまで自分がやってきた活動がやりっぱなしにならないように、きちんと次の方に引き継ぎたい。私に関わってきた活動が「あんなことやったね」と地元の人たちの心に少しでも残ればいいなと思っている。振り返ってみると本当にあっという間だった。いろいろなことをやってきたが、まだ自分の中で整理できていない。何かの取り組みが終わるたびに反省する点はあったが、地元の方々がいてくれたから活動をやってこられたのだと感じる。

【小柳さん】これまで活動してきて、本吉の地域のつながりの強さを感じる。地域の皆さんの場所なので、こちら側がすべてやると過剰な支援になりかねない。何かやる時は必ず住民の方々の参加を呼びかけている。最初はそうした呼びかけに応じてくれるのか不安だったが、地元の人たちはシンプルに「いいよ」と返事をくれる。すぐに10人ほど集まり、「ここまでやってもらって申し訳ないから、手伝うよ」と言ってくれる方々ばかりだ。地域づくりに参加することは、この地域に住

む方々のライフワークなのかなと感じる。また、楽しそうに協力している様子を見てると感化され、それは僕の原動力になっていく。

課題は60代、70代の住民の方々の参加が圧倒的に多い点だ。商工会と外部ボランティア団体が協力して地域振興を進めていて、本吉町の大きなイベントの1つであるマンボーサンバというお祭りの反省会に参加したが、平均年齢が50代だった。また、本吉町と商工会で押しているキャラクターがマンボーなのだが、30年ほど前に商工会が決めたそうだ。こうして外部者がたくさん入っている時だからこそ、何か変化があってもいいのではないかと思い、デザイナーに依頼して提案してみたが、若い人は「いいね」と言い、高齢の方は「新しいことはなかなか進まない地域だからねえ」と積極的ではない。地域を盛り上げようとした時、どう若い世代が入れ込める余地を作るのが課題である。集まる世代が偏っているので、そこに何か世代交代が上手くできていない問題があるのではないかと感じている。次の取り組みではその課題について、何かお手伝いできたらいいなと考えている。

本吉町にはたまたま関わるようになった。支援をするということは土地を知ることだと思う。知ったからには、その知ったことを還元して帰りたい。本吉町は自然と共生している素敵な町であり、住民の方々、彼らのスローな生き方が本当に好きだなと感じる。そうした生き方が現代の社会で適合できるような仕組みができればいいなと思っている。これから復興住宅がたくさんできていく中で、林業に注目していきたい。本吉町では林業を生業としてやっている人はいない。そこを底あげできるようなことができればいいなと思っている。資材が今の日本の流通のシステムのように外から入ってくる仕組みではなく、地域にお金が落ちて、地域の人たちが今まで通りの生活を続けられるような産業構造ができて、本吉の人々がこれまでと変わらず幸せに暮らしていければいいと思う。



撮影：2012.8.14 「あかりかふえ」

個人

水戸市

自分たちの力を取り戻すための、
福島での対話の場づくり

廣水 乃生 コミュニティファシリテーション研究所

取材日 2012.12.06

学校教員・講師・塾講師として長く教育に携わる。組織の活性化と対立への介入について専門的なトレーニングを受け、コミュニティファシリテーション研究所を設立。組織・企業で心理的な葛藤を扱う合意形成や、自己成長や気づきを促す対話のワークショップなどを実施している。震災後はファシリテーターとして福島での対話の場づくりに携わる。

3月11日 14時46分

高校で数学を教えていて、6限目が始まり出欠をとり終わったところで揺れが起きた。「あ、地震だ！」と生徒たちが言い始めたが、揺れが大きくなるとは思っていなかった。ところがなかなか揺れが収まらず、2段階くらいの揺れが通過していく感覚を覚えた。「大きいね」「あれ、まだ大きくなるの？」と教室の中はざわめき始め、「これはありえない揺れだ」と皆が思う瞬間があった。実際は外に出てはいけなのだが、男の子が多いクラスだったので「これはやべえぞ！」と言って男の子たちが窓から飛び出してしまった。机の物がすべて落下するほどの揺れで、このままでは建物はどうかなってしまうのではないかと恐怖を感じるほどの揺れであったために、窓から飛び出ってしまったのだろう。すぐ近くにテニスコートがあり、広くて落下物もない。通常であれば窓やドアを開けて机の下にもぐらせるが、このクラスだけ全員窓から出てテニスコートに避難した。「でかかったね」と言いながら周囲を見ると、自転車はすべてなぎ倒され、壁が崩れている。とりあえず皆で原状回復をしようと自転車を戻していたら、また余震が起きた。学校では保護者に迎えに来てもらうなどの対応を行っていたため、道路がガタガタになっている、橋が落ちていた、という情報は迎えに来た保護者から入ってきた。携帯電話のツイッターでコンピナートが炎上している写真を見て、とんでもないことが起こったらしいとなんとなくの情報を得たのは夕方のことだ。

「支援される側」の体験

車で家へ帰る途中、歩いている男の人を見つけた。きっと電車が止まってこの人は歩いて帰るところなのだろうと思い、「乗って行きますか」と声をかけて家まで送って行った。家は線路近くなので、遠巻きに電車が線路上に停まっている姿も見えた。ちなみにその電車が撤去されたのは5月末く



らいだ。

帰宅すると電気も水もすべて止まっていた。家族は中学校に避難していると分かったので、一緒に避難し中学校の体育館で2～3日を過ごした。複雑な気持ちだった。夢の世界にストンと落ちたようだった。まるで悪い夢を見ているような感覚だ。食べ物ほとんどないから、時間になると配給に並ぶ。この状態がどれくらい続くか分からないから、できるだけ体力を使わないよう気にかけていた。1か月もこの状態が続けば、身体的にも精神的にも疲弊する。だから無駄な体力を使わず、弱って病気になるよう親のことを心配していた。

また、社協や消防団の方も皆いわゆる被災者であるが、彼らが一生懸命食べ物を運んだり、作ったり、片づけている姿はなんて生き生きしているのだろうと見えた。一方、配給をもらっている時の自分は無力な存在であるように感じた。寝る場所も食べるものもあり、その他の時間は自由にしていられるけれど、なんて無力な世界なんだろう。人間の尊厳にかかわる状態だ。無力感を感じながら配給に並ぶ毎日を過ごしていると、精神的に落ちていってしまう。すると健康を害することにもつながっていく。風邪をひいたり、病気を招いたりするだろう。炊き出しなど一生懸命に支援してくださる方々がいるおかげでとても助かっていると同時に、その行為は避難者をいかに無力な状況

に置いているかということも痛感した。つまり「支援する側」「支援される側」が分かれていて、「支援される側」に居続けることは精神衛生上よくないことをリアルに感じた。無力化されるとは、こういうことなのだと感じた体験であり、自分にとってこれは大事な気づき・大きな発見であった。

緊急時の支援は、もっと協働的な支援を促す方法があるのではないだろうか。一緒にご飯を作る人を避難している方の中から募集して働いてもらう、動きたい人がいるなら募集する。そのように避難者も参加する余地があったら、もっと精神的に健全に過ごせただろう。

福島に支援に入るきっかけ

「身近な関係をしっかり作り、支えあって暮らしていくのが、持続可能な暮らしに大切だ」と推進している知人・友人が周囲にいる。環境はもちろん、原発に対する意識も高い。事故が起きた瞬間、そういった知人たちの一部は九州や関西の方に家族を連れて避難をした。危険性をよく知っているからこそその行動だが、自分達が「この地域で、皆で支えあうことが大事だね」と言っていた場所を捨ててすぐに逃げてしまった、とも見えた。ただ事ではないし、避難しなければいけない。それぞれ事情があるし、それでいいと思う。でも自分にとってのリアリティとしては、言っていることと違うんじゃないかという思いもあった。地域コミュニティを大事にしなければと言いつつなくなってしまうのはどうなんだろうと揺れた。茨城にいる友人たちは、残るべきか逃げるべきか葛藤していた。その友人たちはこれから子どもを生み育てるつもりと知っていたので「絶対に避難した方がいい、何事もなければ戻ってくればいいし、あるかもしれないうちは避難した方がいい」と強く言って避難を促した。そういう自分もいる。そうした中で福島の裏磐梯にいた友人は、危険を承知で残ると決心をした。自分はそれに心動かされた。こういう人を応援できなかったら、自分の進みたい道から外れていってしまうと思った。大事な人たちに避難してほしいと同時に、残ってできることをやりたいと思う自分もいた。その友人は2011年5月下旬に裏磐梯で「震災を経て」という1泊2日の合宿を企画した。まずその友人ととにかく会って話さなければと思い、参加を決めた。合宿2日目には、福島市内で市民測定所を作ろうとお母さんたちが一生懸命がんばっている集会へ参加できた。子どもをもつお母さんたちの非常に切迫した様子を目の当たりにした時、体育館に避難した時の自分を思い出した。僕は3～4日で体育館の避難所を抜け出したけれど、この人た

ちは2か月以上もずっとこうした空気感の状況にさらされているのだと知った瞬間に、まだ何も終わっていないし、ただならぬ状況がまだここにある、何かしないといけないと思った。

いろいろな不安を抱えながらも一生懸命な福島の人たちと共に、対話を通じて自分達のパワーを取り戻し、自分たちで選んでいくことができる、そういう対話の場をやれないかと裏磐梯の友人たちと考えることにした。「ふくしま」「対話」がキーワードになった。

対話の場づくり

そうして裏磐梯の友人たちと、2011年9月、「絶望の淵を降りて行って希望に出会う合宿」という対話合宿を開催した。非常にショックを受けた部分を未消化のまま先へ行こうとすると、ショックを受けた部分が内部崩壊させていく。たとえばメンタル不全や人間関係のもめごととして表面化する。自分たちはそう考えている。「がんばろう」や「復興」の前にそこで何を感じたのか、それぞれが準備できたタイミングで話したい人が話す場を作り、その人たちが自然に未消化の部分を扱える対話の場をやっていこうと思った。希望や夢や未来の話も大切だが、そこに行く前に絶望や衝撃的な体験にとどまり、しっかり消化していく場にしたいかった。

ある時、「ふくしま会議」で飯館村の人と会う機会があった。裏磐梯の時と同じで、話をするうちにこの人が考えていることを実現していく必要があるんじゃないかと思った。この人が飯館村の道



撮影：2012.1.15 脱原発世界会議ふくしまの部屋から震災以降の声

を切り開くキーパーソンのように思えた。いろいろと話した結果、飯館村の人たちが対話できる場と一緒に作っていくことになった。参加する飯館村の人たちを増やしていく準備をしていて、多様なステークホルダーをつなげることをゴールに目指している。

2011年11月、脱原発世界会議が東京で行なわれた。皆脱原発と言っているが、ここには複雑な事情がある。「福島は何も終わっていないのに、お祭り騒ぎをして福島を置き去りにするのか」「脱原発と言っている人たちは福島を利用しているんじゃないか」という意見や福島の問題に取り組んでこそ本当の原発社会から抜け出していく道が見えるのではないかという考えもある。立ち位置の微妙なズレがある中で、形骸化したイベントになるのを心配したある主催者から声をかけられて脱原発世界会議に関わることになり、全体のコンセプトを作るプロセスを通じて微妙なズレについて話し合い、脱原発世界会議で大切にしていることや何を目指していることかななどを明確にし、全体に共有することができた。それに基づき、参加型でさまざまな立ち位置の参加者の出会いや話し合いがいたるところで起こる仕掛け作りを行なった。福島から始まっていく、福島を忘れないというコンセプトを象徴する福島の様々な声を聴くための場所として「ふくしまの部屋」も作った。ここでは、裏磐梯で生まれた対話の場のコンセプトを引き継いだ、内的な振り返りの機会になるような対話の時間ももつことができた。イベントがゴールではなく、ここからすべてが始まるものにしたという思いがあり、コンセプト通りに脱原発の首長会議などいろいろなものがここから生まれていった。同様に「ふくしまの部屋」をきっかけに福島から関東に避難している人たちの対話の場が生まれた。関東に避難している人たちが話せる場を作りたいという人たちがほぼ月1回ペースで対話の会を開催している。脱原発世界会議のコンセプトとその実現への仕組みや人的配置など、これまでの自分の活動でできた仲間たちとの関係性があったからこそできた場だったと思う。

失ったものから生きる力を得た対話

裏磐梯で行なった対話合宿、脱原発世界会議で行なったふくしまの部屋での「深める対話」、福島関東避難者対話の会（現在進行形）、まぐさ対話の会（飯館村・現在進行形）などさまざまな場をもってきているが、どういった対話の場にもいろいろな立ち位置の方がいる。むしろ多様なステークホルダーをひとつのテーブルにつけていくことが重要である。そうした中で「今日はこのことを話しましょう」とこちらから投げかけるので

はなく、自然と自分から話し出すのをお互いに聞いて、感じたことを話す。自然の流れで話したいことを話してもらうようにしている。もちろんファシリテーター側からすると、ポイントポイントでもう一段、本人が自覚していない大事な面があるんじゃないだろうかと思うところを聞くなど介入はするが、意図的に誘導することはない。どちらかと言えば、参加している人の力をどう取り戻すかに主軸を置いている。人に話すことではじめて自分で気づくこともある。

最も印象に残っているのは、飯館村の対話の会だ。飯館村へ「帰りたい」と言う人もいれば「帰って大丈夫だろうか」と心配する人たちもいる。帰りたい人は除染してもらいたいと言うが、除染しても山だから難しく、除染しても効果がないんじゃないか、あるいはそれはもう僕らが住んでいた飯館村ではないんじゃないか、という言う人もいる。ある時、急に震災前に飯館村でどんな暮らしをしていたかを皆さんが語り出した。飯館村を知らない僕らもその世界に入り込み、飯館村にあった豊かな暮らしを感じた。なんて美しい村で、なんて素敵な暮らしをしていたんだろうねと皆で想いを共有した。

会の最後に参加者の1人が、「こんなに豊かところに自分がいたっていうことを、震災以降初めて思い出しました」と話した。「飯館村のその暮らしは失ってしまったけれど、今自分がありありとそれを感じて、そしてその豊かさを感じた自分がこんなに元気になれるんだということに驚いています」と。つまり、失ったものの中に生きる力がある。本当は僕らの中に失われないで力を持って存在していて、それを僕は感じるができる。単に記憶として思い出すのではなく、「あの時こんなだったよね」とありありと感じられた時、力として活きるのだと思った。失っていると同時に何も失っていない、こんな不思議なことがあるんだと感じた。でも僕らの意識上では現実だけを



撮影：2012.1.15 脱原発世界会議ふくしまの部屋『深める』自立のイメージ

見て、失ってしまったのだと思いつつになったり疲弊したり力を失ってしまう。それは失ったのではなく、どこまで行っても僕らの中でずっと持ち続けることができる。

自然発生的な会話の流れだったが、皆でその力を感じた。そこからすべてが始まるのではないだろうか。人が自然と自分の力にアクセスする瞬間が来るきっかけを持つこと、それが対話の場の一番必要な要素だと思っている。ここからスタートするのが力のある持続可能な復興ではないだろうか。飯館の人たちが大切にしてきたのは何で、これから大切にしたいのは何なのか、それぞれがオープンに話せて、その先にどういう復興（もしかすると再生かもしれない）を自分たちがすべきなのか飯館の人たちが考える場になってほしい。立ち位置の違う人たちがひとつのテーブルについて本当のことを話せる状況がなかったら、分断されてしまう。いろいろな人たちを歓迎していることを、どうやっていろいろな立ち位置の人たちに理解してもらうかを考える努力をするのは主催者や自分たちの役割だ。

大震災を振り返って

キーワードは「自立」だと思う。丸裸になって、自分で考えて判断する、自分で決めていくことに向きあう必要がある。福島にいる人たちは「かわいそうな人たち」ではなくて、福島で出会って共に動いている人たちはある種「戦う人たち」だ。それは、自立への戦い。目の前の困難を通じて、本当の自立に目を覚ました人たちだと思っている。あの困難を越えていくためには、本当に自分で考えて判断することを決心せざるを得なかった。それには痛みも伴っているが、僕らの未来に向かっていくモデルだと思う。

対話の場を通じて、飯館村や福島県の人のための対話の場ではなく、私たち皆の対話の場だと感じている。福島の体験で目を覚ました人たちの声に耳を傾けることで、僕たちが自立について自分で考えて決めていくことがどれだけ大切なのかを知る時間でもある。震災がもたらしたものは困難だけれども、どれだけ僕らがいろいろなものに依存しているかを明らかにした。目を覚ます、自立への機会だと強く感じている。

企業

東京都

大震災から約2年 私たちはどのような未来を選び、行動するのか

藪田 綾子 結結プロジェクト事務局／株式会社クレアン

取材日 2013.02.15

株式会社クレアンは「サステナブルな社会の実現」を目指し、CSRを推進している。東日本大震災への支援として「元気JAPAN！プロジェクト」を立ち上げ、被災地へ首都圏の企業を延べ300社連れていった。認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）では、東北の女性リーダーとのネットワークを中心にした「結結（ゆいゆい）プロジェクト」の事務局を務める。

3月11日 14時46分

地下鉄の階段を上がっている時に、地震が来た。1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災で直下型地震を経験したので「東京が震源地ではないだろう」とすぐに思った。また、揺れている時間がとても長く、横揺れだったので「海側が震源地だったら、津波が来るのではないかと直感した。地震直後には、街の人々は動揺し、「きゃー」と叫ぶ人やビルから飛び出す人がいた。会社に戻るとラックが落ちて書類や本などが散らばり、社内はぐちゃぐちゃだった。すぐに皆で会社の入っているビルの前にある国立科学博物館附属自然教育園前にスタッフを避難させた。震源地を皆で調べると東北らしいと分かった。おそらく電車は止まる



と予想されたので、「絶対に海側には行かないで、帰れる人は早く帰りましょう」と指示し、帰宅を促した。結局、スタッフのほとんどは電車が止まってしまったので歩いて帰宅したり、友人の家に泊まったりした。

会社のスタッフには懐中電灯やブランケット、非常食などが入った防災グッズセットを配っていたので、水や食料は困らなかった。念のため地震が収まってからすぐに近くのコンビニエンスストアに行き、会社に残っていたスタッフのためにお茶やおにぎりなどを買い込んだ。その時はまだコンビニエンスストアは混雑した様子ではなかった。

阪神・淡路大震災の経験から、自宅にはきちんと非常食や水の備蓄があり、すぐには困らなかったが、とにかく情報を集めるために、自宅の近所の沖縄料理屋さんに行った。ここは、近所の住民がいつもご飯を食べたり、飲んだりする場所で普段からコミュニティスペースになっている。地震の後にも近所の人たちが知り合いと一緒に集まってきて、いろいろな情報交換をした。私も夕方からずっとそのお店にテレビを持ち込み、情報収集をした。災害のときに改めて、コミュニティが重要だと感じた。それも普段から活発なコミュニティでなければ災害時には機能しなかっただろう。その晩は私の家に知り合いの友人4人が泊まった。

阪神淡路大震災の経験

阪神・淡路大震災の時、兵庫県西宮市甲子園に住んでいた。実家がお菓子屋さんだったので食べ物には困らなかったが、近所で食べ物を分け合い、1週間以上お風呂にも入れず、ガスや水道の復旧に1ヶ月近くかかり、周りには亡くなった方もいて1年ぐらいは本当に大変だった。そうした経験があるので、災害に対して他の人よりはマインド的には強いのか、今回の震災でもかなり冷静に判断できたと感じる。

けれども、普段からシミュレーションをしていないと、とっさの判断を間違ってしまう。阪神・淡路大震災の時は、ガス臭いからと換気扇をつけて引火し、火事になってしまった例があった。今回の地震の時には、ビルから飛び出す人がいた。危ないのでこれらの行動はしてはいけないと、普通に考えれば分かるが、緊急時には慌てていてなかなか正しい判断ができない。普段から緊急時のさまざまなTPOを考えて、シミュレーションしておかなければならないと思う。

阪神・淡路大震災の後に京都大学防災研究所 巨大災害研究センターの教授とつながりがあり、過去のさまざまな災害の記録をひも解いて研究する会の事務局を約10年間していた。環境と災害は切り離せない。教授から伊勢湾台風などの日本の



撮影：2012.10.19 宮城県南三陸町 第4回車座の視察

かつての災害の詳細情報やスマトラ沖地震、トルコの地震の現地調査、津波に関するいろいろな話を聞いていた。だから今回の地震の時も津波が起こるかもしれないとすぐに想定できたとし、湘南に住むスタッフに危なかったらうちに泊まった方がいいと指示することもできた。まさかここまで広域な被害だとは想像できなかったけれども、一瞬で判断しなければならない状況では、事前に知識があるのとないのとでは全然違うと思う。おそらく今回も津波に関して事前に教えられていたから逃げることでできた人々がいただろう。また、津波は何度も来ることを知っていたら、自宅に戻ったりはしなかっただろう。言葉だけでなく、日頃から避難訓練をやって身体で覚えることも重要だ。

首都圏の企業とともに被災地へ

最初に被災地に入ったのは4月中旬だった。企業のCSR担当者から「どうなっているのか状況を把握して、自分たちにできることで支援したい」と多くの声があった。また、企業は地震発生直後から緊急支援物資や義援金を寄付していたが、「自分たちが身体を動かして直接支援したい」ニーズも多くあった。そこで、企業のCSR担当者を中心に、まずは被災地を実際にしっかりと見て、現地のボランティアを経験しながら、被災地の方々の声を直に聞いてもらうことを目的とし、「企業による石巻訪問先遣隊」を企画した。現地受入と協力を日頃からお付き合いがあるNGOにお願いし、商店街の泥かきなどのボランティアワークを含めたスケジュールを組み立て、企業に参加を呼びかけた。天ぷら油で走るバスを借りて、約50人で石巻市に入った。

初めて被災地を見た時は、テレビなどで集めた情報から自分でイメージしていた世界以上に壮絶で

愕然とした。生臭い臭いがすごくて、360度悲惨な状況だったし、津波で流されたものたちに目をやると、子どものおもちゃや洋服、椅子など…、そこには人々の生活が最近まで普通にあったとイメージできて、すごく悲しかった。最初は涙も出ないほどショックだったが、後から涙が止まらなかった。一緒に行った企業の方々は、初めて被災地を訪れた人がほとんど。本当に驚いてショックを受けていて、言葉数も少なくなっていた。その後、3～20人ほどのグループに分かれて、商店街の各店舗の泥かきをお手伝いした。水を含んだ断熱材は錘のように重く、1日がかかりでも終わらなくて、本当にきつかった。私がお手伝いしたお店はスナックで、そのオーナーがすごく喜んでくださった。津波の被害を受けても無事だったお酒が一本だけあって、オーナーに「ぜひ持って行って」と言われたが、「そんな貴重な物はいただけません。でも、絶対に飲みに来ますから！」と丁寧に断りした。これまで生きてきて、あんなに涙を流して人に喜ばれることはなかったかもしれない。

企業の方々も普段感じることもない感情を抱いたようだった。目の前にこんなに困っている人がいる中で、企業として個人として「何かできないのか」と思いが強かった。「自分たちにできることは何だろう」と、帰りのバスの中では真剣な議論が続いた。インフラ系や保険の企業の方は本業が忙しくて参加できなかったが、本当にさまざまな業種の方々に参加していただいた。企業のCSR担当者人たちは「東北の方々のために何かしたい！」とすぐに動いてくれ、ボランティア休暇制度を整えたり、社員参加のボランティアツアーを実施したりと、その後も継続したボランティア派遣に繋がった。

東北の女性リーダーを中心にした「結結プロジェクト」始動

2011年5月、認定NPO法人女子教育奨励会(JKSK)理事長の木全ミツ氏から「女性は行動しましょう！何かできることはないかしら」と相談の連絡があった。この木全氏の電話から「結結プロジェクト」は始まった。「結結プロジェクト」は頑張っている東北の女性リーダーたちの能力が存分に発揮されるように、首都圏のエキスパートがネットワーク連携し、共に考え、支援、協力、応援していく仕組みだ。復興活動の推進や新しいコミュニティモデル創りのために活動する東北のリーダーたちに、首都圏のエキスパートたちは資金調達、コミュニティビジネスの立ち上げ、マーケティング、特区設置の政策提言などのノウハウや人脈を無償で提供する。

第1回の車座は宿泊施設などの関係から宮城県亶理町で開催することになった。東北で頑張る女性リーダーと「東北の力になりたい」という想いを持つ首都圏の女性エキスパートたちが集う車座を企画。首都圏で活動する社会課題解決の女性エキスパートたちに声をかけると、ほとんどの方が「一緒に行きましょう！」とすぐに動いてくれた。2011年7月、参加者34名で亶理町内ボランティアセンターや津波被害エリアを訪問し、亶理町の方にお話をいろいろ聞いて、「現地課題を解決する具体的行動」をテーマとする意見交換会を実施した。その時はまだ、「現在どのような方が活躍されているのか」「これから何をしたらいいのか」現状を確認して共有する状態だった。これから一緒に考えて何か早く形にすることが大切だと思った。けれども、課題別にテーマを絞って何をするかを考えてみると、いろいろなりソースが足りなかった。特に資金だ。助成金を申請しようと思っても、申請書を書くノウハウもなかったし、どういう助成金があるかも分からなかった。それらを自分たちで調べて、申請書類を書いた。いくつかの案件は、助成金をもらえることになった。しかしながら、このプロジェクトでは気持ちの応援が一番大きいかもしれない。東北地域で甚大な被害を受けた状況を何とかしようと、頑張っている人たちがたくさんいた。ところが、東北の地域柄や風土かもしれないが、頑張る人たちは、頑張りすぎて浮いてしまっている状況があった。そうした中で「頑張っている人はあちこちにいるよ」とお互いに応援し合えるような仲間を作りたいかった。女性はちょっと頑張りすぎてしまうところがあるので、逆に「あまり頑張りすぎないで、頑張らなくて自然体でいいのよ」とエールを送ることもある。また、地域の方々とコミュニケーション



復興プロジェクトで生まれたクリスマスのオーナメント

を密にし、「やりたい！」と言う地域の女性リーダーのサポート役に徹している。あくまでも地域のリーダーが主体で、一緒に考える形が基本だ。私たちが首都圏から提案を持っていくのではなく、現地の人が何をやりたいかじっくりお話を聞くことを徹底して続けている。

車座は定期的開催し、第2回は2011年12月に福島県いわき市で開催、第3回は2012年4月に宮城県石巻市、第4回は10月に宮城県南三陸町と回を重ね、車座で核になった方々は、現在も実行委員として12～13名、延べ参加者は200名以上となった。

「東北グランマのクリスマスオーナメント」復興プロジェクト

結核プロジェクトがきっかけで生まれた復興プロジェクトの代表的な成功事例は、「東北グランマのクリスマスオーナメント」だ。朝から晩まで働いてきた漁師のお母さんたちが被災で生きがいがなくなった仕事を失くしてしまった状況を見て、亘理町の車座に来てくださったオーガニックコットンメーカーの株式会社アバンティ代表取締役の渡邊氏が「何かできることはあるはず」と始めたプロジェクトである。被災地のお婆ちゃん（東北グランマ）たちがオーガニックコットンの残布で手づくりしたクリスマスオーナメントを皆に買ってもらって、東北グランマたちを応援する目的だ。針仕事は皆でおしゃべりしながら進められるので、コミュニティの元気を取り戻すことができる。また、製造過程で出る残布（ざんぷ：裁断後に余った布）を活用し、環境面と経済性もプロジェクトのテーマにしている。2011年冬に行われた各地のクリスマスイベントや百貨店で販売し、オーナメントは約2万個以上売れた。2012年は継続的に地域と連携しながら新たなビジネス創出につなげるため「オーガニックコットンお守りプロジェクト」を展開している。

オーガニックコットンを植える「いわきオーガニックコットンプロジェクト」

「東北グランマのクリスマスオーナメント」プロジェクトが成功すると、いわき産のオーガニックコットンを植える構想が登場した。

亘理町で開催された第1回の車座で、福島県いわき市から来ていたNPO法人ザ・ピープル理事長の吉田氏が、「いわきでもオーガニックコットンをやりたい」とアバンティの渡邊さんとのつながりができた。そこで2011年12月の第2回の車座は福島県いわき市で開催された。大震災以降、福



撮影：2012.10.20 宮城県南三陸町 第4回車座

島やいわきの農業を取り囲む環境は厳しく、先が見えない状況がしばらく続くとされている。農業の再生に向けて、いわきで被災者の仕事を生み出すために立ち上がった「いわきオーガニックコットンプロジェクト」は、いわき市内の人々に動き出す機会を提供すること、新たな地域のつながりを作ること、農地の保全と活用、新たないわきブランドの発信を狙いとし、現在（2013年2月15日現在）15か所でコットンの有機栽培に取り組んでいる。ザ・ピープルが20年前から取り組んでいる古着リサイクル事業の延長線上に栽培事業を位置づけ、栽培からリサイクルまでが輪になると環境教育にもつながると考え、オーガニックコットングッズの商品開発等を行なっている。2012年11月にはオーガニックコットンの綿と種で「フクシマ・オーガニックコットンパイプ」ができた。2012年のエコプロダクツに出展し、当社スタッフも結婚式の引き出物で使って大人気だったという。2013年6月には福島県産のオーガニックコットンを混ぜたTシャツを製品化する予定だ。オーガニックコットンを通してさまざまな人がつながり、福島県いわき市では地域の広場や小学校などでコットンがすくすく育つ様子を見て、子どもも大人も「いわきも大丈夫だ！」と元気づけることにつながった。

今後の課題としては、震災から1～2年目だからオーガニックコットンのプロジェクトは、成功しているのだと思う。「東北グランマのクリスマスオーナメント」も支援したいという皆の関心が高かったから売れたのだろう。今後はきちんと商品化して、皆さんに「ストーリーがあり、可愛いから買いたい」と思ってもらえるようにしたいと考えている。オーガニックコットンをテーマにいろいろなプロジェクトが出ているので、できるだけ多く方にこれらの活動を知ってもらいたいと考えている。

今後の課題

これ以上は地域を広げすぎずに深く関わっていきたいと考えている。これまで4回の車座を宮城県亘理町、福島県いわき市、宮城県石巻市、南三陸町で開催し、第5回は2013年4月に気仙沼での開催を予定している。あまり活動地域を広げると分散してしまうし、地震直後と現在では現地の状況も社会の状況も変わってきているので、これまでと同じスキームでは動けないだろうと思う。これからはやり方を工夫しないと続かないと考えた。車座は5回でいったん終了し、第1回～5回までの参加者をうまくつないで成功事例を作りたい。これまでの車座でビジネスモデルがいくつか出てきたので、その成功事例を他地域で広げていくスキームが良いと思っている。

プロジェクトに共感した企業の方から福島県へ寄付のお話もいただいた。企業との連携もできてきたので、うまく水平展開できたらいいと思う。第1回～4回までの述べ200名の参加者の中には、核になって動いてくれている方々が100名近くいる。一緒にプロジェクトをやってくださる方々は素晴らしい方ばかりで、同じような想いを持った方々が集まってくださったからできたプロジェクトだ。私はそうした方々に「場」を提供するのが役割なのだと感じる。良い形で今後もこの共感ネットワークを広げていきたい。

東北で元気をもらっている

社会をサステナブルな方向に変革したいとの思いからクレンジングを始めて25年、環境の仕事始めて15年になる。仕事を始めた当時は企業がCSRに取り組むかどうかは分からなかったけれども、絶対に大切だからそうならなければならないと信念を持っていた。仕事は趣味でライフワークにもなっている。社会や未来を変えるには、企業も市民も変わらなければならないし、人々の意識もライフスタイルも変えなければならない。そうした意味では東北での取り組みは社会変革にもつながっているかもしれない。

もともとは阪神・淡路大震災の恩返しをしたいと思い東北へ行ったが、実際に東北へ行ってみると大切なことに気づいた人がたくさんいた。「自分の人生において本当に大切なことってなんだっただろう、大切な人って誰だったんだろう」「限られた時間の中で何をしなければならぬのだろうか」とさまざまなことを考えるようになった。阪神・淡路大震災の時に自分が奇跡的に生き延びて、「生きているとはどういうことなのだろう」「命があるということは何をしなければならぬのか」「これからの余生をどう生きるのか」

を真剣に考えた。被災の体験は、人生を正面から向かって見直すきっかけになった。都会では何となく人生を送る人たちが、あるいは日々を忙殺されて考える暇もない人たちが多くの中で、東北へ行く大切なことに気づかされる。私は東北から元気をもらっているのかもしれない。東北で頑張っている人たちとふれ合っていると、人生や生き方を考えて、気づく機会が都会の人たちにももっとあってもいいのではないかと感じる。

実際に企業の方々に東北へ連れていくと「本質的なことが分かった」「人間が生きるとはどういうことか分かった」と言う。私たちの人生はすごくシンプルなはずなのに、なぜこうして難しく考えるのだろうと思う。必要のないことやものがあまりにも多すぎるのかも。東北の人たちとふれ合っていると、そうした本質に突き当たるのだとしみじみと思う。

大震災を振り返って

大震災から約2年と時間が経っているので、だんだん風化している側面はある。先日気仙沼大島へ行った時も、現地の人たちにはだんだん忘れ去られているという危機感があって、復興どころか復旧も進んでいないような状況の中で置き去りにされている悲壮感を感じているようだ。これまでの支援は自分たちがちょっとできることで気持ちの応援をしようと取り組んできたが、もっと社会の仕組みの中に東北を巻き込んでいく必要があると思う。私たちが被災地の話をしても、現場を見なければ「そういうのは必要だけどね…」で終わってしまいがちだ。実際に現場を見なければ、感覚的に理解できないことも多い。日本の未来は超少子高齢化で、毎年20万人ずつ人口も減っているし、老老介護や結婚しない人々が増え、環境問題などさまざまな社会問題が出てくる。ぶち当たる壁がすぐそこにあるのに、現代の社会はみんな避けて通ろうとしているように感じる。

誤解を恐れずに言えば、震災は発想を変えるチャンスだと思う。このまま何もしなかったら、また同じことを繰り返してしまうだろう。大震災は「本当の幸せ」を見直す重要なきっかけになった。震災以降、東京ではマンションなどでBBQや餅つき大会が催され、顔の見える関係づくりや近所同士のコミュニティが見直されている。約2年が経過したことでまた意識は薄れてきているが、私たちはそうしたことが重要だと学んだ。もちろんお金も必要だけれども、お金があっても幸せではない人々は大勢いる。だからお金があるだけではなくて、問題と向き合い「本当に心豊かな生活ってなんだろう」と考え直すことが必要だ。私たちがどのような未来を選んで行動するのか、まさに今がターニングポイントだと感じている。



編集後記

-
- 井上郡康 東日本大震災から2年が過ぎ、時間の流れと共に人々の心境や被災地の問題も変化してきていると取材を通して感じています。
- その中で個人的に注目したのは、「地域の伝承」そして「地名」でした。東北地方では長い歴史の中で先人たちが培った、この地で生き抜くための知恵を伝承や地名という形で残してくれています。特に津波被害が多かった三陸地方では、様々な形で残っていました。今回の東日本大震災では、東日本に甚大な被害をもたらしたと共に多くの学びを残していることも事実です。我々は今回の震災で得られた教訓を生かし、現在の科学技術だけに頼るのではなく、先人からのメッセージをしっかりと受け取り持続可能な社会を後世に残していく事が重要だと改めて感じました。
- 2年目に入った「3.11あの時」レポートは、伝承や地名をはじめ山形県や秋田県での壮絶な支援活動など様々なメッセージが記録されております。多くの震災からの学びを受け取って頂ければ幸いです。
-
- 佐々木雅博 東日本大震災の発生から2年が経過しました。その時間の感じ方は人によって様々だと思います。テレビ、ラジオ、新聞などのメディアでは当時の映像や2年を経過して今なお癒えることのない悲しみ、不自由な生活を余儀なくされている方々の様子、なかなか進まない復興の現状などを伝えていました。
- 3.11あの時、巨大な揺れに恐怖を感じ、ライフラインが途絶えた際の現代の生活の脆さを経験しました。しかし時間の経過と共に震災時の様々な記憶も薄れてきてしまっているように感じます。
- 「3.11あの時」も多くの方にご協力いただき2巻目となりました。震災の記憶を風化させないことに少しでも役立てばと思います。
-
- 三浦純 私は、あの日以降、子どもたちを見る目線が少し変わったように感じます。目線がやわらかくなったような気がします。大震災が精神に変化をもたらしたのかもしれませんが。この子どもたちが大きくなった時、ほとんど記憶の中にはないはずの大震災をどう私たちは伝えていかなければならないのでしょうか。取材先の風景を見る目線も変化しました。今まで生活の営みがあつた場所が閑散とし、訪れたことがなかった場所でも何故か愛しいと感じるようになりました。
- 2年を経過した現在も、依然として多くの課題が山積しています。大震災の記録、記憶を正しく伝承、活用するために、私たちは何をすべきだろう。これは、この大震災に遭遇した全ての人々が、未来のために今、考えなければならないことだと思っています。
- この貴重な多くの証言の数々が、後世に残る大事な財産として、また、あの時を経験していない多くの人々の目に触れる機会があることを切に願っています。
-
- 鈴木美紀子 2011年4月以降、累計74件分の「あの時」と向き合ってきました。大震災から2年、「まだ2年なのか」とまるで10年前の出来事のようにも思え、同時に「もう2年なのか」と相反する思いを抱きます。
- 2冊目の発行となる本冊子では、支援の拠点となった秋田、山形の皆さまにもヒアリングにご協力いただき、隣県の支援者の目線、中間支援組織の目線からのレポートを掲載することができました。1冊目に引き続き、「お互い様」の心を持つことの大切さ、地域の方の目線で活動はもちろん、寄り添うことの大切さ、そして自然に対する畏敬の念と謙虚な心を持つことの大切さが異口同音に語られています。ヒアリングの中で何度も耳にするこれらのキーワードは、現場にいる・現場を知る皆さまが最も伝えたい「教訓」です。EPO東北が「伝える」役割を担うことの大切さを噛みしめながら、多くの方に読んでいただきたい、そして何度でも読み返していただきたいと願いをこめて、本冊子をお届けします。
-
- 小山田陽奈 取材でさまざまな場所を訪れ、多くの方からお話を伺いました。大震災から2年の月日が流れてもなお多く残る課題、また時間が経過したことで出てくる新たな課題…。しかしながら取材を通して、課題と向き合い立ち向かうとする人々のたくましさや強さを知りました。また、報道が伝えきれない事実、ストーリーや感じたことが人の数だけあつたのだと改めて気づかされました。震災後「幸せってなに?」「これからどう生きていくの?」と自己に問いかけたことを、私たちは忘れてはならないと思います。レポートを読み返すと「私たちはあの時に得た教訓をもとに今を暮らしていて、これからその営みを次の世代に伝えていかなければ」と強く感じるとともに、この冊子は東北各地の皆さまとともに作り上げたのだと感謝の気持ちでいっぱいになります。ご協力くださいました皆さま、本当にありがとうございました。1人でも多くの方に読んでいただければ幸いです。
-



【作成・発行】

発行：平成25年5月31日

東北環境パートナーシップオフィス (EPO東北)

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-5-1 オークビル5F

TEL. 022-290-7179 FAX. 022-290-7181

E-mail. info@epo-tohoku.jp

URL. <http://www.epo-tohoku.jp/>



この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。



この印刷物は、環境に配慮した
資材と工場で製造されています。



この印刷物は、
輸送マイルージ低減によるCO2削減や
地産地消に着目し、国産米ぬか油を使用した
新しい環境配慮型インキ「ライスインキ」で印刷しており、
印刷用紙へのリサイクルが可能です。